

太宰治の世界

走れメロスと

人間失格

はじめに

さて、太宰治の『走れメロス』という作品は、一般に「友情」がテーマとされているが、もちろん、それは、まさに「その通り」であるが、しかし、それだけではなく、太宰治の『走れメロス』という作品の中には、もう一つ、太宰治にとっては何よりも「最大のテーマ」でもある、いわゆる「人間が信じられる、信じられない」という最も「大事なテーマ」も提示されているのであり、その「根本問題」についての基礎からの考察になっています。

——一方、『人間失格』という作品では、太宰治の「人間形成」をその「生い立ち」から考察し、「第一の手記」では、太宰治の「幼少期」の「内的事実」（特に「人間恐怖」その他）の考察であり、また、「第二の手記」では、太宰治の「青年期」の「内的事実」（特に「女性観」その他）の考察であり、そして、「第三の手記」では、「鎌倉心中未遂事件」から晩年までの本文に添った詳細な考察であるが、例えば、堀木との関係、シヅ子との出逢い、そのシヅ子とは誰なのか、また、遺書と心中、そして、ヨシ子との出逢い、そのヨシ子とは誰なのか、さらに、妻の姦通、その他、『思ひ出』や『斜陽』それに『津軽』などの「最後の部分」の簡単な考察なども加えてありますので、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和元年五月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

はじめに

走れメロス

序 走れメロス

- 一、 暴君とメロス
- 二、 信じられるとは
- 三、 『走れメロス』の原典は……
- 四、 シラーの『人質』(『小栗孝則』おぐりたかのり訳)
- 五、 親友との再会と村への出発
- 六、 妹の村での結婚式
- 七、 心の中の葛藤(自問自答)
- 八、 迷いからの目覚め
- 九、 メロスと親友の弟子
- 十、 結び

※ 参考文献

目次

人間失格

序 人間失格

- 一、 生い立ち
- 二、 心の中
- 三、 三葉の写真
- 四、 第一の手記
- 五、 第二の手記
- 六、 第三の手記
- 一、 実際の推移
- 二、 堀木と自分
- 三、 シヅ子との出逢い
- 四、 遺書と心中
- 五、 ヨシ子との出逢い
- 六、 罪と姦通
- 七、 衝撃の事実
- 八、 目撃後
- 九、 浮気(不倫)
- 十、 薬と入院
- 十一、 田舎での療養
- 十二、 あとがき
- 十三、 実際の推移
- 七、 思ひ出
- 八、 斜陽
- 九、 津軽
- 十、 富嶽百景

※ 参考文献

走れメロス

例えば、太宰治の数多くの「作品」の中でも、やはり『走れメロス』は、今日でも非常に高い人気を得ているものであり、それゆえ、この「作品」の、一体、どこがどのように優れているのか？ この「問題」について、あらためて考え直してみたいと思う。

\*

\*

まず、冒頭の「本文」は、次のようなものである。「……メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ、この妹は、村の或る律儀な一牧人を、近々、花婿として迎える事になっていた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買いに、はるばる市にやって来たのである。そして、まず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。……」（本文）とある。

\*

\*

まず、冒頭の「本文」を読んだだけでも、メロスに関連した様々な「情報」は、ほとんど書き尽くされているとともに、あとは、王がどういう人物かということぐらいである。しかも、文章は短く、内容も単純かつ明快であり、さらに、スピード感がある。それゆえ、読者は、実に心地よく読み進んで行くことができる。これが読者に人気のある理由の一つかも知れない。——例えば、読みづらい文章、また、難しい漢字や複雑で技巧的な文章、或いは、読んでいて意味のよく分からないような文章、その他、そのような文章は、一般的に、読者からはとかく敬遠されがちなものである。

しかも、ここで最も大事なことは、太宰治の、この『走れメロス』という作品の「冒頭」部分の「内容」というのは、その「妹の結婚」ということを除けば、例えば、「……メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里（具体的な距離まで）はなれた此のシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ。……」というような内容は、少なくとも、シラーの『人質』という作品（詩）の中にはほとんどないものであり、それゆえ、これらは、いわば「太宰治の創作」部分だと言えるものであり、また、次の「町の様子」や「メロスと暴君」との実に生々しい「具体的な対話」内容なども、その多くは「太宰治の創作」部分だと言えるものである。そして、そこにこそ、シラーの『人質』とはまた違う、まさに「太宰治」ならではの彼独自の「考えや想い」（いわば「人となり」）がはつきりと現出しているところでもあるのである。

\*

\*

さて、メロスには竹馬の友があった。セリヌンティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかったのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、まちの様子を怪しく思った。ひっそりしている。もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当たり前だが、なん

だか、夜のせいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になって来た。路で逢った若い衆をつかまえて、何かあったのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたつて、まちは賑やかであった筈だが、と質問した。若い衆は、首を振つて答えなかつた。しばらく歩いて老翁に逢い、今度は、老翁に少し強い口調で聞いてみても答えず、そこで、体を揺さぶつて質問をしてみると、やつと「……王様は、人を殺します」と言う。「……なぜ殺すのか」と聞くと、「……悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心を持つては居りませぬ」と答える。そこで、メロスは、「……たくさんの人を殺したのか」と聞くと、「……はい、はじめは王様の妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣を。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を」と答えるので、「……おどろいた。国王は乱心か」と聞くと、「……いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、というのです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手な暮しをしている者には、人質ひとりずつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。きようは、六人殺されました」と答えるのであった。それを聞いたメロスは、激怒して、「……呆れた王だ。生かして置けぬ」と思うのであった。

\*

\*

メロスは、単純な男であつた。買ひ物を、背負つたままで、のそのそ王城にはいつて行つた。たちまち彼は、巡邏（見回り）の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懐中からは短剣が出て来たので、騒ぎが大きくなつてしまつた。——そして、話は、その捕まつたメロスと王様との会話へと展開する。

## 一、メロスと暴君

メロスは、王の前に引き出される。そして、「……この短刀で何をするつもりであつたか、言え！」と、暴君ディオニスに静かに、けれども威厳を以て問いつめる。それに対して、メロスは、「……市を暴君の手から救うのだ」と悪びれずに答える。「おまえがか？」と、王は、憫笑する。「……仕方の無いやつじゃ。おまえには、わしの孤獨がわからぬ」と言う。メロスは、「言うな！」と叫び、「……人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさえ疑つて居られる」と言う、ディオニスは、「……疑うのが、正当の心構えなのだ、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ」と、暴君は落着いて呟き、ほつと溜息をついた。「……わしだつて、平和を望んでいるのだが」と言う、「……なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か」と、こんどはメロスが嘲笑した。「……罪の無い人を殺して、何が平和だ」と言う、と、「……だまれ、下賤の者」と、王は、さつと顔を挙げて報いた。「……口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまえだつて、いまに、磔になつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ」と暴君は言う。「……ああ、王は伶俐だ。自惚れているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞いなど決してしない」と、メロスは言うのであつた。……

メロスは、死ぬ覚悟はできていた。ただ、ふと妹のことを想ひ出した。そこで、王様に、「……私に情をかけたつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えて下さい。たった一

人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰って来ます」と言うのと、王様は、「ばかな」、「……とんでもない嘘を言うわい。逃がした小鳥が帰って来るといふのか」と唖れた声で低く笑った。「……そうです。帰って来るのです」。「……私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。妹が、私の帰りを待っているのです。そんなに私を信じられないならば、この市にセリヌンティウスという石工がいます。私の無二の親友だ。あれを、人質としてここに置いて行こう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに帰って来なかつたら、あの友人を絞め殺して下さい。そうして下さい」と必死に頼むのだった。

王様は、それに対して、(心の中で)、「……どうせ帰つて来ないにきまつている。この嘘つきに騙された振りをして、離してやるのも面白い。そうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。世の中の、正直者とかいう奴輩にうんと見せつけてやりたいものさ」と思うのであつた。そこで、王様は、メロスに向かつて、「……願ひは、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目の日没までには帰つて来い。おくれたら、その身代りを、きつと殺すぞ。……ちよつとおくられて来るがいい。おまえの罪は、永遠にゆるしてやろうぞ」と言い、そつと北叟笑むのであつた。

## 二、信じられるとは

さて、王様は、人間が信じられないという。それでは、いわゆる「人間が信じられる」というのは、一体、どういうことなのだろうか？ この「根本問題」について考えてみたいと思う。——まず、身近な「動物」から考えてみたいと思うが、例えば、鳥には、有名なローレンツの「刷り込み」というものがある。それは、まさに最初に動くものを「親」だと思ひ込むという習性である。それはもちろん、いわゆる「遺伝子」(つまり「DNA」)の中に「そのような情報」が組み込まれているということである。それゆえ、それは、いわゆる「学習」ではなく、まさに「本能そのもの」(つまり「先天的なもの」)である。つまり、生まれたばかりの「ひな」というのは、最初に動くものを見て、それを「親」だと思ひ込み、そして、それに絶対の「信頼」を寄せているのである。もし、親がその「ひな」を育てようとしなければ、その「ひな」は、やがて「死ぬ」か、或いは、他の動物の「エサ」になつてしまうのである。すなわち、すべては「親」次第なのである。それゆえ、その「親」がせつせと「エサ」を運んできては、その「エサ」を「ひな」に与えることによつてこそ、初めて、その「ひな」は、大きく成長することができ得るのである。だとすれば、最初に、いわゆる「信頼関係」というものが生じるところは、一体、どこかと敢えて問えば、それは、まさに「親子関係」以外どこにもないということになる。

それは、ほかの動物でも、また、人間の場合でも、基本的には何も変わりようはないだろう。つまり、「人間が信じられる」かどうかは、すなわち、自分の「親が信じられる」かどうかと、まさに「直結する問題」なのである。——もし、自分の「親」が信じられなければ、いわゆる「他人」を信じることは、なおさら難しいことになるだろう。逆に、自分の「親」が信じられれば、ある程度までは、「他人」を信じることもでき得るだろう。つまり、「親の愛情」を十分に受けて育つた子供たちであれば、基本的には、いわゆる「人

間を信じること」が出来やすいとともに、逆に、「親の愛情」を十分に受けて育っていない子供たちであれば、基本的には、いわゆる「人間を信じること」が出来にくいということになりやすいのである。もちろん、われわれ人間は、ほかの動物たちに比べて、遙かに複雑で多様化した「知的動物」であり、それゆえ、そう単純にそうだと言うことはできにくいとしても、鳥類以上の動物たちであれば、もちろん、われわれ人間をも含めて、いわゆる「信頼関係」の「原点」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、まさに「親子関係」にあるということに、まったく何ら変わりはないということである。

それゆえ、親が子に残せる「最大の財産」は、巨万の富でもなければ、また、華麗な豪邸でもないのである。それは、愛情を持って「自分の子供」を育てることであり、それは、親が子に残せる「最大の財産」なのである。なぜなら、愛情を十分に受けて育った子供たちであれば、ある程度までは、他人を信じることもできれば、また、人を愛することも、さらには、他人に愛情を降り注ぐこともでき得るようになるからである。それは、一体、なぜかと問えば、それは、まさにそのようなことを「親」（或いは「その他の人」）から受けて来たからである。つまり、すべては「経験であり学習」なのである。もちろん、親から十分な愛情を受けなくても、ほかの人たちから十分な愛情を受けて育てば、同じことであり、それゆえ、「親」がすべてだというのではない。ただ、「信頼関係」の原点は、まさに「親子関係」にあるということである。それでは、他人との「信頼関係」は、一体、どうやって築いたらよいのだろうか？ それは、非常に簡単なことであり、結論から言えば、それは、まさに「自分が他人から信じられるような存在になる」ということであり、例えば、「……いいかげん、でたらめ、うそつけ、大ざっぱ、無責任、約束を守らない、その他」ということでは、なかなか「人からは信頼されにくい」ということである。

\*

\*

例えば、われわれ人間の「中心」にあるものは、一体、何かと問えば、それは、まさに「自己愛」である。そして、その「自己愛」こそは、まさに「利己的自我」（つまり「エゴ」）を生み出している最大の「源泉」であり、そして、この「利己的自我」（つまり「エゴ」）が、結局、この世の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている「主体」でもある。——一方、「社会的自我」というのは、知性や理性などに支配されているため、社会人としての意識が働き、抑制がきいているのである。例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療（保健）、また、農業、林業、漁業、水産養殖業、鉱業、建設業、製造業（工業）、卸売・小売業、金融・保険業、運輸・通信業、不動産業、電気、水道、ガス、熱供給業、サービス業、公務、その他の、職業人としての「言動」などは、基本的には、すべてこの「社会的自我」から生じているものである。つまり、「社会的自我」というのは、わがままな「エゴ」を抑制して、より人間らしい「言動」をさせている「主体」でもあるのです。そして、われわれ人間が辿り着くべき地点と、というのは、最終的には、やはり、「……自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になる」ということである。

三、「走れメロス」の原典は…

ところで、太宰治の『走れメロス』という作品の最後のところに、「古伝説とシルレル

の詩から」という注記があるが、これがまさに太宰治の『走れメロス』の「原典」となったものである。それでは、その「古伝説とシルレルの詩」というのは、具体的にはどういうものになるのかと問えば、それは、まず、最初の「古伝説」というのは、古代ローマの著作家ヒュギーヌスという人が書いた『説話集』であり、そして、もう一つの「シルレルの詩」というのは、ドイツの有名な文豪シラーの書いた詩『人質』のことである。

ところで、それよりさらに遡ること、——つまり、この物語の最も古い形を伝えるのは、新プラトン主義者のイアンブリコスという人の書いた『ピタゴラス伝』という作品があり、その『ピタゴラス伝』の中に引用されている、アリストクセノスという人の書いた『ピタゴラス伝』の中の一節であり、それは、紀元前四世紀頃、ディオニュシオス二世が治めていたシチリア島の古代ギリシア植民都市「シラクサイ」（現シラクサ）がその舞台となっていて、後にコリントスに僭主として追放されたディオニュシオス二世が実際の「体験談」として直接「アリストクセノス」に語ったものとされている。——ところで、ピタゴラス学派というのは、学問（数学・天文学・音楽・哲学の研究）などをはじめ、宗教や政治団体の性格なども持つ一種の秘密結社のような組織であり、厳しい「戒律」と堅い団結力を持ち、教団の中では全てが共有財産とみなされ、みな共同生活をしていて、男女は平等に扱われているという、強い「友愛の絆」で結ばれていたとされる。が、その「物語」の内容は、次のようなものである。

つまり、ディオニュシオス二世を取りまく人たちの中にはピタゴラス学派の人々を中傷する者たちがいた。そして、彼らの見せかけの立派さなど、恐ろしい目に遭わせてやれば、脆くも吹き飛んでしまうだろうというのであった。しかし、それに反論する人たちもいて、お互いに論争を始める。そこで王は冷酷な実験を思いつく。それは、ピタゴラス学派のフィンティアスという人に「陰謀」の共犯の濡れ衣を着せて、彼に「死刑」を宣告したのである。すると、ピタゴラス学派のフィンティアスという人は、その決定を素直に受け入れるが、自分の身辺整理のために、その日の残り時間を猶予として願い出た。その一時の「釈放」の保証として、友人のダモンを「人質」に立てるといふ。

すると、ディオニュシオス二世は驚いて、死の担保になるような人間がいるのかと聞くと、ピタゴラス学派のフィンティアスという人は、ダモンを呼び出し事情を話し、その事情を聞いたダモンは、人質となって親友のフィンティアスの帰りを待つことになる。学派を中傷していた人々は、「……お前は見捨てられるに決まっている」と言っ、ダモンを嘲笑するのであった。しかし、日が沈みかけた頃、ピタゴラス学派のフィンティアスという人は、その姿を現わし、皆は驚嘆するのであった。ディオニュシオス二世も、「……自分を三人目の友に加えてくれるようお願いした」が、二人はそれを固辞した、とある。

これは、「実話」であり、そのことが古今東西の実に数多くの人たちの「心」を感動させて来た「一つの要因」にもなっているのだろう。

\*

\*

さて、次の「原典」としては、二世紀の著作家ヒュギーヌスという人の『説話集』という作品であり、それは、ギリシア・ローマ神話の「要約集」（つまり神話の内容を簡潔に要約したもの）であるが、その『説話集』の中に収録されている「友情で最も固く結ばれた者たち」という項目の中で、筆者（ヒュギーヌス）という人は、今までの「物語」に様

々な「文学的裝飾」を加えることになるが、それは、例えば、主人公の「フィンティアス」を「モイロス」（そのモイロスがドイツ語圏でメーロスとなり）、そして、親友の「ダモン」の名を「セリヌンティオス」に変えるところにも、今までの「ピタゴラス学派」という設定などもすべてなくして、逆に、「……三日間の猶予、妹の婚礼、そして、暴風雨による川の氾濫、その他」などを追加して、しかも、その「処刑方法」もまさに「磔はりつけの刑」にしたということである。そして、このヒュギーヌスの「作品」を「原典」（たね本）として書き上げたのが、まさにドイツ人の有名な文豪シラーの『人質』という作品であり、それは、十八世紀末（つまり一七九九年）に発表されることになるのである。

一方、わが国では、ドイツ文学者の「小栗孝則」という人が、一九三七年（昭和十二年）に、シラーのバラード『新編シラー詩抄』という本を出版することになるが、その本の中の『人質』という作品こそは、まさに太宰治の『走れメロス』の「原典」（たね本）そのものであり、その「小栗孝則」訳詩の「人質」というのは、次のようなものである。

#### 四、シラーの『人質』（小栗孝則訳）

暴君ディオニスのところへ、

メロスは短剣をふところにして忍びよった。

警吏は、彼を捕縛した。

「この短剣でなにをするつもりか？ 言え！」

険悪な顔をして、暴君は問いつめた。

「町を暴君の手から救うのだ！」

「磔はりつけになつてから後悔するな！」。

「私は」と彼は言った。「死ぬ覚悟でいる。

命乞いなぞは、決してしない。

ただ情けをかけたいつもりなら、

三日間の日限をあたえてほしい。

妹に夫をもたせてやるそのあいだけ、

その代り友達を人質として置いて行こう。

私が逃げたら、彼を絞め殺してくれ」と。

それを聞きながら王は殘虐な氣持で北叟ほくそえ笑んだ。

そして、少しのあいだ考えてから言った。

「よし、三日間の日限をおまえにやろう。

しかし、猶予は、きつちりそれ限りだぞ。

おまえがわしのところに取り戻しに來ても、

彼は身代りとなって死なねばならぬ。

その代り、おまえの罰はゆるしてやろう」。

\*

\*

さつそくに彼は友達を訪ねた。「じつは王が

私の所業を憎んで、  
磔の刑に処するといふのだ。  
しかし、私に三日間の日限をくれた。  
妹に夫をもたせてやるそのあいだけ、  
君は王のところの人質となっていてくれ。  
私が縄をほどきに歸ってくるまで……」。

無言のまま友を親友は抱きしめた。  
そして、暴君の手から引き取った。  
その場から彼はすぐに出發した。  
そして三日目の朝、夜もまだ明けきらぬうちに、  
急いで妹を夫といっしょにした彼は、  
氣もそぞろに歸路をいそいだ。  
日限のきれるのを怖れて……

\*

\*

途中で雨になった。いつやむともない豪雨に、  
山の水源地は、氾濫し、  
小川も河も水かさを増し、  
ようやく河岸にたどりついたときは、  
急流に橋は浚われ、  
轟々とひびきをあげる激浪が  
メリメリと橋桁を跳ねとばしていた。  
彼は茫然と、立ちすくんだ。

あちこちと眺めまわし、  
また声をかぎりに呼びたててみたが、  
繫舟は残らず浚われて影なく、  
目ざす対岸に運んでくれる  
渡守りの姿もどこにもない。  
流れは荒々しく海のようになった。  
彼は河岸にうづくまり、泣きながら  
ゼウスに手をあげて哀願した。

「ああ、鎮めたまえ、荒れくるう流れを！  
時は刻々に過ぎてゆきます。太陽もすでに  
眞晝時です。あれが沈んでしまったら、  
町に帰ることが出来なかつたら、  
友達は私のために死ぬのです」。  
急流はますます激しさを増すばかり、  
波は波を捲き、煽りたて、  
時は刻一刻と消えていった。……  
彼は焦燥にかられた。ついに憤然と勇氣をふるい、

咆え狂う波間に身を躍らせ、満身の力を腕にかけて流れを掻きわけた。神もついに憐愍を垂れた。

\*

やがて岸に這いあがるや、すぐにまた先きを急いだ。助けを貸した神に感謝しながら……

しばらく行くと突然、森の暗がりから

一隊の強盗が躍り出た。

行手に立ちふさがり、一撃のもとに打ち殺そうといどみかかった。

飛鳥のように彼は飛びのき、

打ちかかる弓なりの棍棒を避けた。

「何をするのだ？」驚いた彼は蒼くなって叫んだ。

「私は命の外にはなにも無い。

それも王にくれてやるものだ！」

いきなり彼は近くの人間から棍棒を奪い、

「不憫だが、友達のためだ！」と

猛然一撃のうちに三人の者を

彼は仆した。後の者は逃げ去った。

\*

\*

やがて太陽が灼熱の光りを投げかけた。

ついに激しい疲労から、

彼はぐったりと膝を折った。

「おお、慈悲深く私を強盗の手から、

さきには急流から神聖な地上に救われたものよ。

今、ここまできて、疲れきって動けなくなるとは、

愛する友は私のために死なねばならぬのか？」

ふと耳に、潺々と銀の音色のながれるのが聞こえた。

すぐ近くに、さらさらと水音がしている。

じっと声を呑んで、耳をすました。

近くの岩の裂目から滾々とささやくように、

冷々とした清水が湧きでている。

飛びつくように彼は身をかがめた。

そして焼けつくからだに元氣をとりもどした。

\*

\*

太陽は緑の枝をすかして、

かがやき映える草原の上に、

巨人のような木影をえがいている。

二人の人が術をゆくのを彼は見た。

急ぎ足に追いぬこうとしたとき、

二人の会話が耳にはいた。  
「いまごろは彼が磔にかかっているよ。」

胸締めつけられる想いに、宙を飛んで彼は急いだ。  
彼を息苦しい焦燥がせきたてた。

すでに夕映の光りは、

遠いシラクスの塔楼のあたりをつつんでいる。

すると向うからフィロストラトスがやってきた。

家の留守をしていた忠僕は、

主人をみとめて愕然とした。

「お戻りください！ もうお友達をお助けになることは出来ません。  
いまはご自分のお命が大切です！

ちようど今、あの方が死刑になるところです。

時間いっぱいまでお歸りになるのを

今か今かとお待ちになっていました。

暴君の嘲笑も

あの方の強い信念を変えることは出来ませんでした」。

「……どうしても間に合わず、彼のために

救い手となることが出来なかったら、

私も彼と一緒に死のう。

いくら粗暴なタイラントでも、

友が友に対する義務を破ったことを、まさか褒めまい。

彼は犠牲者を二つ、屠ればよいのだ。

愛と誠の力を知るがよいのだ！」

\* \*  
まさに太陽が沈もうとしたとき、彼は門にたどり着いた。

すでに磔の柱が高々と立つのを彼は見た。

周囲に群衆が撫然として立っていた。

縄にかけられて友達は釣りあげられてゆく。

猛然と、彼は密集する人ごみを掻きわけた。

「私だ、刑吏！」と彼は叫んだ。「殺されるのは！

彼を人質とした私はここだ！」……

がやがやと群衆は動揺した。

二人の者はかたく抱き合って、

悲喜こもごもの氣持で泣いた。

それを見て、ともに泣かぬ人はなかった。

\* \*  
すぐに王の耳にこの美談は伝えられた。

王は人間らしい感動を覚えて、

早速に二人を玉座の前に呼びよせた。

しばらくはまじまじと二人の者を見つめていたが、

やがて王は口を開いた。「おまえらの望みは叶ったぞ。

おまえらはわしの心に勝ったのだ。

信実とは決して空虚な妄想ではなかった。

どうかわしをも仲間に入れてくれまいか。

どうかわしの願いを聞き入れて、

おまえらの仲間の一人にしてほしい」と。

\*

\*

さて、これが有名なシラーの詩『人質』という作品であり、このシラーの詩『人質』という作品の「本筋」に、いかにも太宰治ならではの「肉付け」をしたのが、まさに太宰治の『走れメロス』という作品になるかと思う。——例えば、シラーの詩『人質』では、冒頭いきなり「……暴君ディオニスのところへ、メロスは短剣をふところにして忍びよった。冒頭は、彼を捕縛した。……」とあるだけで、例えば、メロスについても、また、その「状況説明」などについても何も記述されていない。そこで、太宰治は、『走れメロス』のその「冒頭部分」でそれらを具体的に説明することになるのである。つまり、「……メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ、この妹は、村の或る律儀な一牧人を、近々、花婿として迎える事になっていた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買いに、はるばる市にやって来たのである。そして、まず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた」と、なっていくのである。

つまり、ここで最も大事なことは、太宰治の、この『走れメロス』という作品の「冒頭」部分の「内容」というのは、その「妹の結婚」ということを除けば、例えば、「……メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里（具体的な距離まで）はなれた此のシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ。……」というような内容は、少なくとも、シラーの『人質』という作品（詩）の中にはほとんどないものであり、それゆえ、これらは、いわば「太宰治の創作」部分だと言えるものであり、また、次の「町の様子」や「メロスと暴君」との実に生々しい「具体的な対話」内容なども、その多くは「太宰治の創作」部分だと言えるものである。そして、そこにこそ、シラーの『人質』とはまた違う、まさに「太宰治」ならではの彼独自の「考えや想い」（いわば「人となり」）がはつきりと現出しているところでもあるのである。

\*

\*

それでは、『走れメロス』の本文へと戻りたいと思うが、それは、次のようなところからであり、——つまり、王様は、それに対して、（心の中で）、「……どうせ帰って来ない

にきまつている。この嘘つきに騙された振りをして、離してやるのも面白い。そうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。世の中の、正直者とかいう奴輩にうんと見せつけてやりたいものさ」と思うのであった。そこで、王様は、メロスに向かつて、「……願いは、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目の日没までには帰って来い。おくれたら、その身代りを、きつと殺すぞ。……ちよつとおかれて来るがいい。おまえの罪は、永遠にゆるしてやろうぞ」と言い、そつと北叟笑むのであった。

## 五、親友との再会と村への出発

さて、竹馬の友（セリヌンティウス）は、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの前で、佳き友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。メロスは、友に一切の事情を語り、セリヌンティウスは、無言で首肯し、メロスをひしと抱きしめた。友と友の間は、それでよかった。セリヌンティウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、満天の星である。——メロスは、その夜、一睡もせずに十里（約四十km）の路を急ぎに急いで、村へと到着したのは、翌る日の午前、陽は既に高く昇つて、村人たちは野に出て仕事を始めていた。よろめいて歩いて来る兄の、疲労困憊の姿を見つけて驚いた。そうして、うるさく兄に質問を浴びせたが、「なんでも無い」と、メロスは無理に笑おうと努めた。「……市に用事を残して来た。またすぐ市に行かなければならぬ。あす、おまえの結婚式を挙げる。早いほうがよからう」と言うと、妹は頬をあらめた。「……うれしか。綺麗な衣裳も買って来た。さあ、これから行って、村の人たちに知らせて来い。結婚式は、あすだと。……」

さて、メロスは、初夏の満天の星の下、「……その夜（深夜）、一睡もせずに十里（約四十km）の路を急ぎに急いで、村へと到着したのは、翌る日の午前、陽は既に高く昇つて、村人たちは野に出て仕事を始めていた」とある。——まず、太宰治は、メロスの住む「村」からシラクサの「市」までの「距離」を「十里」（約四十km）と設定している。この「十里」（約四十km）という「設定」は、一体、何を根拠としたのかは、全く分からないが、文字通り、「十里」（約四十km）とした場合、メロスは、「……深夜（仮に〇時頃）から、一睡もせずに、十里（約四十km）の路を急ぎに急いで、村へと到着したのは、翌る日の午前、陽は既に高く昇つた（八時〜十時頃）、村人たちは野に出て仕事を始めていた」となる。だとすれば、メロスは、いわゆる「十里」（約四十km）の「距離」を、（たとえ花嫁衣装その他の買物類や野山の途の起伏などを考慮に入れても）、何と「八時間〜十時間」ぐらいかけて、急ぎに急いだことになる。……

例えば、人が歩く歩行速度は、一般に、時速「四km」と言われている。そうだとすれば、十時間も歩けば、ふつう「十里」（約四十km）を歩くことが出来ることになる。また、ジョギングなどの平均であれば、一般に、時速「八km」ぐらいと言われている。だとすれば、五時間も走れば、ふつう「十里」（約四十km）を走ることはでき得るのである。だとすれば、「……メロスは、少しも走ってはいない。歩いたか、或いは、早足で歩いた程度とする議論」が、まさに華々しく「展開される」ことになるのである。それは、極めて「理路

整然とした論理展開」であり、いかにも「もつとのこと」のように思えるのである。

しかし、これは、太宰治の「距離」に対する単純な「設定ミス」であり、いわゆる「十里」(約四十km)ではなく、例えば、「十三里前後」(約五十km前後)にすれば、何の問題もなく、太宰治という人は、恐らく、「距離」(つまり「数字」)に対する厳密な「認識」というものは意外と乏しく、(それは、極めて裕福な家庭に生まれ育つたために、細かな数字に対する認識は育ちにくいのであり)、あまり深く考えることもなく、恐らく、だいたい「十里」(約四十km)ぐらいだろうと考えたのではないだろうか？ それゆえ、いわゆる「十里」(約四十km)を、まさに「唯一絶対の根拠」として、いかにも「……メロスは、少しも走ってはいない。歩いたか、或いは、早足で歩いた程度とする論理」は、余りにも安易な「推理」であり、メロスが実際に「……一生懸命走ったこととうそがない」とすれば、それは、むしろ「十里」(約四十km)とした距離の「設定」の方にこそ「設定ミス」があつたと、そう考える方がむしろ理屈の上では「論理性」があるのである。

## 六、妹の村での結婚式

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらい深い眠りに落ちてしまった。眼が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼むと、婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらには未だ何の仕度も出来ていない、葡萄の季節まで待ってくれ、と答えた。メロスは、待つことは出来ぬ、どうか明日にしてくれ給え、と更に押して頼んだが、なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論をつづけて、やっと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。

そして、結婚式は、翌日、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがて車軸を流すような大雨となった。祝宴に列席していた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持を引きさて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも泳え、陽気に歌をうたい、手を拍った。メロスも、満面に喜色を湛え、しばらくは、王とのあの約束をさえ忘れていた。祝宴は、夜に入つていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなった。メロスは、一生このままここにいたい、と思った。この佳い人たちと生涯暮して行きたいと願ったが、いまは、自分のからだで、自分のものでは無い。ままならぬ事である。メロスは、わが身に鞭打ち、ついに出発を決意した。あすの日没までには、まだ十分の時が在る。ちよつと一眠りして、それからすぐに出発しよう、と考えた。その頃には、雨も小降りになつていよう。少しでも永くこの家に愚図愚図とどまっていたかった。メロスほどの男にも、やはり未練の情というもの是在る。今宵呆然、歓喜に酔っているらしい花嫁に近寄り、「……おめでどう。私は疲れてしまったから、ちよつとご免こうむって眠りたい。眼が覚めたら、すぐに市に出かける。大切な用事があるのだ。私がいなくても、もうおまえには優しい亭主があるのだから、決して寂しい事は無い。おまえの兄の、一ばんきらいなものは、人を疑う事と、それから、嘘をつく事だ。おまえも、それは、知っているね。亭主との間に、どんな秘密でも作ってはならぬ。おまえに言いたいのは、それだけだ。おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りを持つていろ」と。

花嫁は、夢見心地で首肯いた。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、「……仕度の無いのはお互さまさ。私の家にも、宝といつては、妹と羊だけだ。他には、何も無い。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になったことを誇ってくれ」と言うのであった。花嫁は、揉み手して、照れていた。メロスは、笑って村人たちにも会釈して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠った。

眼が覚めたのは翌る日の薄明の頃である。メロスは跳ね起き、南無三(しまった)、寝過したか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合う。きようは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑って礫の台に上ってやる。メロスは、悠々と身仕度をはじめた。雨も、いくぶん小降りになっている様子である。身仕度は出来た。さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢の如く走り出た。……

\*

\*

メロスは、「……私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救う為に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される。若い時から名譽を守れと……。さらば、ふるさと、若いメロスは、つらかった。幾度か、立ちどまりそうになった。えい、えいと大声挙げて自身を叱りながら走った。村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止み、日は高く昇って、そろそろ暑くなつて来た。メロスは額の汗をこぶしで払い、ここまで来れば大丈夫、もはや故郷への未練は無い。妹たちは、きつと佳い夫婦になるだろう。私には、いま、なんの気がかりも無い筈だ。まっすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要も無い。ゆっくり歩こう、と持ちまえの呑気さを取り返し、好きな小歌をいい声で歌い出した。ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到達した頃、降って湧いた災難、メロスの足は、はたと、止まった。見よ、前方の川を。きのうの豪雨で山の水源地は氾濫し、濁流滔々と下流に集り、猛勢一挙に橋を破壊し、どうどうと響きをおげる激流が、木葉微塵に橋桁を跳ね飛ばしていた。彼は茫然と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまわし、また、声を限りに呼びたててみたが、繫舟(繫いだ舟)は残らず浪に浚われて影なく、渡守りの姿も見えない。流れはいよいよ、ふくれ上り、海のようになっている。メロスは川岸にうずくまり、男泣きに泣きながらゼウスに手を挙げて哀願した。「……ああ、鎮めたまえ、荒れ狂う流れを！ 時は刻々に過ぎて行きます。太陽も既に真昼時です。あれが沈んでしまわぬうちに、王城に行き着くことが出来なかつたら、あの佳い友達、私のために死ぬのです」と。

だが、濁流は、メロスの叫びをせせら笑う如く、ますます激しく躍り狂う。浪は浪を呑み、捲き、煽り立て、そうして時は、刻一刻と消えて行く。今はメロスも覚悟した。泳ぎ切るより他に無い。ああ、神々も照覧あれ！ 濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、いまこそ發揮して見せる。メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のようにのた打ち荒れ狂う浪を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきと掻きわけ掻きわけ、めくらめつぼう獅子奮迅の人の子の姿には、神も哀れと思つたか、ついに憐愍を垂れてくれた。押し流されつつも、見事、対岸の樹木の幹に、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。メロスは馬のように大きな胴震いを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といえども、むだには出来ない。陽

は既に西に傾きかけている。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠をのぼり、のぼり切って、ほつとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た」(本文)とある。

\* \* \*

さて、メロスは、翌る日の薄明の頃、雨中、矢の如く走り出た。そして、村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止み、日は高く昇って、そろそろ暑くなつて来た。気持ちにも余裕が出てきて、ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全行程の半ばに到着した頃、メロスの足は、はたと、止まった。——それは、昨日の豪雨で山の水源地が氾濫をし、濁流は、猛勢一挙に橋を破壊し、激しく躍り狂つていた。メロスは覚悟を決めて、ざんぶと流れに飛び込み、押し流されつつも、何とか対岸の樹木の幹に、すがりつく事ができた。有り難い。そして、すぐにまた先を急いだ。そして、峠を登り切ったところで、今度は、山賊が躍り出た。メロスは、「……王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな」と言い、三人の山賊を蹴散らして、一気に峠を駆け降りたが、さすがに疲れて、よろよろ二、三步あるいて、がくりと膝が折れ、立ち上がることができなくなつた。この時に、メロスは、「もうどうでもいい」というような気持ちに襲われるのであるが、その「本文」は、次のようなものである。

#### 七、心の中の葛藤(自問自答)

まず、峠を登り切ったところで、今度は、山賊が躍り出た。「……山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒を振り挙げた。メロスはひよいと、からだを折り曲げ、飛鳥の如く身近の一人に襲いかかり、その棍棒を奪い取って、『気の毒だが正義のためだ!』と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙に、さつさと走って峠を下つた。一気に峠を駆け降りたが、流石に疲労し、折から午後の灼熱の太陽がまともに、かつと照つて来て、メロスは幾度となく眩暈を感じ、これではならぬ、と気を取り直しては、よろよろ二、三步あるいて、ついに、がくりと膝を折つた。立ち上る事が出来ぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も撃ち倒し韋駄天、ここまで突破して来たメロスよ。真の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れ切つて動けなくなるとは情無い。愛する友は、おまえを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。おまえは、稀代の不信の人間、まさしく王の思う壺だぞ、と自分を叱つてみるのだが、全身萎えて、もはや芋虫ほどにも前進かなわぬ。路傍の草原にごろりと寝ころがった。身体が疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいいという、勇者に不似合いな不貞腐れた根性が、心の隅に巣喰つた。私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんも無かつた。神も照覧、私は精一ぱいに努めて来たのだ。動けなくなるまで走つて来たのだ。私は不信の徒では無い。ああ、できる事なら私の胸を截ち割つて、真紅の心臓をお目に掛きたい。愛と信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事な時に、精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きつと笑われる。私の一家も笑われる。私は友を欺いた。途中で倒れるのは、はじめから何もしないのと同じ事だ。ああ、もう、どうでもいい。これが、私の定つた運命なのかも知れない。セリヌンティウスよ、ゆるしてくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を、欺かなかつた。私たちは、本当に佳い友と友であつたのだ。いちどだつて、暗い疑惑の雲を、お互い胸に

宿したことは無かった。いまだって、君は私を無心に待っているだろう。ああ、待っているだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思えば、たまらない。友と友の間の信実しんじつは、この世で一ばん誇るべき宝なのだからな。セリヌンティウス、私は走ったのだ。君を欺くつもりは、みじんも無かった。信じてくれ！ 私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りて来たのだ。私だから、出来たのだよ。ああ、この上、私に望み給うな。放って置いてくれ。どうでも、いいのだ。私は負けたのだ。だらしが無い。笑ってくれ。王は私に、ちよつとおくられて来い、と耳打ちした。おくれたら、身代りを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になってみると、私は王の言うままになっている。私は、おかれて行くだろう。王は、ひとり合点して私を笑い、そうして事も無く私を放免するだろう。そうなったら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切者だ。地上で最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがいない。いや、それも私の、ひとりよがりか？ ああ、もういっそ、悪徳者として生き伸びてやろうか。村には私の家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すような事はしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法じやうほう（おきまりのやり方）ではなかったか。ああ、何もかも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬる哉かな（今となつては、もうどうしようもない）」というような「自問自答」は、シラーの『人質』の中に出て来るメロスの「頭の中」（或いは「心の中」）には、恐らく、そのような「考え方」は決して生じては来なかつたに違いない。これは、いかにも「太宰治ならではの」のせりふせりふになっているのである。

さて、この場面のメロスの「自問自答」こそは、シラーの『人質』とはまた違う、いかにも「太宰治ならではの」（独自のもの）になっているのである。例えば、「……身体が疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいい」という、勇者に不似合ふにがひいな不貞腐ふてくされた根性が、心の隅に巢喰くさった」とある。また、「……ああ、もういっそ、悪徳者として生き伸びてやろうか。村には私の家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すような事はしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法じやうほう（おきまりのやり方）ではなかったか。ああ、何もかも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬる哉かな（今となつては、もうどうしようもない）」というような「自問自答」は、シラーの『人質』の中に出て来るメロスの「頭の中」（或いは「心の中」）には、恐らく、そのような「考え方」は決して生じては来なかつたに違いない。これは、いかにも「太宰治ならではの」のせりふせりふになっているのである。

もちろん、メロスメロスは、できる限りのことはしたのである。それゆえ、メロスメロスを責めることはできない。しかし、その結果、一人の親友は、死ぬことになる。メロスメロスは、「単純な男であった」という。それでは、その「単純」とは、一体、どういう人間のことを言うのだろうか？ それは、思ったことを深く「熟慮」することもなく、すぐに「行動」（つまり「言動」）に移してしまう人間のことである。そして、その一つの「行為」（言動）が、時として、自分の「人生」を大きく変えてしまうことがある。或いは、他人の「人生」を大きく変えてしまうことがある。メロスメロスは、激怒した、とある。それは、ほんとうに怒っ

て、何とかしようとして「市を暴君の手から救うのだ」という思いから、城の中に入ってしまったわけである。しかし、その時の「行為」(言動)は、深く「熟慮」した上での行動だったのか？ それとも、その時のいわば「思いつきで、そういう行動に出てしまった」のか？ ここは、非常に大事なところであり、もし、深く「熟慮」した上での「行為」(言動)であれば、それは、いわば「確信犯」であり、それゆえ、最悪の結果も覚悟の上のことである。しかし、一方、その時の「乗りや思いつきだけで、そういう行動に出てしまった」とすれば、その「行為」(言動)が、最悪の場合、どういう「結果」をもたらすかは、何も考えてはいなかったということである。

\*

\*

私は、一度、交通事故に遭ったことがある。会社を終えて、家に帰り、夜の六時頃、再び、買い物に出たのである。私は、自転車に乗って、左側には家があるので、車が来るかどうかは見えなかった。一方、右側は、田んぼなどで見晴らしはよかった。そのような「交差点」で、私は、「まあ、大丈夫だろう」と思いながら、一時停止を怠って、スルスルと交差点の中に入ってしまった瞬間、「あっ、やってしまった！」と思った。それは、左側からライトを付けた車が迫って来るのが見えたからである。それは、まさにほんとうに「スローモーション」で迫って来るのであり、ぶつかる瞬間までよく覚えている。その時、「……もしかしたら、抜け出されるかも知れないと思った瞬間、意識が飛んでしまった」のである。気がつくと、田んぼの中にいた。起き上がって、「……ああ、大丈夫だ、よかった」と思ったが、ふと左肩(左手)がぶらぶらになっているのに気づくのである。びっくりして、すぐに「整形病院」に行き、レントゲンを撮ったら、「これは、完全な左肩脱臼」だと言われ、紹介状を書いてやるからということ、翌日、日赤病院に行き、即、入院で、手術を受けて、十日間、入院することになったのである。

そして、その時の自分のそのような「経験」から、次のようなことを「確信」するに至ったのである。——それは、例えば、飛行機がまさに地上へと墜落していく時、飛行機に乗っている人たちは、もちろん、お互いにパニック状態に深く陥るだろうが、しかし、「意識」は意外とはつきりとしているものであり、地上に墜落するその瞬間までよく覚えているに違いない。ところが、その飛行機が地上に激しい勢いで激突した瞬間、われわれ人間の「意識」というものは、完全に「飛んでしまう」ものであり、それゆえ、即死であれば、文字通り、痛みもかゆいも何もないのである。われわれは、どうしても「……さぞかし痛かっただろう」と思いがちであるが、文字通りの「即死」であれば、そういうことは決してないのであり、むしろ、生きていた場合にこそ、その人の「意識」が目覚めた時に、初めて、自分の「身体」(からだ)のどこどこが痛いとはつきりと自覚するのである。これは、交通事故をはじめ、踏切事故、また、崖やビルの屋上などからの飛び降り自殺、或いは、戦争やテロなどで爆撃や銃撃などを受けて即死したような場合、その他、すべて同じことであり、ぶつかる瞬間までは、その人の「意識」は非常にはつきりとしていて、いろいろなことをよく覚えているものだが、激しくぶつかった瞬間、意識は完全に「飛んでしまう」ものであり、そして、即死であれば、文字通り、何の痛みもかゆみも感じることもなく死んで行くのであり、一方、生きていた場合にこそ、その人の「意識」が目覚めた時に、初めて、自分の「身体」(からだ)のどこどこが痛いとはつきりと自覚するようになるのである。

\*

\*

それはともかく、あの時、一時停止をしていれば、何のことはなかったのである。「……まあ、大丈夫だろうと、甘く考えてしまった」ことが、まさに「命取り」になるのである。もちろん、生命は助かったが、しかし、その場で死んでいても、おかしくはなかったのである。それは、まさに「紙一重」であり、どちらに転んでも、おかしくはなかったであり、ただ、「運がよかった」というだけである。それ以来、交差点では、左右を確認し、左右を確かに確認したという「意識」がないと、怖くて渡れなくなってしまった。それは、「……まあ、大丈夫だろうと、甘く考えて行動（言動）することが、いかに危険であるか」を、我が身を以って、まさに骨身に染みて「思い知った」ということである。

例えば、メロスの場合、城の中で捕えられた時、王様が「真の暴君」であったならば、その場ですぐに「殺されて」いても、何も不思議なことではなかった。ところが、暴君ディオニスという王様は、「人間が信じられない」と言いながらも、無意識のうちに、どこかで「信じられる人間を探し求めていた」ということでもあるのだろう。だからこそ、メロスが、「……約束は守ります。三日目の日没までには必ず帰ってきます。帰ってこなかったならば、身代わりの親友を絞め殺して下さい」という言葉を聞いた時、王様は、これは、面白いと思い、そして、「……この男が、ほんとうに信じられる人間であるかどうか、確かめてみたくなった」ということである。それは、一体、なぜか？ それは、「……おまえには、わしの孤独がわからぬ」という「場面」があるが、それは、「王様」（或いは「独裁者」という存在は、つねに「身の危険」を感じているのである。いっどこで「自分の生命」が狙われるか分からないものである。それゆえ、例えば、食事の時にも、必ず、毒味役はいるのである。そして、自分の身のまわりの人たちは、できるだけ信じられる人間だけに固めたいと思うわけである。なぜなら、まさに「裏切られる」（つまり「裏切者が出る」）ことが、何よりも「怖い」ことであり、それゆえ、そのような「疑いのある者たち」は、何の容赦もなく、次から次へと「粛清」を行なって行くのである。そして、いわゆる「忠誠を誓わせる」ことになるが、しかし、それらは、所詮、いわば「強制的なもの」であり、あてにはならないものである。だからこそ、まさに「ほんとうに心の底から信じられる人間こそは、何よりもほしい」ということになるのである。——それはともかく、メロスは、「もうどうでもいい」というような気持ちに襲われてしまい、そして、うとうとと、まどろんでしまうのであった。……

## 八、迷いからの目覚め

さて、「……ふと耳に、潺々（さらさらと）水の流れる音が聞えた。そつと頭をもたげ、息を呑んで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よるよる起き上って、見ると、岩の裂目から滾々と、何か小さく囁きながら清水が湧き出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手で掬って、一くち飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労恢復と共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名譽を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は、信じられている。私の命などは、問題ではない。死

んでお詫び、などと気のいい事は言って居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！メロス」。「……私は信頼されている。私は信頼されている。先刻の、あの悪魔の囁きは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまえの恥ではない。やはり、おまえは真の勇者だ。再び立って走れるようになったではないか。ありがたい！私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ。ああ、陽が沈む。ずんずん沈む。待ってくれ、ゼウスよ。私は生れた時から正直な男であった。正直な男のままにして死なせて下さい」と。

\*

\*

そして、「……路行く人を押しつけ、跳ねとばし、メロスは黒い風のように走った。野原で酒宴の、その宴席のまっただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴とばし、小川を飛び越え、少しずつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走った。一団の旅人と颯とすれちがった瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。『……いまごろは、あの男も、磔にかかっているよ』。……ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走っているのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。おかれてはならぬ。愛と誠の力を、いまこそ知らせてやるがよい。風態なんかは、どうでもいい。メロスは、いまは、ほとんど全裸体であった。呼吸も出来ず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はるか向うに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。塔楼は、夕陽を受けてきらきら光っている」とある。

## 九、メロスと親友の弟子

その時、「……ああ、メロス様」と、うめくような声が、風と共に聞えた。「誰だ」と、メロスは走りながら尋ねた。「……フィロストラトスでございます。貴方のお友達セリヌンティウス様の弟子でございます」と、その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「……もう、駄目でございます。むだでございます。走るのは、やめて下さい。もう、あの方をお助けになることは出来ません」。「……いや、まだ陽は沈まぬ」と言うのと、「……ちようど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。おうらみ申します。ほんの少し、もうちよつとでも、早かったなら！」「……いや、まだ陽は沈まぬ」と、メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕陽ばかりを見つめていた。走るより他は無い。「……やめて下さい。走るのは、やめて下さい。いまはご自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じて居りました。刑場に引き出されても、平気でいました。王様が、さんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念を持ちつづけている様子でございました」。「……それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ。ついて来い！フィロストラトス」と言うと、「……ああ、あなたは気が狂ったか。それでは、うんと走るがいい。ひよつとしたら、間に合わぬものでもない。走るがいい」と言うのであった。

言うには及ばぬ。まだ陽は沈まぬ。最後の死力を尽して、メロスは走った。メロスの頭は、からっぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走った。陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、メロスは疾風の如く刑場に突入した。間に合った。(本文)

さて、太宰治は、あれほどシラーの『人質』（「小栗孝則」訳）の「内容とその言葉」を実に「誠実に踏襲」しているながら、なぜ、この「フィロストラトス」という人物の設定だけは変えたのだろうか？ それは、「……家の留守をしていた（メロスの）「忠僕」から「……貴方のお友達セリヌンティウス様の弟子でございます」と、その設定を変えているのであり、それは、一体、なぜかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。

まず、シラーの『人質』に登場する「フィロストラトス」という人は、「……家の留守をしていた（メロスの）「忠僕」であり、その人は、今は、主人のことを心から心配して、「……お戻りください！ もうお友達をお助けになることは出来ません。いまはご自分のお命が大切です！ ちようど今、あの方が死刑になるところです。時間いっぱいまでお歸りになるのを、今か今かとお待ちになっていました。暴君の嘲笑も、あの方の強い信念を変えることは出来ませんでした」とあるが、これでは、メロスには「忠僕」がいて、その「忠僕」が、「主人」であるメロスのことを心から心配していることになってしまふ。

一方、太宰治の『走れメロス』に登場する「フィロストラトス」という人は、「……貴方のお友達セリヌンティウス様の弟子でございます」となっている。その親友のお弟子さんは、「……もう、駄目でございます。むだでございます。走るの、やめて下さい。もう、あの方をお助けになることは出来ません。」「……やめて下さい。走るの、やめて下さい。いまはご自分のお命が大事です」と言うことによって、いかにどれほどメロスが「無理をして走っているか」をはつきりと浮かび上がらせることが出来ているのである。

しかも、さらに大事なことは、メロスは、「……信じられていながら走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもの為に走っているのだ」とある。これは、いわば「何のため」という意識もうすれて、その「行為」（活動）の中にどこまでも深く没入している状態であり、それは、ふだんの様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然とした「自我」の状態から、より密度の高い、それだけ自分自身になりきれている「純粹自己」（いわば「超自我」）の状態に近く、そのような一種の「没我的状態」にどこまでも深く溶け入っているような時にこそ、まさに「精神の飛翔」というものは生じやすく、例えば、芸術や学問の分野であれば、何か真に優れた人類的な「発明、発見、創造、業績、その他」などが生み出されたり、また、スポーツの世界などであれば、「ふだんの自我」を超えて、何か世界的な「記録」などを達成することもでき得るのである。

ところで、メロスは、「……もつと恐ろしく大きいもの為に走っているのだ」とあるが、それでは、それは、具体的には、一体、どのようなことになるのかと敢えて問えば、それは、メロスの「わが身を賭した必死の走り」が、結果として、「……人間が信じられないというところで、数多くの人たちを殺していた」、その暴君（ディオニス）の「心」に「人間らしい感動」を与えて、その暴君（ディオニス）の「心」を奇跡的に変革させることが出来て、それによって、死の恐怖に怯えていた「シラクスの市民たち」を（暴君の恐怖から）救うことになったのである。……

さて、陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、メロスは疾風の如く刑場に突入した。間に合った。メロスは、「……待て。その人を殺し

てはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、いま、帰って来た」と、大声で刑場の群衆にむかつて叫んだつもりであったが、喉がつぶれて、暖れた声が出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。すでに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々に釣り上げられてゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆を掻きわけ、掻きわけ、「……私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいます！」と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、ついに磔台に昇り、釣り上げられてゆく友の両足に、齧じりついた。群衆は、どよめいた。あつぱれ。ゆるせ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。……

そして、「……セリヌンティウス」と、メロスは眼に涙を浮べて言った。「……私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえ無いのだ。殴れ」と言うのであった。セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯し、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。殴ってから優しく微笑み、「……メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生れて、はじめて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない」と言うのであった。メロスは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。「……ありがとう、友よ」。二人同時に言い、ひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい声を放って泣いた。

群衆の中からも、歎歎（すすり泣き）の聲が聞えた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人の様子を、まじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、こう言った。「……おまえらの望みは叶ったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい」と言うのであった。どつと群衆の間に、歓声が上がった。「……万歳、万歳」と。——ひとりの少女が、緋のマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き友は、気をきかせて教えてやった。「……メロス、君は、まっぴらだかじゃないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ」と言うのであった。勇者は、ひどく赤面した、とある。（本文・完）

さて、もう一度、ふり返ると、メロスは、ふと耳に、水の流れる音が聞えた。見ると、岩の裂目から滾々と、何か小さく、囁きながら清水が湧き出ているのである。水を両手で掬って、一口飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。私を待っている人があるのだ。私は、信じられている。信頼に報いなければならぬ。間に合う、間に合わぬは問題ではないのだ、私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ。メロスは走った。メロスの頭は、からつぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ力にひきずられて走った。そして、「……私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいます！」と、かすれた声で叫び、ついに磔台に上り、釣り上げられてゆく友の両足に、齧じりついたとある。——さて、ここで最も大事なことは、「何のために」という意識も次第にうすれて、その「行為」（活動）の中にどこまでも深く溶け込んでいる「没我的状態」こそは、まさに「純粹自己」（百

%「自分自身になりきっている状態」であり、そのような時にこそ、芸術や学問の分野であれば、何か真に優れた人類的な「発明、発見、創造、業績、その他」などが生み出されやすく、また、スポーツの世界などであれば、「ふだんの自我」を超えて、何か世界的な「記録」などを達成することもでき得るのである。

\*

\*

そして、メロスは、親友に向かって、「……私を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。……」と素直に告白をし、そして、もう一方の親友も、同じように、「……メロス、私を殴れ。私は、この三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。……」と正直に告白をしている。これは、一体、何なのか？ それは、次のようなことである。つまり、われわれ人間の「中心」にあるものは、まさに「自己愛」であるとともに、われわれ人間というのは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている存在でもある。それゆえ、実に様々な「揉め事、争い、喧嘩、犯罪（事件）、その他」などは、絶えることがない。もちろん、その通りであるが、ただ、「友情」というのは、本来、お互いの「信頼関係」（それは「相手の人間性を信じている」）からこそ、成り立っているものであり、それゆえ、相手が信じられなくなれば、当然のことながら、そこで「友情関係」も終わってしまうものである。それは、何も「友情関係」だけではなく、すべての「人間関係」は、まさに「信頼関係」から成り立っているものである。それゆえ、相手が信じられなくなれば、それは、「友達関係」「同居関係」「親子関係」「恋人関係」「夫婦関係」「愛人関係」、その他、どのような「人間関係」でも、音を立てて崩れていくしかない。——つまり、王様は、「人間が信じられない」という。だとすれば、すべての「人間関係」が音を立てて崩れていくのは、当たり前のことである。そして、王様は、次のように言う。「……おまえらの望みは叶ったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか」と。それは、やつと「信じられるものにめぐり逢えた」ということであり、王様は、むしろ「信じられる人間こそ、探し求めていた」ということにもなるのだろうか。

## 十、結び

さて、『走れメロス』という作品は、「作者」（つまり「太宰治」）にとつて、一体、どのような「意味合い」を持つ「作品」だったのかと敢えて問えば、それは、後述の『思ひ出』や『人間失格』などの「内容」とも合わせて考えてみると、それは、次のようなことである。——つまり、「……人間はあてにはならぬ、また、人間は信じられないものだと思いつつも、その一方では、人間を信じたい、或いは、信じられる人間にめぐり逢いたい」ということでもあり、そのような「複雑な思い」が、「作者」（つまり「太宰治」）の「心の中」にもはつきりと内在していたのである。そして、「……人間はあてにはならぬ、また、人間は信じられないものだと言っている「暴君」（ディオニス）とは、すなわち、まさに「太宰治自身」でもあり、また、その一方では、「……人間を信じたい、或いは、信じられる人間にめぐり逢いたい」と思っているのも、まさに「暴君」（ディオニス）であるとともに、それは、そのまま「作者」（つまり「太宰治自身」）の心の底からの「願い」でもあったのである。それゆえ、「メロス」は、途中で挫折してはならないのであり、

何が何でも最後まで走り続けなければならない「存在」（つまりは「信頼でき得る人間の象徴」）なのである。それでは、なぜ、そのようなものが必要なかと問えば、それは、このまま「人間が信じられない」ままの「心的状態」では、「暴君」（も「太宰治自身」）も、まさに「生きていけない」からである。——つまり、「信じられるもの」、その確かな「心の拠り所」（或いは「心の支え」というものがなければ、われわれ「人間の心」というものは、やがては「絶望感」（或いは「失望感」）に襲われて、死んでいくしかないからである。逆に、「メロス」が最後まで走ってくれば、その「メロス」（それは「信頼でき得る人間」の象徴）でもあるが、そのような「信頼でき得る人間」というものが実際に存在すれば、（例えば、古今東西の真に優れた歴史上の人物などを初めとして、映画やドラマ或いは漫画やアニメその他などの「ヒーローもの」などもすべてそのような存在であるが）、その「信じられるもの」を「心の拠り所」（或いは「心の支え」として、例えば、「作者」（つまり「太宰治自身」）を初めとして、われわれ人間というものは、生きていくことができ得るのである。だからこそ、「走れメロス」（走ってくれメロス）ということにもなるのである。それが、まさに「作者」（つまり「太宰治自身」）の心の底からの「叫び」でもあり、太宰治という作者は、恐らく、この「作品」を泣きながら書いたに違いなく、それは、何も特別なことでもなんでもなく、読者が「作品」を読んで感動する前に、作者自身が自らの「作品」を書きながら、自ら感動して泣いているというようなことは、いくらでもあり得ることなのである。

最後に、もう一度、再確認しておきたいと思うが、一般に、『走れメロス』という作品は、いわゆる「友情」をテーマにした作品という評価になっているかと思うが、もちろん、それは、まさに「その通り」ではあるが、しかし、それだけでは、シラーの『人質』という作品（詩）の単なる模写に過ぎないことになる。太宰治の『走れメロス』という作品の中には、もう一つ、太宰治にとってはむしろ「最大のテーマ」でもある、いわゆる「人間が信じられる、信じられない」という最も「大事なテーマ」が提示されているのであり、その太宰治にとっては本来、「最大のテーマ」でもある、いわゆる「人間が信じられる、信じられない」という最も「大事なテーマ」が、「……走れメロスは、友情をテーマにした作品」という、その「友情」というテーマの裏に奥深く隠されてしまったのである。

例えば、暴君（ディオニス）は、人間が信じられないという。そのために、数多くの人たちを殺しているという。そして、「……おまえ（など）には、わしの孤独はわからぬ」と言う。「……疑うのが、正当の心構えなのだ、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにはならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ」。「……口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまえだって、いまに、磔はつになつてから、泣いて詫わびたつて聞かぬぞ」と、暴君は言う。もちろん、これらは、暴君（ディオニス）の「せりふ」として書かれているものであるが、しかし、この「せりふ」は、そのまま「作者」（つまり「太宰治」）の心の底にあった「思いや考え」でもあったということである。

それでは、「作者」（つまり「太宰治」）という人は、なぜそのような「心的状態」になっていたのだろうか？ その「答え」というものは、次に説明する『思ひ出』や『人間失格』という作品のなかに、奥深く隠されているのである。

\*

\*

人間失格

例えば、太宰治の「代表作」の一つとして、いわゆる『人間失格』という作品があるかと思うが、その「作品」は、一体、どのような「内容」かと問えば、それは、一言で言えば、それは、まさに「ほんとうの自分」とは、まさに「こういう人間であった」という極めて素直な「告白文」になっているかと思う。——すなわち、外から見た「太宰治」（つまり「外的事実」としての「太宰治」という人間、それは、まさに他人から見た「太宰治」という人間であるが、それは、こんなふうに見えていたかも知れないが、しかし、内から見た「太宰治」（つまり「内的事実」としての「太宰治」という人間、それは、まさに自分自身が見た「太宰治」という人間であるが、それは、むしろ「こういう人間であった」というような、そういう、まさに極めて素直な「告白文」になっているかと思う。

もちろん、『人間失格』というのは、まさに一つの「作品」であり、それゆえ、「うそもほん」とも実にいろいろと入り混じった「フィクション」（つまり「作りもの」）ではあるが、しかし、基本的なところ（つまり「大筋」）においては、そのまま「受け入れてもよい」ものではないかと思う。というのも、この「作品」は、満三十八歳で玉川上水に「投身自殺」をはかる一ヶ月前まで書いていたものであり、それは、いわば自分の「人生の締め括り」（或いは「総括」として書かれたものであり、それゆえ、ことさらに「うそを書いて面白がる」という、そういう「心境」ではなかったのではないかと思う。もちろん、「うそをつく」という「性癖」もあると自ら告白しているので、どこまでがどうかはなかなか判別しがたいものであるが、しかし、基本的なところは、『思ひ出』という作品の「内容」とも照らし合わせて、そのまま「受け入れてもよいもの」ではないかと思う。

一、生い立ち

さて、われわれ人間の、いわゆる「人間形成」というものは、誰でもそうであるように、一つは、「遺伝的要素」と、もう一つは、その「環境的要素」（つまり「生い立ち」）から極めて大きな影響を受けて形成されるものである。それゆえ、太宰治も決して例外であるはずもなく、太宰治がいかにも太宰治らしい「人間形成」をするためには、一つは、「遺伝的要素」と、もう一つは、その「環境的要素」（つまり「生い立ち」）から極めて大きな影響を受けているということである。それでは、その「幼少期」は、一体、どういうものであったかと問えば、それは、まさに『思ひ出』という作品のなかに、次のように記述されている。まず、太宰治は、明治四〇年（一九〇九年）六月十九日に、県下（青森県）有数の大地主の十番目の子として生まれている。そして、「……叔母おばについての追憶はいろいろとあるが、その頃の父母の思い出は生憎あいにくと一つも持ち合せない。曾祖母そそう、祖母おば、父、母、兄三人、姉四人、弟一人、それに叔母おばと叔母おばの娘四人の大家族だった筈はずであるが、叔母おばを除いて他のひとたちの事は私も五六歳になるまでは殆ど知らずにいたと言つてよい。（これは、幼い太宰治にとって、叔母おばの存在がいかに大きく、家族の誰よりも大事な、叔母おば無しでは生きられないほどの唯一絶対の存在であったということを意味している）。そして、広い裏庭に、むかし林檎りんごの太木たいぼくが五六本あったようで、それらの木に女の子が多人数おおで登って行った有様ありさまや、そのおなじ庭の一隅に菊畑があつて、私はやはり大勢の女の子ら

と傘さし合つて菊の花の咲きそろつてゐるのを眺めたことなど、幽かに覚えて居るけれど、あの女の子らが私の姉や従姉たちだったかも知れない。……」と回想している。

さて、読んでみて感じることは、いわゆる両親の「愛情」は、直接はほとんど受けておらず、生まれてから、すぐに「乳母」に一年足らず育てられ、その後の「子育て」は、ほとんど「叔母」と「子守（たけ）」（満二歳頃から）が行なつていたことになる。しかも、その「遊び相手」は、ほとんど「女の子」であり、それゆえ、「男性的環境」というよりは、むしろ「女性的環境」のなかで育つたということになる。——さて、本来、「赤ん坊」から「おさな子」までの「心の支え」というものは、ほとんど「母親」（或いは「母親的存在」）であり、その「母親」（或いは「母親的存在」）にほとんどすべてを依存しているものである。それゆえ、その「母子関係」からこそ、本来、最も根源的な「信頼関係」（つまり「人間が信じられる」という意識）というものは、自ずと形成されるものである。つまり、「母親」（或いは「両親」）の「愛情」を十分に受けて育つた子供であれば、その「親子関係」からこそ、最も根源的な「信頼関係」（つまり「人間が信じられる」という意識）というものは、自ずと形成されるものであるが、太宰治の場合、その最も根源的な「信頼関係」（つまり「人間が信じられる」という意識）というものが、それほど十分には「形成されなかった」ということである。

それは、一体、なぜなのか？ もちろん、「叔母」の愛情を十分に受けて育つたに違ひなく、それゆえ、「叔母との関係」から、最も根源的な「信頼関係」（つまり「人間が信じられる」という意識）というものは、自ずと形成されたはずであるが、しかし、その「叔母」は、小学校に入る頃、五所川原へと分家してしまい、いわば「心の抛り所」（或いは「心の支え」というものが、突然、いなくなつてしまつたということである。しかも、なぜ、自分の「両親」は、自分を直接「育てよう」としなかつたのだろうか？ そのような「疑念」というものは、どうしても「おさな心」にも生じて来るだろう。だからこそ、「……私は子供の頃、妙にひがんで、自分を父母のほんとうの子ではないと思ひ込んでいた事があつた」ということも、起こり得るのである。つまり、太宰治にとつての「心の抛り所」（或いは「心の支え」）でもあつた「叔母」が、突然、いなくなつたということは、当然のことながら、精神的にも「不安定になりやすい要因」の一つになり得るといふことである。しかも、太宰治は、なぜか「父親」を恐れていたが、もちろん、それにもいろいろな理由があつただろうが、しかし、その「大きな理由」の一つとして、そもそも「父親との関係」において、最も根源的な「信頼関係」（つまり「父親が信じられる」という意識）というものは、十分に「形成されていなかつた」ということである。

それでは、次の段階を見てみたいと思うが、それは、次のようなものである。「……さて、六つ七つになると思い出もはつきりしている。私がたけという女中から本を読むことを教えられ、二人で様々の本を読み合つた。たけは私の教育に夢中であつた。私は病身だつたので、寝ながらたくさん本を読んだ。読む本がなくなれば、たけは村の日曜学校などから子供の本をどしどし借りて来て私に読ませた。私は黙読することを覚えていたので、いくら本を読んでも疲れないのだ。たけはまた、私に道徳を教えた。お寺へ屢屢連れて行つて、地獄極楽の御絵掛地を見せて説明した」とある。しかし、「……やがて私は故郷の小学校へ入つたが、追憶もそれと共に一変する。たけは、いつの間にかいなくなつていた。或る漁村へ嫁に行つたのであるが、私がおのあとを追うだろうという懸念からか、私には

何も言わずに突然いなくなった」とある。(ちなみに、この「たけ」という女性は、太宰治の満二歳頃からの「子守り」として年季奉公に入った満十三歳の女中であった)。しかも、「……少し前には、叔母とも別れていた」ということになる。これらのことは、やはり太宰治の「人間形成」の上で、まさに決定的な「影響」を与えていくものである。

まず、一つは、「叔母との関係」から、また、「たけとの関係」から、人間としての、最も根源的な「信頼関係」(つまり「人間が信じられるという意識」)というものは、自ずと形成されていたはずであるが、しかし、その「叔母」は、小学校に入る頃、五所川原へと「分家」してしまい、一方、「たけ」も、いつの間にか、遠くの町へと「嫁」に行ってしまう、まさにその「心の抛り所」(或いは「心の支え」)というものが、突然、二人ともいなくなってしまうたことである。この「喪失感」、つまり、まさに「心の抛り所」(或いは「心の支え」)であったものが、突然、二つとも消えてしまったという意識は、太宰治の「心の中」に「決定的な影響」(つまり「暗い影」)を落としてしまった。しかも、そうしたのは、恐らく、「両親」であるに違いなく、しかも、その「両親」は、自分を直接「育てよう」ともしなかった。そして、「……兄弟中で自分ひとりだけが、のけもんになされているような気がしていた」ともある。その他、そのような様々な「想い」が積み重なれば、やがて「両親」その他への「不信」(それは「親やその他が信じられない」という意識)というものが自然と芽生えはじめ、そして、その「意識」は、やがては「人間が信じられない」という「意識」へと大変心していくものである。

## 二、心の中

それでは、そのような「意識」は、太宰治の「心の中」に一体何を生み出すのかと言えば、それは、「……人間とは怖いものだ、人間とは得体の知れない生き物だ」という意識を生み出すのである。——例えば、幼少の頃のこととあるが、「……父の属していた或る政党の有名人がこの町に演説に来て、自分は下男たちに連れられて劇場に聞きに行きました。満員で、この町の特に父と親しくしている人たちの顔は皆、見えて、大いに拍手などしていました。演説がすんで、聴衆は雪の夜道を三々五々かたまって家路に就き、クソミソに今夜の演説会の悪口を言っているのです。中には、父と特に親しい人の声もまじっていました。父の閉会の辞も下手、れいの有名人の演説も何が何やら、わけがわからぬ、とその所謂父の『同志たち』が怒声に似た口調で言っているのです。そうしてそのひとたちは、自分の家に立ち寄って客間に上り込み、今夜の演説会は大成功だったと、しんから嬉しそうな顔をして父に言っていました。下男たちまで、今夜の演説会はどうだったと母に聞かれ、とても面白かった、と言っているのです。演説会ほど面白くないものはない、と帰る途途、下男たちが嘆き合っていたのです。

しかし、こんなのは、ほんのささやかな一例に過ぎません。互いにあざむき合って、しかもいずれも不思議に何の傷もつかず、あざむき合っている事にさえ気がついていないみたいな、実にあざやかな、それこそ清く明るくほがらかな不信の例が、人間の生活に充滿しているように思われます。自分だって、お道化に依って、朝から晩まで人間をあざむいているのです。自分は、修身教科書的な正義とか何とかいう道徳には、あまり関心を持っていないのです。自分には、あざむき合っていないながら、清く明るく朗らかに生きている、或い

は生き得る自信を持っているみたいなの人間が難解なのです。人間は、ついに自分にその妙諦みょうていを教おしえてはくれませんでした。それさえわかっただら、自分は、人間をこんなに恐怖し、また、必死のサーヴィスなどしなくて、すんだのでしよう」とある。

\* \* \*

例えば、われわれ人間というのは、誰でも、何かにつけて、何だかんだと「人の悪口」を言い合うものであるが、その場合、自分の悪口を言われても、それほど腹が立たないような相手であれば、その相手とは、どちらかと言えば、親しく（友だち）になれる可能性は、それだけあるとともに、一方、自分の悪口を言われた時に、なぜか無性に腹が立つような相手であれば、その相手とは、なかなか友だちにはなれにくいのかも知れない。つまり、自分の悪口を言われた時にも、「……あいつは、そういうやつだ」というように、ある程度、相手の「気心が知れている」とともに、その「相手の気心（人間性）」などもある程度信じられているような場合であれば、恐らく、親しく（友だち）になれる可能性は、それだけ高くなるのである。——つまり、自分の悪口を言われても、それほど腹が立たないからこそ、友だちでいられるのであり、逆に、自分の悪口を言われた時に、無性に腹が立てば、その相手とは友だちではいられなくなるだろう。それゆえ、「……悪口を言われても、それほど腹が立たず、ある程度許せる相手であるとともに、その気心（人間性）などもある程度信じられている」ような相手であれば、その人（相手）とは、親しく（友だち）になれる可能性は、それだけ高くなるということである。

### 三、三葉の写真

それでは、『人間失格』の本文に添って、順に考えてみたいと思うが、最初は、いわゆる「三葉みづはの写真」からであり、その「本文」は、次のようなものである。「……私は、その男の写真を三葉みづは、見たことがある。一葉いちばは、その男の幼年時代、とても言うべきであろうか、十歳前後かと推定される頃の写真であって、その子供が大勢の女のひとに取りかこまれ、（それは、その子供の姉あねたち、妹たち、それから、従姉妹いとこたちかと想像される）庭園の池のほとりに、荒い縞しまの袴はかまをはいて立ち、首を三十度ほど左に傾け、醜みにくく笑っている写真である。第二葉だいにの写真の顔は、これはまた、びっくりするくらいひどく変貌へんぼうしている。学生の姿である。高等学校時代の写真か、大学時代の写真か、はっきりしないけれども、とにかく、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、不思議にも、生きている人間の感じはしなかった。もう一葉いちばの写真は、最も奇怪なものである。まるで、とうしの頃がわからない。頭はいくぶん白髪のようにある。それが、ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちているのが、その写真にハッキリ写っている）の片隅で、小さい火鉢に両手をかざし、こんどは笑っていない。どんな表情も無い。謂いわわば、坐まって火鉢に両手をかざしながら、自然に死んでいるような、まことにいまわしい、不吉なおいのする写真であった。この顔には表情が無いばかりか、印象さえ無い。……」とある。

さて、この「三枚の写真」は、もちろん、「太宰治」自身であるが、それは、まさに外から見た「太宰治」の外見そのものであり、一枚目は、幼少期の外見であり、多くの女性たちに囲まれて育ったということであり、二枚目は、青年期の外見であり、びっくりするほどの美貌の学生であったということであり、そして、三枚目は、成人期以降の外見であ

り、後年へと向けて、その容貌も大きく変化して行ったということである。そして、『人間失格』の本文の中の「第一の手記」というのは、まさに「一枚目の写真」（それは「幼少期」）の、その頃の太宰治の「内面」（つまり「内的事実」）の素直な記述であり、また、「第二の手記」というのは、まさに「二枚目の写真」（それは「青年期」）の、その頃の太宰治の「内面」（つまり「内的事実」）の素直な記述であり、そして、「第三の手記」というのは、まさに「三枚目の写真」（それは鎌倉の「心中未遂事件以降」）の、その頃の太宰治の「内面」（つまり「内的事実」）の素直な記述になっているかと思う。

もちろん、『人間失格』というものは、まさに一つの「作品」であり、それゆえ、「うそもほんと」も実にいろいろと入り混じった「フィクション」（つまり「作りもの」）であると共に、それらに関する実に事細かな「研究」その他などは、すでに数多くの「太宰治研究者」たちによってなされているので、ここではあくまでも『人間失格』という「作品」そのものを丁寧に読み解いてみたいということであり、それゆえ、まさに「作品」そのものの丁寧な「考察」になっているのである。

\*

\*

四、第一の手記

#### 四、第一の手記

さて、「第一の手記」であるが、それは、まさに「幼少期」の「内的事実」の記述であり、その本文は、次のようなものである。まず、自分の人生を振り返って、「……恥の多い生涯を送って来ました」とある。これは、恐らく、素直な感想であり、その「原因」（要因）は、一体、どこにあったかと自身に問うてみた時に、それは、やはり、この「幼少期」にこそ、あったということである。つまり、「……自分には、人間の生活というものが、見当がつかないのです」とある。——例えば、停車場のブリッジを実用ではなく、外国の遊技場のように複雑にして楽しくしたものだと思ひ込み、また、絵本の地下鉄道も、地上の車に乗るよりも、地下の車に乗る方が風変わりで面白い遊びだからと思ひ込んでいた」とある。これは、世の中の「物事」というのは、基本的には「実用（実利）」的などころから生み出されているということが理解できず、例えば、より楽しいから、より面白いからという、そういう「視点」からしか世の中の「物事」は見えてはいなかったということである。しかし、これ自体は、それほど不思議なことではなく、幼少期の子供たちというのは、多かれ少なかれ、そのような「思ひ込み」や「勘違い」などをしがちなものである。しかし、次の、子供の頃は、枕カバーやふとんカバーをつまらない装飾だと思ひ込んでいたというのは、それらとは少し違うものである。つまり、担当の女中さんたちが、いつも枕カバーやふとんカバーなどをきれいに洗ってくれていたのも、幼い太宰治お坊ちやまにとって、枕やふとんというのは、いつもきれいなものであり、それゆえ、その「枕やふとんに汚れ防止のカバーを付ける」などは、想像すらできなかったということである。

また、「……子供の頃は、空腹という事を知りませんでした。いや、それは、自分が衣食住に困らない家に育ったという意味ではなく、そんな馬鹿な意味ではなく、自分には『空腹』という感覚はどんなものか、さっぱりわからなかったのです。へんな言いかたですが、おなかが空いていても、自分でそれに気がつかないのです」とある。これは、非常に面白い。その「謎」を解き明かせば、それは、次のようになるかと思う。つまり、例えば、もし「極貧の家庭」に生まれ育っていたならば、恐らく、何よりも先に「空腹」を実感したに違いなく、また、子供の多い貧しい家庭などであれば、早く食べなければ、おかずなどはすぐになくなってしまおうという、そういう危機感を持って食事に臨むことにもなるだろう。ところが、一方、幼い太宰治お坊ちやまには、そのような「危機感」がまったく欠落していた。それは、食べ物、いつも身近にあり、その食べ物がなくなら、食べられなくなるなどとは、想像すらできないのである。それゆえ、腹が空いても、今、すぐ食べる必要を全く感じないのも、いつでも好きな時に食べられるからである。今、食べなければ、いつ食べられるか分からないという、そういう「危機感」の完全なる欠落である。それは、やはり「衣食住に、ほど恵まれた家庭環境」に育ったからである。

さらに、「……子供の頃の自分にとって、最も苦痛な時刻は、実は、自分の家の食事の時間でした。自分の田舎の家では、十人くらいの家族全部、めいめいのお膳を二列に向い合せに並べて、末っ子の自分は、もちろん一ばん下の座でしたが、その食事の部屋は薄暗く、昼ごはんの時など、十幾人の家族が、ただ黙々としてめしを食っている有様には、自分はいつも肌寒い思いをしました。それに田舎の昔気質の家でしたので、おかずも、たいていきまわって、めずらしいもの、豪華なもの、そんなものは望むべくもなかったので、

いよいよ自分は食事の時刻を恐怖しました。自分はその薄暗い部屋の末席に、寒さにがたがた震える思いで口にごはんを少量づつ運び、押し込み、人間は、どうして一日に三度々々ごはんを食べるのだろう、実にみな厳粛な顔をして食べている、これも一種の儀式のよなもので、家族が日に三度々々、時刻をきめて薄暗い部屋に集まり、お膳を順序正しく並べ、食べたくなって無言でごはんを噛みながら、うつむき、家中にうごめいている霊たちに祈るためのものかも知れない、とさえ考えた事があるくらいでした」とある。

これも、非常に面白い「内容」であり、まず、三度三度の食事の時は、必ず、順序正しく並べられた一人一人のお膳があり、そして、食べる時には、必ず、「……無言で、少量づつ口に運び、みな厳粛な顔をして食べる」というのが、恐らく、「食事の時のマナー」であり、それゆえ、何かおしやべりをしながらとか、がつがつ食べるようなことは固く禁じられていたのである。それは、ふざけたり、遊び盛りの幼い太宰治にとつてみれば、実に堅苦しい、まさに「一種の儀式のようなもの」に思えたということである。しかも、食事の時に座る家族の「位置関係」というものは、そのまま家族の「存在価値の位置関係」のようにも思えてきて、いつも末席に座る自分という存在は、例えば、「……自分などは家族の中ではいなくてもいいような存在」に思えてきたとしても、何も不思議なことはないだろう。さらに、父親からも母親からもいちばん遠いところに座っているもので、直接、顔を見合わせることも、言葉を交わすこともなく、「……ただ黙々としてめしを食っている有様には、自分はいつも肌寒い思いをしました」とあるが、それは、身体的な寒さだけではなく、むしろ「心の寒さ」をもまさに実感していたということである。

例えば、一般の家庭での食事というのは、ふつう一つの大きな「丸いお膳」や「テーブルの上」にすべての料理を置いて、みんなで囲んで食べるものであり、確かに、昔は、いわゆる「食べる時は黙って食べなさい」という風習もありましたが、それでも、お互い顔を見合わせて、お母さんなどは、「……いっぱい食べなさい。好き嫌いなど言っていたら、大きくなれないわよ」というような言葉は、自然と発していたのであり、家族の間での「必要最少限の言葉のやり取り」は、当然、あったのであり、それらが自然と家族のお互いの「心の結びつき」にもなっていくのだろう。——例えば、お父さんが一番小さな子供を膝の上に置いて、幼い子供の口にスプーンで料理などを食べさせる風景があるが、それは、決して親バカな風景などではなく、幼い子供との直接的な関わりであり、だっこをしたり、高い高いをしたり、一緒に風呂に入ったたり、或いは、一緒に遊んだりするようなことも併せて、決してつまらないことではなく、それは、「父親との関係」において、最も根源的な「信頼関係」(つまり「父親が信じられる」という意識)というものを生み出す、まさに「原点」そのものである。一方、幼い太宰治は、そのような経験を「実の父親」とも「実の母親」ともほとんどしていない。少なくとも、太宰治の「記憶の中」にはまったく残っていないのである。それは、まさに実の父親に愛されたという記憶、また、実の母親に愛されたという記憶というものが、完全に欠落しているということである。ここにこそ、まさに太宰治の「人間形成」の原点そのものがあるのである。

\*

\*

太宰治は、父親を必要以上に恐れていた。その理由は、言うまでもなく、前述の「父親との関係」において、最も根源的な「信頼関係」(つまり「父親が信じられる」という意識)というものが、ほとんど形成されていなかったからである。実の父親というのは、まさに

「国会議員」であり、実に忙しく動きまわって、家を留守にすることも多く、父親と直接親しく交わるようなことは、恐らく、極めて少なかったに違いない。それは、『思ひ出』の中でも、「……私の父は非常に忙しい人で、うちにいることがあまりなかった。うちにいても子供らと一緒に居おらなかった。私はこの父を恐れていた」とある。それゆえ、実の「父親」というのは、敢えて言えば、どこか他人と同じような「存在」であり、それゆえ、その「父親の心」というものは、よく分からないし、ましてや、その父親の「心を読む」などは、なおさらできなかったに違いない。だからこそ、怖いのである。それに加えて、家の中では絶対的な「權威」を持っていただろうから、なおさら、実の「父親」というものを、必要以上に恐れていたということにもなるのだろう。

例えば、「……自分の父は、東京に用事の多いひとでしたので、上野の桜木町に別荘を持っていて、月の大半は東京のその別荘で暮らしていました。そうして帰る時には家族の者たち、また親戚の人たちにまで、実におびただしくお土産みやげを買って来るのが、まあ、父の趣味みたいなものでした。そして、いつかの父の上京の前夜、こんど帰る時には、どんなお土産みやげがいいか、一人々に笑いながら尋ね、それに対する子供たちの答えをいちいち手帖に書きとめるのでした。父が、こんなに子供たちと親しくするのは、めずらしい事でした」とある。そして、「葉藏ようぞうは？」と聞かれて、「……自分は口ごもってしまいました。何がほしいと聞かれると、とたんに、何も欲しくなくなるのでした。どうでもいい、どうせ自分を楽しませてくれるものなんか無いんだという思いが、ちらと動くのです。と、同時に、人から与えられるものを、どんなに自分の好みに合わなくても、それを拒こむ事も出来ませんでした。イヤな事を、イヤと言えず、また、好きな事も、おらずと盗むように、極めてにがく味わい、そうして言い知れぬ恐怖感にも代えるのでした。つまり、自分には、二者選一の力さえ無かったです。これが、後年に到り、いよいよ自分の所謂『恥の多い生涯』の、重大な原因ともなる性癖の一つだったように思われます」とある。

つまり、太宰治という人は、「……いやなことを、いやと言えない、断ることができない。また、好きなことも、おらずと盗むように、極めてにがく味わい、恐怖心にも代える」という、そのような「性格」が、まさに「恥の多い生涯」になった「重大な原因」の一つであると、本人はそう思っている。これは、一体、何かと敢えて問えば、それは、まさに「主体性」のなさ（つまり「確たる自分」のなさ）の表れであり、相手のペースに巻き込まれては、それに振り回されやすいということである。それでは、太宰治の、その「主体性」のなさ（つまり「確たる自分」のなさ）は、一体、どこから生じて来たのだろうか？

例えば、純正の「お嬢様育ち」であれば、どうしても「世間知らず」になりやすく、また、純正の「お坊ちゃま育ち」であれば、どうしても「世間知らず」になりやすい。それは、なぜかと問えば、それは、周りの人たちが本人の代わりになんでもやってくれるからであり、どうしても他人まかせになりやすく、また、自分でやって学ぶという経験も、どうしても少なくなってしまうからである。——例えば、敢えて極端な例を挙げるならば、お城暮しのお殿様には、庶民の生活というものは、よくわからないし、また、庶民の気持ちというものもよくわからないのである。敢えて言えば、どこかそれに似たような「心理的狀態」が、太宰治の「頭の中」（或いは「心の中」）にもあつたのかも知れない。——つまり、どういうことであれ、非常に「裕福な家」（恵まれた衣食住その他）の中で育つた太宰治にとって、それは、ごく日常のあたり前のことに思えることでも、それよりも遙

かに貧しいふつう一般の人たちにとっては、決してあたり前のことではなく、むしろ特別のことに思えるという、そういう「意識のズレ」みたいなものは、必ず生じるものである。例えば、太宰治は、「……人間は、どうして一日に三度々々ごはんを食べるのだろうか、食べたくなくても食べなければならぬ」というような愚痴をこぼしているところがあるが、当時、非常に貧しい家庭の人たちにとっては、「……一日に三度々々ごはんを食べることすらできなかったかも知れない」のである。こういう「意識のズレ」というものは、本人にはなかなか自覚できず、しかも、このようなことは、すべてのこと、に及ぶのである。

例えば、ドラマで有名な『おしん』の主人公というのは、明治三十年生まれで、七歳の時に、口減らしのために、「子守奉公」に出されている。一方、子守のたけも、明治三十一年生まれで、満十三歳の時に、家は、津島家の小作人であったが、その小作の「年貢米」の代わりに、まさに幼い太宰治の「子守奉公」として出されているのである。——つまり、太宰治が生まれ育った時代の、当時の日本（特に「東北地方」）の一般の生活ぶりというのは、まさにそのくらい生活は非常に厳しいものがあつたのである。

\*

\*

そして、「……自分には、人間の営みというものが未だに何もわかっていない、という事になりそうです。自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちがつているような不安、自分はその不安のために夜々、輾転し、呻吟し、発狂しかけた事さえあります。自分は、いったい幸福なのでしょう、自分は小さい時から、実にしばしば、仕合せ者だと人に言われて来ましたが、自分ではいつも地獄の思いで、かえって、自分を仕合せ者だと言ったひとたちのほうが、比較にも何もならぬくらいずっとずっと安楽なように自分には見えるのです」とある。——つまり、自分の「考えや価値観」と、他の人たちの「考えや価値観」とが全く違うのであり、また、一般人たちであれば、誰でもよく知っているような「常識的なこと」ですら、「お嬢様育ち」や「お坊ちやま育ち」であるがために、自分は、誰もが知っているようなことすら知らないという不安であり、また、何かとんちんかんのことを言ったり、やったりして、みんなから笑われたりするようなことであるが、「……つまり、わからないのです。隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見当つかないのです」。そして、「……自分ひとり全く変っているような、不安と恐怖に襲われるばかりなのです。自分は隣人と、ほとんど会話が出来ません。何を、どう言ったらいいのか、わからないのです。そこで考え出したのは、道化でした。それは、自分の、人間に対する最後の求愛でした。自分は、人間を極度に恐れているが、それでいて、人間を、どうしても思い切れなかったらしいのです。そうして自分は、この道化の一線でもわずかに人間につながる事が出来たのでした。おもてでは、絶えず笑顔をつくりながらも、内心は必死の、それこれ千番に一番の兼ね合いでもいいうべき危機一髪の、油汗流してのサーヴィスでした」となるのである。

これが、太宰治の有名な「道化」であるが、一般に、「道化」とは、わざとおかしな「行為や言動」などをすることによって、周囲の人たちを笑わせるということであり、太宰治の場合、それは、俗に言う「天然キヤラ」とか人を笑わせることが楽しいからというように、そういう一般的な理由からではなく、それは、むしろ、何よりも自分の「人間への恐怖心」を覆い隠すための、また、人間とつながっていたがための「必死の努力」であつたということである。そして、「……何でもいいから、笑わせておればいいのだ、そうす

ると、人間たちは、自分が彼等の所謂『生活』の外にいても、あまりそれを気にしなくなる」とあるが、それは、「……あいつは、そういうやつ（キャラ）ということになり、それ以上の『干渉』（つまり『心の中』まで覗き込むようなこと）はしなくなるということ」であり、その結果として、自分の「心の中」（例えば『人間への恐怖心』）などは、他人に知られずに済むというようなことである。……

\*

\*

さて、「……自分は子供の頃から、自分の家族の者たちに対してさえ、彼等がどんなに苦しく、またどんな事を考えて生きているのか、まるでちつとも見当つかず、ただおそろしく、その気まずさに堪える事が出来ず、既に道化の上手になっていました。つまり、自分は、いつのまにやら、一言も本当の事を言わない子になっていたのです。

また自分は、肉親たちに何か言われて、口応えした事はいちども有りませんでした。そのわずかなおごごとは、自分には霹靂の如く強く感ぜられ、狂うみたいになり、口応えどころか、そのおごごとこそ、謂わば万世一系の人間の「真理」とかいふものに違いない、自分にはその真理を行なう力が無いのだから、もはや人間と一緒に住めないのではないかしら、と思いついてしまった。だから自分には、言い争いも自己弁解も出来ないのでした。人から悪く言われると、いかにも、もつとも、自分がひどい思い違いをしているような気がして来て、いつもその攻撃を黙して受け、内心、狂うほどの恐怖を感じました」とある。（これは、まさに「主体性」のなさ、つまり、「確たる自分」のなさの表れであり、相手のペースに巻き込まれては、それに振り回されてしまうということである。）

それは誰でも、人から非難せられたり、怒られたりしていい気持がするものではないかも知れませんが、自分は怒っている人間の顔に、獅子よりも鱈よりも、もつとおそろしい動物の本性を見ます。ふだんは、その本性をかくしているようですけれど、何かの機会に、たとえば、牛が草原でおっとりした形で寝ていて、突如、尻尾でビシヤと腹の蛇を打ち殺すみたいに、不意に人間のおそろしい正体を、怒りに依って暴露する様子を見て、自分はいつも髪の毛の逆立つほどの戦慄を覚え、この本性もまた人間の生きて行く資格の一つなのかも知れないと思えば、ほとんど自分に絶望を感じるのでした。

人間に対して、いつも恐怖に震えおののき、また、人間としての自分の言動に、みじんも自信を持たず、そうして自分ひとりの懊悩は胸の中の小箱に秘め、ひたかくしに隠して、ひたすら無邪気の楽天性を装い、自分はお道化たお変人として、次第に完成されて行きました、とある。これが、少なくとも「幼少期」における、まさに太宰治の「内的事実」であったということである。

\*

\*

ところで、太宰治の「幼少期」の「生活」については、次のような記述もあるので、その幾つかを書き加えておきたいと思うが、例えば、——自分は、下男や下女たちを洋室に集めて、下男の一人に滅茶苦茶にピアノのキイを叩かせ、（田舎でしたが、その家には、たいていのものが、そろっていましたが）、自分はその出鱈目の曲に合せて、インデアン踊りを踊って見せて、皆を大笑いさせました。次兄は、フラッシュを焚いて、自分のインデアン踊りを撮影して、その写真が出来たのを見ると、自分の「腰布」（それは更紗の風呂敷でした）の合せ目から、小さいおチンポが見えていたので、これがまた家中の大笑いでした。自分にとって、これまた意外の成功というべきものだったかも知れません。

自分は毎月、新刊の少年雑誌を十冊以上も、とっていて、また、その他にも、様々の本を東京から取り寄せて黙って読んでいましたので、メチャクチャ博士だの、また、ナンジャモンジャ博士などとは、大変な馴染で、また、怪談、講談、落語、江戸小咄などの類にも、かなり通じていましたから、剽軽な事をまじめな顔をして言つて、家の者たちを笑わせるのには事を欠きませんでした。

一方、学校では、自分は、そこでは尊敬されかけていたのです。尊敬されるという觀念もまた、甚だ自分をおびえさせました。ほとんど完全に近く人をだまして、そうして、或る一人の全知全能の者に見破られ、木っ葉みじんにやられて、死ぬる以上の赤恥をかかせられる、それが「尊敬される」という状態の自分の定義でした。人間をだまして「尊敬され」ても、誰か一人が知っている、そうして、人間たちもやがてその一人から教えられて、だまされた事に気づいた時、その時の人間たちの怒り、復讐は、一体、まあ、どんなでしょう。想像してさえ、身の毛がよだつ心地がするのです。

自分は、金持ちの家に生れたという事よりも、俗にいう「できる」事に依つて、学校中の尊敬を得そうになりました。自分は、子供の頃から病弱で、よく一月二月、また一学年近くも寝込んで学校を休んだ事さえあったのですが、それでも、病み上りのからだで人力車に乗つて学校へ行き、学年末の試験を受けてみると、クラスの誰よりも所謂「できて」いるようでした。からだ具合のよい時でも、自分は、さっぱり勉強せず、学校へ行つても授業時間に漫画などを書き、休憩時間にはそれをクラスの者たちに説明して聞かせて、笑わせてやりました。また、綴り方には、滑稽噺ばかり書き、先生から注意されても、しかし、自分はやめませんでした。先生は、実はこっそり自分のその滑稽噺を楽しみにしている事を自分は、知っていたからでした。或る日、自分は、れいに依つて、自分が母に連れられて上京の途中の汽車で、おしっこを客車の通路にある痰壺にしてみました。失敗談（しかし、その上京の時に、自分は痰壺と知らずにしたのではありませんでした。子供の無邪気をてらつて、わざと、そうしたのでした）を、ことさらに悲しそうな筆致で書いて提出し、先生は、きつと笑うという自信がありましたので、職員室に引き揚げて行く先生のあとを、そつとつけて行きましたら、先生は、教室を出るとすぐ、自分のその綴り方を、他のクラスの者たちの綴り方の中から選び出し、廊下を歩きながら読みはじめて、クスクス笑い、やがて職員室にはいつて読み終えたのか、顔を真赤にして大声を挙げて笑い、他の先生に、さっそくそれを読ませているのを見とどけ、自分は、たいへん満足でした。

——お茶目。自分は、所謂お茶目に見られる事に成功しました。尊敬される事から、のがれる事に成功しました。通信簿は全学科とも十点でしたが、操行というものだけは、七点だったり、六点だったりして、それもまた家中の大笑いの種でした。けれども自分の本性は、そんなお茶目さんなどは、凡そ対蹠的なものでした。その頃、既に自分は、女中や下男から、哀しい事を教えられ、犯されていました。幼少の者に対して、そのような事を行うのは、人間の行い得る犯罪の中で最も醜悪で下等で、残酷な犯罪だと、自分はいまでは思っています。しかし、自分は、忍びました。これでまた一つ、人間の特質を見たというような気持ちさえて、そうして、力無く笑っていました。もし自分に、本当の事を言う習慣がついていたなら、悪びれず、彼等の犯罪を父や母に訴える事が出来たのかも知れませんが、しかし、自分は、その父や母をも全部は理解する事が出来なかつたのです。人間に訴える、自分は、その手段には少しも期待できませんでした。父に

訴えても、母に訴えても、お巡りに訴えても、政府に訴えても、結局は世渡りに強い人の、世間を通りのいい言い分に言いくまられるだけの事では無いかしら。——必ず片手落のあの、わかり切つて、所詮、人間に訴えるのは無駄である。(これは、すでに人間はどこか信用できないという意識があったということである)。自分はやはり、本当の事は何も言わず、忍んで、そうしてお道化をつづけているより他、無い気持なのでした。

なんだ、人間への不信を言っているのか？へえ？お前はいつクリスチャンになったんだい、と嘲笑する人もあるかも知れませんが、しかし、人間への不信は、必ずしもすぐに宗教の道に通じているとは限らないと、(人間への不信は、宗教などとは全く関係ない)、自分には思われるのですけど。現にその嘲笑する人をも含めて、人間は、お互いの不信の中で、エホバも何も念頭に置かず(つまり宗教などとは何の関係もなく)、平気で生きているではありませんか。やはり、自分の幼少の頃の事でありましたが、父の属していた或る政党の有名人が、この町に演説に来て、自分は下男たちに連れられて劇場に聞きに行きました。満員で、そうして、この町の特に父と親しくしている人たちの顔は皆、見えて、大いに拍手などしていました。演説がすんで、聴衆は雪の夜道を三々五々かたまって家路に就き、クソミノに今夜の演説会の悪口を言っているのです。中には、父と特に親しい人の声もまじっていました。父の開会の辞も下手、例の有名人の演説も何が何やら、わけがわからぬ、とその所謂父の「同志たち」が怒声に似た口調で言っているのです。そうしてそのひとたちは、自分の家に立ち寄って客間に上り込み、今夜の演説会は大成功だったと、しんから嬉しそうな顔をして父に言っていました。下男たちまで、今夜の演説会はどうだったと母に聞かれ、とても面白かった、と言ってけろりとしているのです。演説会ほど面白くないものはない、と帰る途々、下男たちが嘆き合っていたのです。

しかし、こんなのは、ほんのささやかな一例に過ぎません。互いにあざむき合つて、しかもいずれも不思議に何の傷もつかず、あざむき合っている事にさえ気がついていないみたいな、実にあざやかな、それこそ清く明るくほがらかな不信の例が、人間の生活に充滿しているように思われます。けれども、自分には、あざむき合っているという事には、さして特別の興味もありません。自分だって、お道化に依つて、朝から晩まで人間をあざむいているのです。自分は、修身教科書的な正義とか何とかいう道徳には、あまり関心を持ってないのです。自分には、あざむき合つていながら、清く明るく朗らかに生きている、或いは生き得る自信を持っているみたいな人間が難解なのです。人間は、ついに自分にその妙諦を教えるはくれませんでした。それさえわかったら、自分は、人間をこんなに恐怖し、また、必死のサーヴィスなどしなくて、すんだのでしょうか。人間の生活と対立してしまつて、夜々の地獄のこれほどの苦しみを嘗ずにすんだのでしょうか。つまり、自分が下男下女たちの憎むべきあの犯罪をさえ、誰にも訴えなかったのは、人間への不信からではなく、また勿論クリスト主義のためでもなく、人間が、葉蔵という自分に対して信用の殻を固く閉じていたからだったと思います。父母でさえ、自分にとって難解なものを、時折、見せる事があったのですから。(これは「父や母でさえ良い面だけではなく、悪い面や信用できない一面などを見せることがあったのである。ましてや他人であれば、なおさらのことである)。——そうして、その、誰にも訴えない、(たとえ誰かに訴えても無駄であるという意識)、(そのような)自分の孤独の匂いが、多くの女性に、本能に依つて嗅ぎ当てられ、後年さまざま、自分がつけ込まれる誘因の一つになったような気もするのです。

つまり、自分は、女性にとって、  
\* 恋の秘密を守れる男であったというわけなのでした。  
\*

五、第二の手記

## 五、第二の手記

さて、今度は「第二の手記」であるが、それは、まさに「青年期」の「内的事実」の記述であり、その本文は、次のようなものである。「……海に近い、二十本以上もある山桜が、新学期には、青い海を背景にして、その絢爛たる花を咲かせる、東北のある中学校に、受験勉強もろくにせず、無事に入学でき、そして、その中学校のすぐ近くに、自分の家の遠い親戚に当る者の家にあずけられたので、朝礼の鐘の鳴るのを聞いてから、走って登校するとうような、かなり怠惰な中学生でしたが、それでも、例のお道化に依って、一日とクラスの人気を得ていました。自分のお道化もその頃にはいよいよびったり身につけて来て、人をあざむくのに以前ほどの苦勞を必要としなくなっていたが、自分の人間恐怖は、それは以前にまさるとも劣らぬくらい烈しく胸の底で蠕動していましたが、しかし、演技は実ののびのびとして来て、教室にあつては、いつもクラスの者たちを笑わせていた」とある。——ところが、体育の時間、見学の竹一という生徒に、鉄棒でわざと失敗をしてみんなを笑わせた時に、「ワザ、ワザ」と、わざと失敗したということを見抜かれてしまい、それからの日々の、自分の不安と恐怖、自分の「お道化」がほかの人たちにばらされないようにと、何とかこの竹一を手なづけようと、雨の日、その竹一を二階の自分の部屋へと誘い込むのに成功するのであったとある。

その家には、五十過ぎの小母さんと、三十位の眼鏡をかけて、病身らしい背の高い「姉」（出戻り）と、最近女学校を卒業したらしい、セツちゃんという姉に似ず背が低く丸顔の「妹」と、この三人だけの家であり、下の店には、文房具やら運動用具などを少々並べてはいたが、主な収入は、亡くなった主人が建てて残した五六棟の長屋の家賃のようであったとある。——耳が痛いという竹一の膿を持った耳の掃除を入念にすると、その竹一は、「……お前は、きつと、女に惚れられるよ」と言う。この言葉に、太宰治は、敏感に反応して、いわば「彼の女性観」を語るのである。つまり、「……自分には、人間の女性のほうが男性よりもさらに数倍難解でした。自分の家族は、女性のほうが男性よりも数多く、また、親戚にも女の子がたくさんあり、また、例の『犯罪』の女中などもいまして、自分は幼い時から、女とばかり遊んで育ったといつても過言ではないが、それは、また、しかし、実に、薄氷を踏む思いで、その女のひとたちと付きあつて来たのです。ほとんど、まるで見当が、つかないのです。五里霧中で、そうして時たま、虎の尾を踏む失敗をして、ひどい痛手を負い、それがまた、男性から受ける笞とちがって、内出血みたいに極度に不快に内攻して、なかなか治癒しがたい傷でした」とある。

例えば、「……女性は、男性よりも何倍も難解で、まるで見当がつかない」とあるが、それは、文字通り、いわゆる「……女性のことは何も分からない」というようなことではなく、むしろ、「……幼少の頃から、実に様々な女性たちと直接的に関わつては、それらの実に様々な女性たちのことを身を以って知れば知るほど、ますます女性というものが分からなくなつた」というような意味合いになるのである。

そして、太宰治の場合、いろいろな問題が生じた場合、本人の「努力」というよりも、「実家」を初めとして、その時々「女性たち」によってなんとかなつてしまう、そういう場合が多いのではないかと思う。それは、一見、非常に恵まれているように思えるが、しかし、それは、むしろ彼自身の「精神的自立」を妨げることにもなつてしまう。——そ

れでは、太宰治は、なぜ、それほどまでにその時々の「女性たち」によってなんとかなってしまふのかと敢えて問えば、それはもちろん、見た目もおそろしく美貌な男性であったからだろうが、それに加えて、本文のなかでは、「……あなたを見ると、たいいていの女のひとは、何かしてあげたくて、たまらなくなる。……いつも、おどおどしていて、それでいて、滑稽家なんだから。……時たま、ひとりで、ひどく沈んでいるけれども、そのさまが、いっそう女のひとの心を、かゆがらせる」とある。また、「……そうして、その、誰にも訴えない、(たとえ誰かに訴えても無駄であるという意識)、(そのような) 自分の孤独の匂いが、多くの女性に、本能に依って嗅ぎ当てられ、後年さまざま、自分がつけ込まれる誘因の一つになったような気もするのです。つまり、自分は、女性にとって、恋の秘密を守る男であったというわけなのでした」ともある。

例えば、太宰治という人は、物心がつく頃から、すでに「数多くの女性たち」のなかでどっぷりと身を置いていて、それは、「……自分は、幼い時から、女とばかり遊んで育ったといつても過言ではない」ので、その様々な女たちが醸し出す「独特の雰囲気」というものを、毎日、まさに「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ分けながら育った人」であり、それゆえ、女性たちが何を想い、何も考え、何を欲し、そして、何を訴えているのかは、その顔の表情をはじめ、身振りや手振り或いは声の調子や話す内容などを厳密に見聞きしているだけでも、自ずとその意味するものを微妙なところまで感じ分けることが、或いはでき得たのかも知れない。もちろん、それは無理だとしても、しかし、女性の心のどこをどのように押せば、どのように反応するかぐらいの「ツボ」は、はつきりと心得ていて、女性と関わることにはそれほど違和感も感じず、また、自然と溶け込むことができ得たのだろう。

例えば、女性が急に泣き出したりした場合、何か甘いものを手渡してやると、それを食べて機嫌を直すという事だけは、幼い時から、自分の経験に依って知っていました。また、自分が例に依って公平に皆を笑わせ、友だちが帰ると、セツちゃんは、必ずその友だちの悪口を言うのでした。あのひとは不良少女だから、気をつけるように、ときまわって言うのでした。そんなら、わざわざ連れて来なければ、よいのに、(それは、自分が二階に来たいからであり、また、友だちを好きになつては困るからである)。おかげで自分の部屋の来客の、ほとんど全部が女、という事になってしまいました。

また、女は、人のいるところでは自分(太宰)をさげすみ、邪険にし、誰もいなくなる、ひと抱きしめるのでした。女は死んだように深く眠る、女は眠るために生きているのではないかしらと思うほどでした。その他、女に就いてのさまざまの観察を、すでに自分は、幼年時代から得ていたのですが、同じ人類のようでありながら、男とはまた全く異なった生きもののような感じで、そうしてまた、この不可解で油断のならぬ生きものは、奇妙に自分をかまうのでした。「惚れられる」なんていう言葉も、また「好かれる」という言葉も、自分の場合にはちっともふさわしくなく、「かまわれる」とでも言ったほうが、まだしも実状の説明に適しているのかも知れません。

そして、女は、男よりも更に、道化には、くつろぐようでした。自分がお道化を演じ、男はさすがにいつまでもゲラゲラ笑ってもいませんし、それに自分も男の人に対して、調子に乗ってあまりお道化を演じ過ぎると失敗するという事を知っていたので、必ず適当のところまで切り上げるように心掛けていました。女は適度という事を知らず、いつまでもいつまでも、自分にお道化を要求し、自分はその限らないアンコールに応じて、へとへと

なるのでした。実に、よく笑うのです。いったいに、女は、男よりも快樂をよけいに頰張る事が出来るようです。——そして、この「道化」こそは、数多くの女性たちを惹き寄せた「大きな要因」の一つでもあるのだらう。というのも、「笑い」というのは、女性たちの「……心を氣樂にし、心を開放させる」ものであり、しかも、親しみを感ぜさせる効果もあり、いわば「口説きやすくなる」のである。つまり、女性というのは、人前ではいつも緊張している、たとえそう見えなくても、緊張している。その緊張を取り除いてくれるのが、まさに「笑い」であり、それが、まさに「気持ちいい」のである。それゆえ、女性たちの「ストレス解消」には、まさに最適な「効果」を發揮するものなのである。

\*

\*

さて、竹一から、惚れられるという予言と、偉い絵描きになるという予言の、この二つの予言を持って、やがて、自分は東京へ出て来ました。それは、「……自分は、美術学校に入りたかったのですが、父は、前から自分を高等学校にいれて、末は官吏かんりにするつもりで、自分にもそれを言い渡してあったので、口応くちやうえ一つ出来ないたちの自分は、ぼんやりそれに従ったのでした。四年から受けて見よ、と言われたので、自分も桜と海の中学校はもういい加減あきていましたし、五年に進級せず、四年終了のままで、東京の高等学校に受験して合格し、すぐに寮生活に入りましたが、その不潔と粗暴へきえきに辟易へきえきして、寮から出て、上野桜木町の父の別荘に移りました。自分には、団体生活というものが、どうしても出来ません。それにまた、青春の感激だとか、若人の誇りだとかいう言葉は、聞いて寒気さむけがして来て、とても、あの、ハイスクール・スピリットとかいうものには、ついて行けなかったのです。父は議会の無い時は、月に一週間や二週間しかその家に滞在していませんでしたので、父の留守の時は、かなり広いその家に、別荘番の老夫婦と自分と三人だけで、自分は、ちよいちよい学校を休んで、家で一日中、本を読んだり、絵をかいたり、また、父が上京して来ると、自分は、毎朝そそくさと登校するのですが、しかし、本郷千駄木町の洋画家、安田新太郎氏の画塾に行き、三時間も四時間も、デッサンの練習をしている事もあったのです。学校の授業に出ても、自分はまるで聴講生みたいな特別の位置にいるような、自分自身で白々しい気持がして来て、いっそう学校へ行くのが、おっくうになったのでした、とある。

\*

\*

この辺は、フィクションが多く、実際とは違う。まず、大正十四年（一九二三年）、十歳の時であるが、三月に、実の「父親」（津島源右衛門）は、東京で亡くなっている。享年五十二歳である。そして、太宰治は、四月に、県立青森中学校に入学して、それが「桜と海の中学校」であり、それを四年で卒業して、昭和二年（一九二七年）、十八歳の時であるが、四月に、（東京ではなく）、弘前高等学校に入学している。そして、七月に、芥川龍之介の自殺で大きな衝撃を受けて、学業を放棄して、義太夫を習い始め、花柳界に入りして、十八歳、高校一年の時、九月に、芸伎げいぎの「小山初代」と出会う。また、高校時代は、級友と「同人雑誌」などをつくり、いろいろな小説を書いている。そして、二十歳の秋頃から、左翼思想に傾倒する。つまり、『人間失格』では、これらのことが省略されている。それでは、一体、なぜ「省略」されているのだろうか？ それは、結局、この頃ころのことは、恐らく、あまり書きたくないという心理が働いているのかも知れない。そして、東京へ出たとあるが、東京に出るのは、二十一歳の四月で、東京帝国大学ふつ仏文科に入学す

ると、五月には「井伏鱒二」を訪ねて、彼に会っている。その彼が「堀木正雄」のモデルではないかと一般に言われていて、左翼運動は、ここで「具体化」（実際に活動するようになる）のである。——一方、この頃、青森の方では、芸伎の「初代」の身請け問題が生じると、太宰治は、「初代」を東京に呼び寄せてしまう。この騒動の顛末は、当時、二十一歳であったが、津島家から「津島修治」（本名）の「分家除籍」という条件で、二人の「結婚」が許されることになる。ところが、その四日後、太宰治は、なぜか銀座のバー、ホリウツドの女給「田部シメ子」と、鎌倉七里ヶ浜の小動崎の豊岩で「カルモチン自殺」を図るといふ展開になつて行くのである。

\*

\*

さて、本文では、自分は、やがて画塾で、或る画学生から、酒と煙草と淫売婦と質屋と左翼思想とを知らされました、妙な取り合せでしたが、しかし、それは事実でした。その画学生は、堀木正雄といつて、東京の下町に生れ、自分より六つ年長者で、私立の美術学校を卒業して、家にアトリエが無いので、この画塾に通い、洋画の勉強をつづけているのだそうです。そして、その堀木に財布を渡して一緒に歩くと、堀木は大いに値切つて、しかも遊び上手というのか、わずかなお金で最大の効果のあるような支払い振りを發揮し、また、高い円タクは敬遠して、電車、バス、ポンポン蒸気など、それぞれ利用し分けて、最短時間で目的地へ着くという手腕をも示し、淫売婦のところから朝帰る途中には、何々という料亭に立ち寄つて朝風呂へはいり、湯豆腐で軽くお酒を飲むのが、安い割に、ぜいたくな気分になれるものだと実地教育をしてくれたり、その他、屋台の牛めし焼きとりの安価にして滋養に富むものたる事を説き、その他、とにかくその勘定に就いては自分に、一つも不安、恐怖を覚えさせた事がありませんでした。——酒、煙草、淫売婦、それは皆、人間恐怖を、たとい一時でも、まぎらす事の出来るずいぶんよい手段である事が、やがて自分にもわかつて来ました。それらの手段を求めるためには、自分の持ち物全部を売却しても悔いがない気持さえ、抱くようになりました。つまり、酒、煙草、女性遍歴は、太宰治の最大の「悩み」（「人間恐怖」）を、たとい一時でも、まぎらす事の出来るずいぶんよい手段であつたということであり、だからこそ、酒に溺れ、煙草に溺れ、女性に溺れていくという、それら無しでは生きられないほどの、「依存症状態」になつてしまつたのかも知れない。そして、自分には、淫売婦というものが、人間でも、女性でもない、白痴か狂人のように見え、（だから「人間恐怖」を感じず）、その懐の中で、自分がかえつて全く安心して、ぐっすり眠る事ができたのです。みんな、哀しいくらい、実にみじんも慾というものが無いのでした。そうして、自分に、同類の親和感とでもいったものを覚えるのか、自分は、いつも、その淫売婦たちから、窮屈でない程度の自然の好意を示されました。何の打算も無い好意、押し売りでは無い好意、二度と来ないかも知れぬひとへの好意、自分には、その白痴や狂人の淫売婦たちに、マリアの円光を現実に見た夜もあつたのです。

また、太宰治は、「……僕には父の退廃的な放蕩の血がぬらぬらと流れている」と言っている。もちろん、どこまでがどうかは分からないが、しかし、それは、まさに「遺伝的要素」であり、結果として、数多くの「女性遍歴」を重ねることになるが、そのいわば「呪われた血」に対する「嫌悪感」は、そのまま「父親への嫌悪感」でもあり、太宰治の自分を素直に認めることのできない、いわば「自虐的な言動」のその「源泉」を敢えて迎れば、一つは、「幼少期」に芽生えた両親への「不信」であり、そして、もう一つは、あちこち

に妾めかけのいる「父親への嫌悪感」でもあったのかも知れない。つまり、一つは、「人間が信じられないという想い」であり、そして、もう一つは、「呪われた血が流れているという想い」であり、それらの「想い」が、一つは、「道化を演じる太宰治」を生み出し、そして、もう一つは、「女性遍歴を重ねる太宰治」を生み出しているのである。そして、「道化」というのは、本当の「自分の心」を隠して、なるべく「傷つかず」に他人と関わる一方法であり、一方、「女性遍歴」は、そこに「心の安らぎ」を求めたのかも知れない。(ちなみに、「父親」という存在は、また、「家」という存在とも重なり合うものである。)

\*

\*

さて、太宰治という人は、自分でも、「……何か女に夢を見させる雰囲気、自分のどこかにつきまとっている事は、それは、のろけだの何だのといういい加減な冗談じょうだんでなく、否定できないのであります。ところが、それを堀木ごとき者に指摘せられ、屈辱に似た苦さを感じると共に、淫売婦と遊ぶ事にも、にわかに興が覚めました」とある。そして、今度は、その堀木が、「……共産主義の読書会という秘密の研究会へと連れて行きました」とある。そして、その秘密の「会合」には、いつも欠かさず出席して、皆にお道化のサーヴィスをして来ましたが、しかし、「……自分は、同志では無かったです」とある。ただ、「……自分は、その人たちが、好きで、気に入っていたからなのです。しかし、それは必ずしも、マルクスに依って結ばれた親愛感では無かったです。——非合法、自分には、それが密かに楽しかったのです。むしろ、居心地がよかったです。例の地下運動のグループの雰囲気、へんに安心で、居心地がよく、つまり、その運動の本来の目的よりも、その運動の肌が、自分に合った感じなのでした」とある。

例えば、日蔭者ひかげものという言葉がありますが、それは、人間社会において、みじめな、敗者、悪徳者を指差して言う言葉のようですが、自分は、自分を生まれた時からの日蔭者ひかげもののような気がしていて、世間から、あれは日蔭者ひかげものだと指差されている程の人と逢うと、自分は、必ず、優しい心になり、しかも、その自分の「優しい心」は、自身でもうっとりするくらい優しい心でした。(それは「自分も同じ身」という共感・共鳴の心であり)、——また、犯人意識という言葉もありますが、自分は、この人間の世の中において、一生その意識に苦しめられながらも、しかし、それは自分の糟糠そうこうの妻の如き好伴侶ほんりよで、そいつと二人きりで侘わびしく遊びたむむれているというのも、自分の生きている姿勢の一つだったかも知れませんが。(例えば「酒、煙草タバコ、女遊び、薬物乱用、自殺未遂、その他」等であり、また、俗に、脛すねに傷持つ身という言葉もあるようですが、その傷は、自分の赤ん坊の時分から、自然に片方の脛すねにあらわれて、長ずるに及んで治癒するどころか、いよいよ深くなるばかりで、骨にまで達し、夜々の痛苦つうくは千変万化の地獄とは言いながら、しかし、その傷は、次第に自分の血肉よりも親しくなり、その傷の痛みは、すなわち傷の生きている感情、または愛情あいじやうの囁ささやきのようにさえ思われる、そんな男にとつて、例の地下運動のグループの雰囲気、へんに安心で、居心地がよく、つまり、その運動の本来の目的よりも、その運動の肌が、自分に合った感じであり、また、事実、自分は、いろいろな用事をいちども断ったこととは無く、平気でなんでも引受け、彼等の称する仕事を、とにかく正確にやっつけていました。自分のその当時の気持としては、党員になって捕えられ、たとい終身、刑務所で暮すようになったとしても、平気だったのです。世の中の人間の「実生活」というものを恐怖しながら、毎夜の不眠ふみんの地獄で呻うめいているよりは、いっそ牢屋ろうやのほうが、楽かも知れ

ないとさえ考えていました、とある。

とは言え、太宰治という人は、本気の「革命家」や「マルクス主義者」などではなく、ただ「非合法」という雰囲気、彼にとつては、何よりも居心地がよかつたということになるのだろう。それが、まさに太宰治の「内的事実」であつたが、しかし、一方、太宰治の「外的事実」というものは、実は、「……中央地区と言つたか、何地区と言つたか、とにかく本郷、小石川、下谷、神田、あの辺の学校全部の、マルクス学生の行動隊長というものに、自分はなつていたのでした」という展開になつていくのである。

そして、その「行動隊長」には、「……次々と息をつくひまも無いくらい、用事の依頼がまいります。自分の病弱のからだでは、とても勤まりそうも無くなりました。もともと、非合法の興味だけから、そのグループの手伝いをしていたのですし、こんなに、そこそ冗談から駒が出たように、いやにいそがしくなつて来ると、自分は、ひそかにPのひとたちに、それはお門ちがいでしよう、あなたたちの直系のものたちにやらせたらどうですか、というようにまいましい感じを抱くの禁ずる事が出来ず、逃げました。逃げて、さすがに、いい気持はせず、死ぬ事にしました」とある。

\* \* \*

さて、その頃、「……自分に特別の好意を寄せている女が、三人いました」とある。一人は、自分の下宿していた仙遊館の娘でした。それは、特に用もないのに彼の部屋へやつて来るといふパターンであり、例えば、いつものようにやつてきた時に、「……すまないけれどね、電車通りの薬屋に行つて、カルモチンを買つて来てくれないか？ あんまり疲れすぎて、顔がほてつて、かえつて眠れないんだ。すまないね。お金は、……」「……いいわよ。お金なんか」と言つて、喜んで立ちます。「……用を言いつけるといふのは、決して女をしょげさせる事ではなく、かえつて女は、男に用事をたのまれると喜ぶものだという事も、自分はちゃんと知つていたのでした」とある。しかし、それは、彼に好意を寄せている女性だからであり、一方、いやな嫌いな男性の使いなどを喜んずる女性は、ふつう一般には、そうはいないのである。それよりも、ここで最も大事なことは、むしろ「カルモチン」といふ、いわば「睡眠薬」(鎮静剤)であるが、太宰治の「最大の不幸」の一つは、言うまでもなく、いわゆる「藥物依存症」になつていくということである。

さて、二人目は、女子高等師範の文科生の所謂「同志」でした。このひととは、れいの運動の同志で、いやでも毎日、顔を合せなければならなかつたのです。打合せがすんでからも、その女は、いつまでも自分について歩いて、やたらに自分に、ものを買つてくれるのでした。そして、「……私を本当の姉だと思つていてくれていいわ」と言うのでした。ある時、街の暗いところで、そのひとに帰つてもらいたいばかりに、キスをしてやりましたら、あさましく狂乱の如く興奮し、自動車を呼んで、そのひとたちの運動のために秘密に借りてあるらしいビルの事務所みたいな狭い洋室につれて行き、朝まで大騒ぎという事になり、とんでもない姉だ、と自分はひそかに苦笑しましたとある。

そして、もう一人は、同じ頃、自分は、銀座の或る大カフェの女給から、思いがけぬ恩を受け、たつたいちど逢つただけなのに、それでも、その恩にこだわり、やはり身動き出来ないほどの、心配やら、空おそろしさを感じていたのでした。——それは、次のような内容である。つまり、……銀座のその大カフェに、一人で入り、笑いながら相手の女給に、「……十円しか無いんだからね、そのつもりで」と言つと、その女給は、「……心配要り

ません」と応え、そこで酒を飲み、その後、銀座裏の、ある屋台のお鮎すしやで、その女給（ツネ子）を待ち、そして、彼女の部屋のある、本所の大工さんの二階に泊まることになるが、その女は、「……身のまわりに冷たい木枯しが吹いて、落葉だけが舞い狂い、完全に孤立している感じの女でした」とある。そして、一緒にやすみながらそのひとは、自分より二つ年上で、故郷は広島、主人がいて、広島で床屋をしていたが、昨年の春、一緒に東京へ家出して逃げて来たが、主人は、まともな仕事をせず、そのうち詐欺罪に問われ、刑務所において、毎日、刑務所に差し入れでかよっていたが、あすから、やめると言うのであった。その女とは、その一夜だけで、ひとつきも、その夜の恩人とは逢いませんでしたとある。

ところが、一ヶ月後、堀木と一緒にその大カフェに行き、堀木は、「……自分の傍に座った女給に、きつとキスして見せる」と言い、彼女（ツネ子）が席に着くと、「やめた!」、  
「……さすがのおれも、こんな貧乏くさい女には……」と言って、やめてしまう。この「言葉」は、女性にとっては、自分には女としての魅力がないという意味合いとなり、非常に応えるのである。一方、太宰も、こいつはへんに疲れて貧乏くさいだけの女だな、と思うと同時に、金の無いもの同士の親和感が、胸に込み上げて来て、ツネ子がいとしく、生れてこの時はじめて、われから積極的に、微弱ながら恋の心の動くのを自覚しましたとある。その夜、彼女の部屋に泊まるが、彼女は、「……金の切れ目が縁の切れめ、なんておっしゃって、冗談かと思うていたら、本気か。来てくれないのなもの。うちが、かせいであげても、だめか」と聞くと、「だめ」と答える。この「言葉」は、彼女にとっての「最後の望み」が完全に断られたという「衝撃」（まさに「最後の一滴」）であり、その結果、夜明けがた、女の口から「死」という言葉がはじめて出て、「……女も人間としての営みに疲れ切っていたようでしたし、また、自分も、世の中への恐怖、わずらわしき、金、れいの運動、女、学業、考えると、とてもこの上こらえて生きて行けそうもなく、そのひとの提案に気軽に同意しました」とあるが、その時にはまだ、実感としての「死のう」という覚悟は、出来ていなかったのです、どこかに「遊び」がひそんでいましたとある。

さて、その日の午前は、浅草の六区をさまよい、喫茶店に入り、牛乳を飲むが、「……あなた、払うて置いて」と言われ、袂たもとからがま口を出し、ひらくと、銅銭が三枚、（それは、牛乳代さえ払えない状態）、しかも、仙遊館せんぎゅうかんの自分の部屋には、制服とふとんがあるだけ、あとは自分がいま着て歩いている緋かすりの着物と、マント、これが自分の現実なのだ、生きていけない、とはつきり思い知りましたとある。さらに、「……あら、たったそれだけ?」と言われ、これがまた、じんと骨身にこたえるほど痛かったです。はじめて自分が、恋したひとの声だけに、痛かったです。銅銭三枚は、どだにお金ではありません。それは、自分が未だかつて味わった事の無い奇妙な屈辱でした。とても生きておられない屈辱でした。所詮しよせんその頃の自分は、まだお金持ちの坊ちゃんという種族から脱し切っていないかったのでしょうか。その時、自分は、みずからすすんでも死のうと、実感として決意したので、とある。

もちろん、これは、あくまでも「作品」であり、それゆえ、事実とはかなり違ふところもあるかと思うが、それはそれとして、一般に、多くの場合、他人から見れば、「……何でそれくらいのこと死ぬのかと腹を立てる人も多いでしょう」が、しかし、それは、そうではなく、むしろ、「……コップの中の水は、すでに縁一杯まで満ちあふれている」のである。あとは、まさに「最後の一滴」（或いは「最後の一押し」）さえ加われば、その

コップの中の水は、あふれ落ちて、その人は、自殺を遂行してしまうのである。しかも、その「最後の一滴」(或いは「最後の一押し」というのは、他人から見れば、「……なんでもそれくらいのことという程度のことであつても、その最後の一滴、その最後の一押しで、その人は、自殺を遂行してしまうことが多い」ということである。

例えば、われわれは、ふつう一般に、「……ひとは、なぜ『自殺』などするのだろうか？」と、不思議に思うことがあるが、それは、「自殺をする人」にとつても、たつた一つだけの理由だけでは、なかなか死ねないのであり、いろいろな理由があつて、それを一言で言えば、まさに「八方ふさがり」というような感じであり、それに加えて、もう一つは、「……この先、希望が持てない」ということでもある。なぜなら、何らかの「希望」が持てるなら、何も「自殺」などする必要はどこにもないからである。(少なくとも、この作品の女性の場合には、まさに「八方ふさがりの心境」だったということになるのだろう)。さらに、医学的には、その人が「自殺を図る」頃というのは、その人の「脳」自体が、すでに「う、つ、の、脳」に代わつていて、本人にもどうにもならない、いわば「う、つ、地獄」の「精神状態」に深く陥っている場合が多いのである。……

その夜、自分たちは、鎌倉の海に飛び込ました。女は、この帯はお店のお友達から借りている帯やから、と言つて、帯をほどき、畳んで岩の上に置き、自分もマントを脱ぎ、同じ所に置いて、一緒に入水しました。女のひとは、死にました。そうして、自分だけ助かりました。自分が高等学校の生徒でもあり、新聞にもかなり大きな問題として取り上げられたようでした。自分は海辺の病院に収容せられ、故郷から親戚の者がひとり駆けつけ、さまざまの始末をしてくれて、一家中が激怒しているから、これっきり生家とは義絶になるかも知れぬと、自分に申し渡して帰りました。けれども自分は、そんな事より、死んだツネ子が恋いしく、めそめそ泣いてばかりいました。本当に、いままでのひとの中で、あの貧乏くさいツネ子だけを、好きだったのですから。やがて自分が自殺幇助罪という罪名で病院から警察に連れて行かれましたが、警察では、自分を病人あつかいにしてくれて、特に保護室に収容しました。そして、自分は起訴猶予になりました。けれども一向にうれしくなく、世にもみじめな気持で、検事局の控室のベンチに腰かけ、引取り人のヒラメが来るのを待っていましたとある。(ちなみに、「一緒に入水」とあるが、実際は岩のところで「カルモチン自殺」を図つたということである。……)

\*

\*

六、第三の手記

## 六、第三の手記

さて、今度は「第三の手記」であるが、それは、まさに「心中未遂事件」以降の「内的事実」の記述であるが、その本文の冒頭は、次のような内容から始まる。つまり、「……竹一の予言の、一つは当り、一つは、はずれました。惚れられるという、名譽で無い予言のほうは、あたりましたが、きつと偉い絵描きになるという、祝福の予言は、はずれました。自分は、わずかに、粗悪な雑誌の、無名の下手な漫画家になる事が出来ただけでした」とある。太宰治は、なぜこの「予言」に執拗にこだわっているのだろうか？ それは、次のようなことである。つまり、竹一という人間は、もちろん、他人であるが、その他人である竹一という人間は、唯一、太宰治の「道化」を見抜いた人間である。それは、つまり、太宰治という人間の「本質を見抜いた唯一の人間」なのである。そして、惚れられるという「予言」は、当り、一方、きつと「偉い絵描き」（本来なら「小説家」になるという「予言」の方は、——例えば、芥川賞の受賞はならず、また、偉い小説家という「高い評価」も、結局は、得られなかったという、そういう「意味合い」になるのかも知れない。

そして、「……鎌倉の事件のために、高等学校からは追放せられ、自分は、ヒラメの家の二階の、三畳の部屋で寝起きして、故郷からは月々、極めて少額の金が、それも直接に自分宛ではなく、ヒラメのところへひそかに送られて来ている様子でしたが、それっきり、あとは故郷とのつながりを全然、断ち切られてしまい、そうして、ヒラメはいつも不機嫌、自分があいそ笑いしても、笑わず、人間というのはこんなにも簡単に、それこそ手のひらをかえすが如くに変化できるものかと、あさましく、いや、むしろ滑稽に思われるくらい、ひどい変り様で、『……出ちゃいけませんよ。とにかく、出ないで下さいよ』、そればかり自分に言っているのです。ヒラメは、自分に自殺のおそれありと、にらんでいるらしく、つまり、女の後を追ってまた海へ飛び込んだりする危険があると見てとっているらしく、自分の外出を固く禁じているのです。けれども、酒も飲めないし、煙草も吸えないし、ただ、朝から晩まで二階の三畳のこたつにもぐって、古雑誌なんか読んで阿呆同然のくらしをしている自分には、自殺の気力さえ失われていました」とある。

### 一、実際の推移

さて、この『人間失格』という作品は、もちろん、いわゆる「フィクション」であり、それゆえ、実際の「内容」とは違って来るのは、あたり前のことであるが、実際は、次のような展開になるかと思う。まず、鎌倉での「自殺未遂」直前から見てみると、「初代」問題で、昭和五年（一九三〇年）、太宰、二十一歳であったが、十一月十九日、津島修治は、津島家から分家除籍され、そして、二十四日には、めでたく小山家と結納を交わしている。なのに、四日後の夜半、太宰治は、なぜか鎌倉の小動崎で女給の田部シメ子と「カルモチン自殺」を図り、女性は、死に、太宰は、苦悶中に発見される。そして、太宰治は、海辺の病院に收容され、やがて、自殺幫助罪で病院から警察に移されるが、結果は、「起訴猶予」となる。そして、十二月には、碓ヶ関温泉で、小山初代と仮祝言を挙げている。そして、翌、昭和六年（一九三一年）二月に、小山初代が上京し、太宰治は、品川区五反田の借家で同棲を始める。そして、この頃（二十一から二十三歳）までは、まさに「非合

法活動」を活発に行なっていた時期であり、住む家なども、たびたび移転している。そして、昭和七年（一九三二年）七月には、青森警察署から呼び出され、長兄同伴で出頭し、取り調べを受ける。それ以後、非合法活動から離れる。そして、十二月には、再び、太宰治は、青森検事局に自ら出頭をして、いわゆる「非合法活動」から完全に離脱することになる。太宰、二十三歳の時である。（これは「初代の結婚前の男性遍歴を知って何もかもいやになったからである」。翌年、遺書を綴る。「思ひ出」百枚である。自分の幼時から悪を、飾らず書いておきたかった。二十四歳の秋の事である。しかし、その「思ひ出」一遍だけでは、死に切れなかった。どうせここまで書いたのだ。きょう迄の生活の全部を、ぶちまけてみたい。あれもこれも書いて置きたい。二十五歳の年は、大学も行かず、書くことに没頭し、その年の晩秋に、書き上げる。そして、二十数編中、十四篇だけを選び、あとの作品は、書き損じの「原稿」と共に焼き捨てた。それが、『晩年』である。

さて、昭和十年（一九三五年）、太宰、二十六歳の年であるが、三月、大学卒業は絶望となり、また、某新聞社の入社試験にも失敗をして、太宰治は一人、鎌倉山で縊死自殺を図るも、失敗に終わる。四月には、急性盲腸炎で入院し、腹膜炎を併発して重体になる。この時、「パビナール注射」（痛止め）を打ち、それが習慣化する。七月には、第一回芥川賞の候補になるが、次席で終わり、九月には、授業料未納で、東京帝国大学から除籍となる。そして、翌、昭和十一年（一九三六年）、太宰、二十七歳の年であるが、八月に、第三回芥川賞の「落選」を知り、大きな「衝撃」を受ける。十月には、井伏鱒二らの勧めで、武蔵野病院（脳病院）に、一ヶ月間、入院し、十一月には、中毒を「根治」して退院する。ところが、翌、昭和十二年（一九三七年）、三月、入院中の初代の過失を知り、大きな打撃を受ける。そして、初代と谷川温泉付近で「カルモチン心中」を図るも、未遂で、二人は、結局、別居（離別する）ことになる。——太宰治、二十八歳の時である。

\*

\*

次は、昭和十三年（一九三八年）、太宰（二十九歳）であるが、ここから太宰治の『残り十年』の「新しい生活」が始まる。まず、七月に、井伏鱒二を通じて、縁談が持ち込まれ、九月から十一月まで、太宰治は、山梨県富士河口湖の御坂峠の天下茶屋に滞在しながら、九月十八日には、甲府市の高校教師であった石原美知子とお見合いをしている。そして、十一月六日には、婚約披露を行ない、翌、昭和十四年（一九三九年）の一月八日、太宰（三十歳）の初春、井伏鱒二の自宅で、二人は簡素な「結婚式」を挙げている。

つまり、「……私は、三十歳（満二十九歳）の初夏、はじめて本気に、文筆生活を志願した。思えば、晚い志願であった。やがて、『姨捨』という作品が出来た。Hと水上温泉へ死に行つた時の事を、正直に書いた。そして、旅に出た。甲州の山である。甲州には、満一箇年いた。翌年、昭和十四年の正月に、私は、あの先輩のお世話で平凡な見合い結婚をした。いや、平凡では無かった。私は無一文で婚礼の式を挙げたのである。甲府市の町はずれに、二部屋だけの小さい家を借りて、私たちは住んだ。その家の家賃は、一箇月六円五十銭であった。そして、その年の秋、東京市外、三鷹市に移住した。（そこに最後まで住む。）（『東京八景』とある。——そして、生活も精神も安定して来て、この年の二月には、「文体」に『富岳百景』を発表、四月には、「文学界」に『女生徒』を発表している。そして、翌、三十一歳の時、五月には、「新潮」に『走れメロス』を発表している。そして、三十二歳は、一月に、「文学界」に『東京八景』を発表し、六月に、長女（園子）

の誕生。そして、九月には、太田静子らの訪問を受ける。十一月に、胸部疾患の理由で徴用免除となり、そして、昭和十六年（一九四一年）十二月八日には、いよいよ「太平洋戦争」（つまり「真珠湾攻撃」）が勃発するのである。太宰治、三十二歳の時である。

\*

\*

さて、『人間失格』の「第三の手記」は、一体、なぜ「事実とは違う内容」になっているのだろうか？ それは、次のようなことである。——つまり、太宰治は、この『人間失格』という作品のなかでは、芸伎の「小山初代」については、たった一言も書こうとはしていない。むしろ書くことを避けている。それは、一体、なぜなのだろうか？ また、太宰治は、なぜ鎌倉の小動崎で女給の田部シメ子と「カルモチン自殺」を図ったのだろうか？ それらの理由については、『東京八景』を読むと、よくわかる。つまり、「……その年（二十一歳）の秋、女が田舎からやって来た。私が呼んだのである。Hである。Hとは、私が高等学校へ入った年の初秋に知り合い、それから三年間遊んだ。無心の芸伎である。肉体的関係は、その時迄、一度もなかった。故郷から、長兄がその女の事でやって来た。戸塚の下宿の、あの薄暗い部屋で会った。兄は、急激に変化している弟の兇悪な態度に接して、涙を流した。必ず夫婦にしていた条件で、私は兄に女を手渡す事にした。手放すその前夜、私は、はじめて女を抱いた。兄は、女を連れて、ひとまず田舎へ帰った。

ただいま無事に家に着きました、という事務的な堅い口調の手紙が一通来たきりで、その後は、女から、何の便りもなかった。女は、ひどく安心してしまっているらしかった。私には、それが不平であった。こちらが、すべての肉親を仰天させ、母にも地獄の苦しみを嘗めさせて迄、戦っているのに、おまえ一人、無智な自信でぐったりしているのは、みっとも無い事である、と思った。毎日でも私に手紙を寄こすべきである、と思った。私を、もっともつと好いてくれてもいい、と思った。けれども女は、手紙を書きたがらないひとであった。私は、絶望した。朝早くから、夜おそく迄、れいの仕事の手助けに奔走した。人から頼まれて、拒否した事は無かった。自分の其の方面に於ける能力の限界が、少しずつ見えて来た。私は、二重に絶望した。銀座裏のバアの女が、私を好いた。好かれる時期が、誰にだつて一度ある。不潔な時期だ。私は、この女を誘って一緒に鎌倉の海へはいった。破れた時は、死ぬ時だと思っていたのである。れいの反神的な仕事にも破れかけた。肉体的にさえ、とても不可能なほどの仕事を、私は卑怯と言われたくないばかりに、引受けてしまっていた。Hは、自分ひとりの幸福の事しか考えていない。おまえだけが、女じや無いんだ。おまえは、私の苦しみを知ってくれなかったから、こういう報いを受けるのだ。ざまを見る。私には、すべての肉親と離れてしまった事が一ばん、つらかった。Hとの事で、母にも、兄にも、叔母にも呆れられてしまったという自覚が、私の投身の最も直接的な一因であった。女は死んで、私は生きた。死んだひとの事に就いては、以前に何度も書いた。私の生涯の、黒点である。私は、留置所に入れられた。取調べの末、起訴猶予になった。昭和五年（二十一歳）の歳末の事である。

\*

\*

一方、初代は、太宰と結婚する以前から「男性関係」はあり、しかも、二十七歳の入院中にも、或る洋画家と姦通を犯している。太宰治は、彼女への不信に悩み苦しむのである。そして、その「三角関係」の中で、「……洋画家は、だんだん逃腰になった。私は、苦しんでいる中、Hを不憫に思った。Hは、もう、死ぬるつもりでいるらしかった。どうにも、

やり切れなくなった時に、私も死ぬ事を考える。二人で一緒に死のう。神さまだって、ゆるしてくれる。私たちは、仲の良い兄妹のように、旅に出た。水上温泉。その夜、二人は山で自殺を行った。Hを死なせては、ならぬと思つた。私は、その事に努力した。Hは、生きた。私も失敗した。薬品を用いたのである。私たちは、とうとう別れた。Hをこの上ひきとめる勇気が私に無かつた。捨てたと言われてもよい。人道主義とやらの虚勢で、我慢を装つてみても、その後の日々の醜悪な地獄が明確に見えているような気がした」。

また、『嫉捨』という作品の中でも、目が覚めたあと、彼女を捜し、崖の下に、黒い物体を認めた。(中略)、その息のある彼女のからだを少しづつ少しづつ林の奥へ引きずりあげた。何時間、そのような、虫の努力をつづけていたろう。「……ああ、もういやだ。この女は、おれには重すぎる。いいひとだが、俺の手にあまる。おれは、無力の人間だ。おれは一生、このひとのために、こんな苦勞をしなければ、ならぬのか。いやだ、もういやだ。わかれよう。おれは、おれのちからで、尽せるところまで尽くした。そのとき、はつきり決心がついた。この女は、だめだ。おれにだけ、無制限にたよっている。ひとから、なんと言われたついでいい。おれは、この女とわかれる。……」とある。

これらのことを考慮に入れて考えてみると、「妻」(初代)とは、いわゆる心の底からの仲睦まじい「相思相愛の夫婦」というよりは、どこか「心のすれ違いの漂うような夫婦」の感じであり、太宰治という人にとって、初代という女性は、最後、別れる頃には、どこか「……わがままで、自分(太宰)に頼り切つて、しかも、自分の幸せの事だけを考えている」ような、そういう女性に見えていたのかも知れない。もちろん、太宰治自身、まさに「……酒、煙草、女性、薬物、その他」などに深く溺れ、家にある金目の物は何でも質屋に持つて行くという、そういう「自堕落な生活」をしていた状況であり、他人のことなどとても言えた義理ではないのである。もちろん、それは、その通りであるが、この『人間失格』という作品では、その「初代」については、直接は書くことを避けて、事実とは違う、いわば「もう一つの内容」(ストーリー)が考え出されていくのである。

## 二、堀木と自分

それでは、その「本文」に戻りたいと思うが、それは、次のようなものである。「……三月末の或る夕方、ヒラメは思わぬもうけ口にもありついたので、または何か他に策略でもあったのか、自分を階下の珍らしくお銚子など附いている食卓に招いて」は、「どうするつもりなんです、いったい、これから」と聞かれ、自分はそれには応えず、いろいろ話をしていくなかで、「働いたほうが、いいんですか?」と聞くと、「いや、あなたの気持は、いったいどうなんです」、「……何か、将来の希望、とでもいったものが、あるんですか?」と聞くので、思い切つて、「画家です」と、言うのと、「へええ?」と、頸をちぢめて笑つたヒラメの顔の、いかにもずるそうな影を忘れる事が出来ません。そんな事では話にも何もならぬ、ちつとも気持がしっかりしていない、考えなさい、今晚一晩まじめに考えて見なさい、と言われ、自分は追われるように二階に上つて、寝ても、別に何の考えも浮びませんでした。そうして、あけがたになり、ヒラメの家から逃げました。

夕方、間違いなく帰ります。左記の友人の許へ、将来の方針に就いて相談に行つて来るのですから、御心配なく、ほんとうに。と、用箋に鉛筆で大きく書き、それから、浅草の

堀木正雄の住所姓名を記して、こつそり、ヒラメの家を出ました。しかし、自分は、所謂「将来の方針」を、堀木ごときに、相談に行こうなどと本気に思つて、ヒラメの家を出たのでは無く、いきなりヒラメにショックを与え、彼を混乱当惑させてしまふのが、おそろしかったばかりに、とても言つたほうが、いくらか正確かも知れません。……

自分はヒラメの家を出て、新宿まで歩き、懐中の本を売り、そうして、やつぱり途方にくれてしまいました。自分は、皆にいいがわいかに、「友情」というものを、いちども実感した事が無く、堀木のような遊び友達とは別として、いっさいの付き合いは、ただ苦痛を覚えるばかりで、その苦痛をもみほぐそうとして懸命にお道化を演じて、かえつて、へとへとなり、わずかに知合っているひとの顔を、それに似た顔をさえ、往来などで見掛けても、ぎよつとして、一瞬、めまいするほどの不快な戦慄に襲われる有様で、人に好かれる事は知つていても、人を愛する能力に於いては欠けているところがあるようでした。そのような自分に、所謂「親友」など出来る筈も無く、そのうえ自分には、「訪問」の能力さえ無かつたのです。他人の家の門は、自分にとつて、あの神曲の地獄の門以上に薄気味わるく、その門の奥には、おそろしい童みたいな生臭い奇獣がうごめいている気配を、誇張でなしに、実感せられていたのです」とある。

つまり、幼少の頃から、「……自分は、人間というものが信じられない、また、人間が怖わくてならない」という、そういう太宰治という人間にとつて、前述のようなことは、あるいはあり得ることもかも知れない。その証拠に、わざわざ「誇張でなしに、実感せられていたのです」と、念まで押している。だとすれば、太宰治が、幼少の頃から、自分は、「……人間が信じられない、また、人間が怖わくてならない」と言っていたことも、それほど大げさなことではなく、大筋においては、そのような「精神状態」だったのかも知れない。——例えば、東京に出てきた当初は、自分は、実は、ひとりでは、電車に乗ると車掌がおそろしく、歌舞伎座へはいりたくても、あの正面玄関の緋の絨毯が敷かれている階段の両側に並んで立っている案内嬢たちがおそろしく、レストランへはいると、自分の背後にひっそり立って、皿のあくのを待っている給仕のボーイがおそろしく、殊にも勘定を払う時、ああ、ぎこちない自分の手つき、自分は買い物をしてお金を手渡し時には、あまりの緊張、あまりの恥ずかしさ、あまりの不安、恐怖に、くらくら目まいして、世界が真暗になり、ほとんど半狂乱の気持になつてしまつて、値切るどころか、お釣りを受け取るのを忘れるばかりでなく、買った品物を持ち帰るのを忘れた事さえ、しばしばあつたほどなのです」と、第二の手記の中にもある。もちろん、どこまでがどうかという疑念は残るが、「……誰とも、付き合いが無い。どこへも、訪ねて行けない」と、本文は続いているのである。そして、「話」(ストーリー)は、やがて、堀木の家へと辿り着く。

そして、「……堀木は、在宅でした。汚い露地の奥の、二階家で、堀木は二階のたつた一部屋の六畳を使い、下では、堀木の老父母と、それから若い職人と三人、下駄の鼻緒を縫つたり叩いたりして製造しているのです。堀木は、その日、彼の都会人としての新しい一面を自分に見せてくれました。それは、俗にいうチャッカリ性でした。田舎者の自分が愕然と眼をみはつたくらい、冷たく、ずるいエゴイズムでした。自分のように、ただ、とめどなく流れるたちの男では無かつたのです」とある。そして、ここからこそ、余りにも有名な「生活者」(堀木正雄)と「芸術家」(太宰治)との決定的な違いという、そういう「論理展開」が生じやすいわけであるが、しかし、それは、いわば「一面」をとらえ

たものであり、決して正しい「論理展開」とは言えないものである。

\* \*  
まず、最初は、われわれ人間の「生活」(生存) というものは、一体、どういう「形」で成り立っているのか？　そういう「根本問題」から考えて見なければ、何一つ物事を正確かつ厳密にとらえることは出来にくい。——すなわち、われわれ人間の「生活」(生存) というものは、大きく分ければ、次の「三つのもの」から成り立っているものである。

まず一つは、いわゆる「仕事」(つまり「社会的活動」) であるが、それは、大人であれば、主に何らかの「産業活動」(第一・第二・第三次産業) や「公務活動」或いは「ボランティア活動」などを行なっている。一方、子供であれば、保育園や保育所或いは幼稚園などをはじめ、小・中・高・短大・大学、その他の主に「学園生活」やその他などを行なっている。むろん、仕事から離れて、年金生活や入院生活、或いは、施設生活や避難生活、さらに、居候、ホームレス、その他、実にいろいろなパターンがあるかと思う。

次は、いわゆる「生活」(主に「家庭」(家族) 生活) であるが、それは、まさに「自分が毎日寝起きをしたり、また、食事をしたりする場所」であり、一人暮らしをはじめ、核家族や直系家族あるいは複合家族、また、何らかの寮生活や施設生活、或いは、同居生活や同棲生活、その他、実にいろいろなパターンがあるかと思う。そして、こここそは、誰にとっても、まさに「生存の場所」そのものである。そして、もう一つは、いわゆる「遊び」(趣味や娯楽やレジャーなど) であるが、それは、言うまでもなく、主に「楽しむ」ことを本来目的とした活動であり、この世にはもう実に多種多彩なものが出そろっているかと思う。——そして、われわれ人間の「生活」(生存) というものは、大別すれば、この「三つのもの」(つまり「仕事」「生活」「遊び」) から成り立っているものである。

\* \*  
さて、最初は、堀木正雄から少し考えてみたいと思うが、彼は、浅草の下町の「……汚い露地の奥の、二階家で、堀木は二階のたった一部屋の六畳を使い、下では、堀木の老父母と、それから若い職人と三人、下駄の鼻緒を縫ったり叩いたりして製造しているのでした」とある。——この「生活状況」は、太宰治にとつて、自分の「実家」での生活状況と比較対照した時に、余りにも違い過ぎる、考えられないほどの「貧しく質素の生活」に見えて来たとしても、何も不思議なことはないだろう。しかも、このような「貧しい家庭環境」で育った人間であれば、恐らく、子供の頃から、無駄遣いなど、したくてもできないかたに違いない。それは、余りにも「厳し過ぎる現実」を毎日毎日見せつけられているからである。これが、まさに堀木正雄という人間の「心の基盤(ベース)」としてあったものであり、だからこそ、「……その堀木に財布を渡して一緒に歩くと、堀木は大いに値切つて、しかも遊び上手というのか、わずかなお金で最大の効果のあるような支払い振りを発揮し、また、高い円タクは敬遠して、電車、バス、ポンポン蒸気など、それぞれ利用し分けて、最短時間で目的地へ着くという手腕をも示し、その他、とにかくその勘定に就いては自分に、一つも不安、恐怖を覚えさせた事がありませんでした」ということになるのである。(これが、作品上の「堀木正雄」という人物「設定」になっているのである。)

一方、太宰治は、県下有数の「大地主」の六男として誕生。それは、まさに「豪邸」(つまり「衣食住によほど恵まれた家庭環境」) に生まれ附いたために、太宰治自身、「……自分には、人間の生活というものが、見当がつかないのです」とある。——例えば、停車

場のブリッジを実用ではなく、外国の遊技場のように複雑にして楽しくしたものだと思ひ込み、また、絵本の地下鉄道も、地下の車に乗る方が風変わりで面白い遊びだからと思ひ込んでいたとある。つまり、それは、世の中の「物事」というのは、基本的には「実用（実利）」的なところから生み出されているということが理解できず、例えば、より楽しいから、より面白いからという、そういう「視点」からしか世の中の「物事」を見ることができなかったという。また、太宰治は、「……子供の頃は、空腹といふ事を知りませんでした。自分には『空腹』といふ感覚はどんなものか、さっぱりわからなかったのです」とある。さらに、「……つまり、わからないのです。隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見当がつかないのです。……」ともある。これは、一体、どういうことなのか？

それは、例えば、お城暮しのお殿様であれば、周りの人たちが本人の代わりになんでもやってくれるので、どうしても他人まかせになりやすく、また、自分でやって学ぶということも、どうしても少なくなってしまうだろう。それゆえ、庶民の生活というものは、よくわからないし、また、庶民の気持ちというものもよくわからないということになってしまふ。敢えて言えば、どこかそれに似たような「心理的狀態」が、太宰治の「頭の中」（或いは「心の中」）にもあったのかも知れない。——つまり、そのような「心理的狀態」が、まさに太宰治という人間の「心の基盤（ベース）」としてあったということである。そして、「……堀木は、その日、彼の都会人としての新しい一面を自分に見せてくれました。それは、俗にいうチャッカリ性でした。田舎者の自分が愕然と眼をみはったくらい、冷たく、ずるいエゴイズムでした。自分のように、ただ、とめどなく流れるたちの男では無かったのです」とある。しかし、それは、いわゆる「生活者」（堀木正雄）と「芸術家」（太宰治）との、まさに「決定的な違い」というよりは、むしろ「堀木正雄の生い立ち」と「太宰治の生い立ち」との、まさに「決定的な違い」から生じて来るものであり、少なくとも「作品」（フィクション）上の解釈は、そうなるのである。

例えば、「……自分は話をしながら、自分の敷いている座布団の綴糸（とじいと）というか、あの房のような四隅の糸の一つを無意識に指先でもてあそび、ぐいと引っぱったりなどしていたのです」とある。これは、太宰治の「神経質な一面」がよく表れているとともに、それに對して、「……堀木は、堀木の家の品物なら、座布団の糸一本でも惜しいらしく、恥じる色も無く、それこそ、眼に角を立てて、自分をとがめるのでした」とある。この部分も、やはり「貧しい家庭」で育った人間と「裕福な家庭」で育った人間との、まさに「決定的な違い」なのである。さらに、「……堀木の老母が、おしるこを二つお盆に載せて持って来る」と、堀木は、しんからの孝行息子のように、老母に向って恐縮し、言葉づかいも不自然なくらい丁寧な、「……すみません、おしるこですか。豪気だなあ。こんな心配は、要らなかつたんですよ。でも、せつかくの御自慢のおしるこを、もったいない。いただきませ。お前も一つ、どうだい。おふくろが、わざわざ作ってくれたんだ。ああ、こいつあ、うめえや。豪気だなあ」と言うのであった。これは、「……母親（老母）の苦勞を知り尽くしている、また、生活のきびしさを知り尽くしている堀木にとって、息子の友だちがわざわざ訪ねてきたということ、ただのお茶だけではなく、仕事の手を休めてまでも、わざわざ自慢のおしるこを作って持って来てくれた『心遣い』に對して、心の底から恐縮（感謝）している」のである。ところが、（裕福育ちの）太宰治には、そういうことがなかなかわかりにくいのである。実感として理解しにくいのである。

だからこそ、次のような結論を出すのである。つまり、「……自分もそれを啜りましたがお湯のおいがして、そうして、お餅をたべたら、それはお餅ではなく、自分にはわからないものでした。決して、その貧しさを軽蔑したのではありません。自分は、その時それを、不味いとは思いませんでしたし、また、老母の心づくしも身にしてみました。自分には、貧しさへの恐怖感があっても、軽蔑感は無いつもりでいます」とある。しかし、それは、いわば裕福育ちの「頭の中」（或いは「心の中」）だけの理解、裕福な人間の「視線」から過ぎず、すべては他人事として感じているだけであり、うそ偽りなく、ほんとうに「骨身に染みて」、まるで、自分のことのように、ほんとうにそうだなあという実感として感じられるということとは、根本的に違うものであり、（裕福育ちの）太宰治にとって、そのような極めて貧しい家庭の「親子関係」の微妙な心情などは、もともとわかりようがないのである。そして、「……あのおしるごと、それから、そのおしるごを喜ぶ堀木に依って、自分は、都会人のつましい本性、また、内と外をちゃんと区別して、いとなんでいる東京の人の家庭の実体を見せつけられ、内も外も変りなく、ただのべつ幕無しに人間の生活から逃げ廻ってばかりいる薄馬鹿の自分ひとりだけ完全に取り残され、堀木にさえ見捨てられたような気配に、狼狽し、おしるごのはげた塗箸をあつかいながら、たまらなく侘びしい思いをしたという事を、記して置きたいだけなのです」とある。

しかし、それも、いわゆる（裕福育ちの）「人間の視点」から見た「一つの感慨」（感想）に過ぎず、いわゆる「内と外」とを使い分けるのは、何も都会人、田舎者、その他、そのようなこととは全く関係なく、誰もが、多かれ少なかれ、「内と外」とを立派に使いつけているのである。そして、誰もが自分を少しでもよく見せようと「外を飾る」ものなのである。そういうことに、都会人も、田舎者もないのであり、敢えて言えば、「……それが、まさに人間というものであり」、太宰治も、決して例外ではないのである。

それでは、太宰治は、なぜ、「……堀木は、その日、彼の都会人としての新しい一面を自分に見せてくれました。それは、俗にいうチャッカリ性でした。田舎者の自分が愕然と眼をみはったくらい、冷たく、ずるいエゴイズムでした」と、敢えて描写したのであるか？ それは、確かに、「……都会人にはそういう冷たく、ずるいエゴイズムの一面があることは、間違いない」が、しかし、これは、実は、いわば「井伏鱒二」への批判の一つでもあり、最晩年には、特に「井伏鱒二」に対しては、極めて批判的になっていたのである。その「絶対的証拠」となるものが、まさに最晩年の「執筆メモ」であるが、その「内容」については、後述として、ここでは「話」（ストーリー）を前に進めていきたいと思う。

### 三、シヅ子との出逢い

さて、堀木は立って、上着を着ながら、「……わるいけど、おれは、きょうは用事があるんでね」というところに、女の訪問者があり、その女の人というのは、雑誌社の人らしく、何か頼んでおいたものを受け取りに来た様子で、そこへヒラメからの電報が来て、家出がバレて、すぐに帰れという展開から、彼女の高円寺のアパートに住むようになり、初めて、男めかけみたいな生活をしましたとある。——その女の人は、シヅ子といい、甲州の生まれで二十八歳で、五つになる女の子がいて、三年前に夫とは死別しているという。

そして、そのシヅ子が新宿の雑誌社に勤めに出たあとは、自分と五つの女の子（名前はシゲ子）と二人、おとなしくお留守番という事になりましたとある。そして、一週間ぐらい過ぎた頃、「……自分でかせいで、そのお金で、お酒、いや、煙草を買いたい。絵だつて僕は、堀木なんかより、ずっと上手なつもりなんだ」、「……少なくとも、漫画なら、堀木より、うまいつもりだ」と言うのと、それなら、「……私の社の編輯長に、たのんでみてあげてもいいわ」という展開になっていく。——そして、シヅ子の取り計らいで、ヒラメ、堀木、それにシヅ子、三人の会談が成立して、自分は、故郷から全く絶縁せられ、シヅ子と「天下晴れて」同棲という事になり、また、シヅ子の奔走のおかげで自分の漫画も案外お金になって、自分はそのお金で、お酒も、煙草も買いましたが、自分の心細さ、うつとうしさは、いよいよつのるばかりなのでしたとある。（……ここで面白いと思うことは、太宰治という人は、自分で「問題の解決」をしたことがなく、すべては他人まかせであり、結局は、周りの人たちが問題の解決をしているということである。）

そして、そういう時の自分にとつて、幽かな救いは、シゲ子でした。シゲ子は、その頃になって自分の事を、何もこだわらずに「お父ちゃん」と呼んでいました。そして、ある時、シゲ子が、「……お父ちゃん。お祈りをする、と、神様が、何でも下さるって、ほんとう？」と聞くので、「……シゲちゃんは、いったい、神様に何をおねだりしたいの？」と何気なく訊いて見ると「……シゲ子はね、シゲ子の本当のお父ちゃんがほしいの」と言うのでした。……ぎよつとして、くらくら目まいがしました。敵。自分がシゲ子の敵なのか、シゲ子が自分の敵なのか、とにかく、ここにも自分をおびやかすおそろしい大人がいたのだ、他人、不可解な他人、秘密だらけの他人、シゲ子の顔が、にわかにならぬように見えて来ました。「……シゲ子だけは、と、思っていたのに、やはり、この者も、あの『不意に蛇を叩き殺す牛のしっぽ』を持っていました。自分は、それ以来、シゲ子にさえおどおどしなければならなくなりました」とある。

これは、非常に面白い「場面」であり、つまり、太宰治は、基本的には「……人間は信じられない、また、人間とは恐ろしいものだ」と思っていたが、しかし、「……このシゲ子だけは、そんなことはないだろうと何の疑いもなく、そう思っていた」が、しかし、「……こんな幼い五歳の幼児ですら、本音と建前、内と外、それを立派に使い分けていることに、心の底から驚愕している」のである。それが、すなわち、「……ぎよつとして、くらくら目まいがしました」という言葉になるのである。つまり、このシゲ子だけは信じられると思っていたのに、それが脆くも打ち砕かれてしまったということである。

つまり、シゲ子が自分のことを「お父ちゃん」と親しく呼んでくれているのは、当然のことながら、心の底からそう思っていて、まさにそのように呼んでくれているのだらうと信じ込んでいたのである。ところが、シゲ子が自分のことを「お父ちゃん」と親しく呼んでくれているのは、実は、この幼い五歳の幼児の立派な「建前」に過ぎなかつたのであり、そして、シゲ子の「本心」というのは、まさに「……シゲ子はね、シゲ子の本当のお父ちゃんにほほしいの」というものだったのである。それを聞いて、（若しかしたら同棲中のシヅ子と再婚するかも知れない自分は）、……ぎよつとして、くらくら目まいがしました。敵。自分がシゲ子の敵なのか、シゲ子が自分の敵なのか、とにかく、ここにも自分をおびやかすおそろしい大人がいたのだ、他人、不可解な他人、秘密だらけの他人、シゲ子の顔が、にわかにならぬように見えて来ました。「……シゲ子だけは、と、思っていたのに、やは

り、この者も、あの『不意に虻を叩き殺す牛のしっぽ』を持っていたのです。自分は、それ以来、シゲ子にさえおどおどしなければならなくなりました」となるのである。——つまり、ふだんは、その「本性」を隠しているようにすけれども、何かの機会に、例えば、牛が草原でおっとりした形で寝ていて、突如、尻尾でビシヤと腹の虻を打ち殺すみたいに、不意に人間のおそろしい正体を、怒りに依って暴露する様子を見て、自分はいつも髪（の毛）の逆立つほどの戦慄を覚えるのです、ということである。

\*

\*

やがて、「色魔！ いるかい？」と、再び、堀木が訪ねるようになっていた。そして、「……世渡りの才能だけでは、いつかは、ボロが出るからな」と言う。それに対して、大庭葉蔵（つまり「太宰治」）は、「世渡りの才能。……自分には、ほんとうに苦笑の外はありません」でした。自分に、世渡りの才能！ しかし、自分のように人間をおそれ、避け、ごまかしているのは、れいの俗諺の「さわらぬ神にたたりなし」というのと、同じことになるのでしょうか。「……ああ、人間は、お互い何も相手をわからない、まるつきり間違っ見ていながら、無二の親友のつもりでいて、一生、それに気附かず、相手が死ぬば、泣いて弔詞なんかを読んでいるのではないのでしょうか」とある。これは、まさにわれわれ人間の「外的事実」と「内的事実」との違いということであり、われわれ人間というのは、とかく、外から見た感じから、あの人はああいう人、この人はこういう人と、勝手に決めつけて見ているような傾向があるが、しかし、実際の「その人」が、一体、どのような人であるかなどは、本人が自分のことを正直に告白しない限りは、何一つ分かりようのないものであり、それは、この『人間失格』という作品の、まさに外から見た「太宰治」と、内から見た「太宰治」との違いを見るだけで、もう十分ではないだろうか。

さらに、堀木は、「……しかし、お前の、女道楽もこのへんでよすんだね。これ以上は、世間が、ゆるさないからな」と言う。それを聞いて、「……世間とは、いったい、何のことでしょう。人間の複数でしょうか。どこに、その世間というものの実体があるのでしょうか。けれども、何しろ、強く、きびしく、こわいもの、とばかり思ってこれまで生きて来たのですが、しかし、堀木にそう言われて、ふと、『世間というのは、君じゃないか』という言葉が、舌の先まで出かかって、ひっこめてしまいました」とある。——例えば、「それは世間が、ゆるさない」、「世間じゃない。あなたが、ゆるさないのでしょ？」、「そんな事をするよ、世間からひどいめに逢うぞ」、「世間じゃない。あなたでしよう？」、「いまに世間から葬られる」、「世間じゃない。葬むるのは、あなたでしよう？」と考えるようになる。そして、その時以来、自分は、「世間とは個人じゃないか」という、思想めいたものを持つようになったとある。そして、この「……世間じゃないか。あなたでしよう？」とある、その「あなた」とは、例えば、「井伏鱒二」、「志賀直哉」、その他の人を暗に示しているのである。そして、太宰治の「遺書」の中にある、有名な「井伏さんは悪人です」という「言葉の謎」を解く「鍵」なども、意外とこのようなところにもあるのである。

\*

\*

それでは、その「世間」とは、具体的には一体どういふものかと問えば、それは、言葉を換えれば、それは、まさに「社会」のことであり、そして、その「社会」というのは、次のような幾つかに分類できるかと思う。——一つは、「家族社会」、一つは、「近隣社会」、一つは、「所属社会」、一つは、「地域社会1」（市区町村社会）、一つは、「地域社会2」（都

道府県社会)、一つは、「メディア社会」、そして、もう一つは、「国家社会」(「国際社会」ということになる。――まず、「家族社会」というのは、基本的には、「祖父母、両親、兄弟(姉妹)、孫、その他(親戚)」などからなり、「近隣社会」というのは、いわば「隣り近所」周辺のことであり、「所属社会」というのは、一般に、「学校、会社、クラブ、サークル、塾・けいこ事、趣味仲間、その他」などである。また、「地域社会」というのは、基本的には「市区町村」社会のことであるが、「都道府県」社会へと拡大できる。「メディア社会」というのは、従来の「新聞、雑誌、テレビ、その他」と、最新の「インターネット社会」からなり、そして、「国家社会」(「国際社会」)というものは、日本なら、日本社会、そして、「国際社会」というのは、世界中に「二百近い国家」があるということである。そして、例えば、「世間」が許さないというのは、具体的には、それぞれの「社会」の人たちから何らかの「批判や非難、その他」などを受けるということである。

\*

\*

さて、主人公(大庭葉藏)は、シヅ子の「出版社」よりも、もつと下品な謂わば「三流出版社」からの注文ばかりに応じて、実に実に陰鬱な気持で、いまはただ、酒代がほしいばかりに画いて、そうして、シヅ子が社から帰るとそれと交代にふいと外へ出ていく。自分の飲酒は、次第に量がふえて、高円寺駅付近だけでなく、新宿、銀座のほうにまで出かけて飲み、外泊する事さえあり、バアで無頼漢の振りをしたり、片端からキスしたり、つまり、また、あの情死以前の、いや、あの頃よりさらに荒んで野卑な酒飲みになり、そして、一年以上経って、葉桜の頃、自分は、またもシヅ子の帯やら襦袢やらをこっそり持ち出して質屋に行き、お金を作って銀座で飲み、二晩つづけて外泊して、三日目の晩、さすがに具合悪い思いで、無意識に足音をしのばせてアパートのシヅ子の部屋の前まで来ると、中から、シヅ子とシゲ子の会話が聞こえて来る。「……なぜ、お酒を飲むの?」、「……お父ちゃんはね、お酒が好きで飲んでいるのでは、ないんですよ。あんまりいい人だから、だから、……」、「……いいひとは、お酒を飲むの?」、「……そうでもないけど、……」、「……お父ちゃんは、きつと、びっくりするわね」、「……おきらいかも知れない。ほら、ほら、箱から飛び出した」、「……セツカチピンチャンみたいね」、「そうねえ」と、シヅ子の、しんから幸福そうな低い笑い声が聞えて来ました。

自分は、ドアを細くあけて中をのぞいて見ますと、白兎の子でした。ぴよんぴよん部屋中を、はね廻り、親子はそれを追っていました。(……幸福なんだ、この人たちは。自分という馬鹿者が、この二人のあいだにはいって、いまに二人を滅茶苦茶にするのだ、つましい幸福。いい親子。幸福を、ああ、もし神様が、自分のような者の祈りでも聞いてくれるなら、いちどだけ、生涯にいちどだけでいい、祈る)とある。そして、自分は、そこうづくまって合掌したい気持でした。そつと、ドアを閉じ、自分は、また銀座に行き、それっきり、そのアパートには帰りませんでしたとある。

さて、太宰治は、なぜ、このような場面を描いたのかという問題であるが、それは、次のようなことではなかったかと思う。まず、この場面に登場するのは、三人であり、一人は、酒飲みの主人公(大庭葉藏)、一人は、母親のシヅ子、そして、もう一人は、その子供のシゲ子である。それでは、この三人は、一体、誰を「象徴」しているのかと問えば、一人は、太宰治、そして、母親と娘は、実際の「妻と子供」ということになるのだろう。そして、例えば、夜、酒を飲んで家に帰って来ると、妻と子供との話し声が聞こえて来る。

そして、その妻と子供との話し声を聞いていると、「……ああ、幸福なんだ、この人たちは。自分という馬鹿者が、この二人のあいだにはいつて、いまに二人を滅茶苦茶にするのだ、つましい幸福。いい親子。幸福を、ああ、もし神様が、自分のような者の祈りでも聞いてくれるなら、いちどだけ、生涯にいちどだけでいい、祈る」とある。そして、自分は、そこにくまなく合掌したい気持ちでした。そつと、ドアを閉じ、自分は、また銀座に行き、それっきり、その家には帰りませんでした。——つまり、太宰治には、これに「似たような経験」が実際にあったということである。だからこそ、それを、まさに「ここ」（第三の手記の中）にどうしても書き残しておきたかったということである。

#### 四、遺書と心中

例えば、太宰治の「妻宛の遺書」として公表されている「三つの抜粋」があり、一つは、「美知様、誰よりもお前を愛していました」と、毛筆で書いた自筆の手紙がある。そして、多くの専門家たちは、この「手紙の内容」は、いわば「形式的なもの」に過ぎないと解釈している場合が多いかと思うが、しかし、それは、そうではなく、むしろ「心の底からの思い」と解釈する方が、遙かに正しいのである。それは、一体、なぜなのか？ それは、太宰治は、妻と子供とを巻き込んだ「無理心中」を避けているからである。それは、妻への「愛情のなさ」ではなく、それは、むしろ「妻や子供」への愛情の深さなのである。自分の「道連れ」にはできない。……自分という馬鹿者が、この二人のあいだにはいつて、いまに二人を滅茶苦茶にするのだ、つましい幸福。いい親子。幸福を、ああ、もし神様が、自分のような者の祈りでも聞いてくれるなら、いちどだけ、生涯にいちどだけでいい、祈るという心境であり、だからこそ、それっきり、家には帰っていないのである。

つまり、太宰治には、最晩年、三人の「女性」がいた。一人は、「妻」（津島美知子）であり、一人は、「愛人」（太田静子）であり、そして、もう一人は、「愛人」（山崎富栄）である。そして、まず、「妻」（津島美知子）とは「心中」はできない。なぜなら、子供がいるからである。当然、子供まで道連れにはできない。次は、「愛人」（太田静子）であるが、彼女は、『斜陽』という作品のなかで、「……私には、はじめからあなたの人格とか責任とかをあてにする気持はありませんでした。私のひとすじの恋の冒険の成就だけが問題でした。（中略）、こいしいひとの子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます。あなたが私をお忘れになっても、また、あなたが、お酒でいのちをお無くしになっても、私は私の革命の完成のために、丈夫で生きて行けそうです」とある。これでは、太宰治がたとえ彼女に「心中」を持ちかけても、一緒に死んでくれるわけではない。そこで、太宰治は、意識的にしろ、或いは、無意識的にしろ、「第三の女性」を見つけ出さなければならなかった。そして、その「第三の女性」こそは、まさに「山崎富栄」に他ならないということである。

最初、山崎富栄に出会ったのは、三月二十七日の夜、屋台のうどん屋で二、三人の友達と一緒にいる時である。そして、五月三日、太宰治は、「……死ぬ気で恋愛してみないか」と言ったという。この「言葉」、この「言葉」を軽く読み流してはいけない。つまり、ふつうであれば、「……本気で付き合ってみないか」と言うところを、なぜ、「死ぬ気で」という言葉が太宰治の「口」から飛び出てきたのだろうか？ それは、太宰治の「頭の中」

(或いは「心の中」に「死というイメージ」があつたからである。もし「死というイメージ」がなければ、絶対に出てこない「言葉」なのである。——例えば、親しくなった女性に、いきなり「……死ぬ気で恋愛してみないか」などは、とても言えない「言葉」(せりふ)である。しかも、最も大事な「急所」(つまり「核心部分」)は、次のようなところである。つまり、太宰治という人は、全生涯を通じて、自分の方から女性に積極的にアプローチすることは、極めて少ないことなのである。それは、もう「ほとんど」と言つていいほど、太宰治という人は、自分の方からではなく、むしろ相手の女性に「惚れられ」て、その女性と関係を持つというパターンなのである。それでは、「山崎富栄」の場合、なぜ、「……死ぬ気で恋愛してみないか」などという、そのような極めて「積極的な言葉」を使つたのだろうか？ それは、まさに「死が迫っている」からである。太宰治の「身体」は、もう「どうにもならないようなところまで来ていた」のである。長くは生きられない。それをはつきりと自覚していたのである。だからこそ、「……死ぬ気で恋愛してみないか」という、この「言葉」が自然と太宰治の「口」をついて、出て来たのである。

しかし、それは、最初から「自殺相手」として「山崎富栄」と付き合い始めたわけではないだろう。それは、むしろ「……最後まで自分のそばにいて、自分を補助してくる女性」として、付き合い始めたわけである。そして、太宰治の「妻宛の遺書」の二つ目の抜粋の前に、次の「未公開部分」、つまり、「……(太田という女あり、なんにも金銭の約束なし。山崎という女あり、仕事の上にも病気の上でも世話になりたり)」という文章があるという。それは、まさに「未公開」で確かめようがない。そして、二つ目の公開抜粋文章は、前文に続くものであり、「……長居するだけみんなを苦しめこちらも苦しい、堪忍して下されたく」というものである。そして、三つ目の抜粋は、「……皆、子供はあまり出来ないようにすけど陽気に育てて下さい。あなたが嫌いになったから死ぬのでは無いのです。小説を書くのがいやになったからです。みんな、いやらしい欲張りばかり。井伏さんは悪人です。……」とある。

\*

\*

ところで、太宰治の「玉川上水自殺」の動機を知る上で、最も「大事な文章」は、むしろ「富栄の日記」の方である。それを簡単に要約すると、次のような内容である。まず、二人が最初に出会つたのは、昭和二十二年(一九四七年)三月二十七日の夜、屋台のうどん屋で二、三人の友達と一緒にいる太宰治と出会う。そして、五月三日、太宰から「……死ぬ気で恋愛してみないか」と言われ、「……若し恋愛をするなら、死ぬ気でほしい」と答えたという。五月二十一日、二人は初めて結ばれる。七月十四日、日記の中で、両親宛に遺書を書く。「……太宰さんが生きている間は私も生きます。でもあの人は死ぬんですもの」とある。十一月十二日、太田静子・治子出産。大きな衝撃を受ける。やがて、私も子供が欲しいと言いつつ。そして、最後の「心中の日」(六月十三日)の日記には、「……遺書をお書きになり 御一緒につれて行っていただく みなさん さようなら 父上様 母上様 ご苦勞ばかりおかけしました ごめんなさい。(中略)、奥様すいません 修治さんは肺結核で左の胸に二度めの水が溜まり、このごろでは痛い痛いと仰言るの、もうだめなのです。みんなしていじめ殺すのです。いつも泣いていました。……」とある。

また、富栄の「正式遺書」は、次のようなものである。「……私ばかり幸せな死にかたをしてすみません。奥名(戦死の夫)と少し長い生活ができて、愛情でも増えてきました

らこんな結果ともならずにはすんだかもわかりません。山崎の姓せいに返ってから死にたいと願っていましたが……。骨は本当は太宰さんのお隣りにでも入れて頂ければ本望なのですけれど、それは余りにも虫のよい願いだと知っております。太宰さんと初めてお目もじしたとき他に二、三人のお友達と御一緒にいらつしやいましたが、お話しを伺っております時に私の心にピンピン触れるものがありました。奥名以上の愛情を感じてしまいました。御家庭を持っていらつしやるお方で私も考えましたけれど、女として生き女として死にとうございます。あの世へ行ったら太宰さんの御両親様にも御あいさつしてきつと信じて頂くつもりです。愛して愛して治さんを幸せにしてみせます。せめてもう一、二年生きていようと思つたのですが、妻は夫と共にどこまでも歩みとうございますもの。ただ御両親のお悲しみと今後が気掛りです」とある。

これらの「遺書」と「富栄の日記」などを読めば、太宰治と川崎富栄の二人の「玉川上水自殺」というのは、まさに百%全く疑いようのない「覚悟の自殺」であつたということでは、何よりもはっきりと分かるものである。——例えば、一般に、よく言われる「富栄無理心中」説というものがあるが、しかし、それは、全く考えられないことである。なぜなら、富栄の「正式遺書」の中にも、「……せめてもう一、二年生きていようと思つたのですが、妻は夫と共にどこまでも歩みとうございますもの」とあり、最後の「日記」の中でも、「……遺書をお書きになり、御一緒につれて行っていただく」とある。これらを丁寧に読めば、また、これらの「文章」が、一体、何を意味するのかと敢えて問えば、それは、まさに二人の「心中」は、「富栄」からではなく、むしろ「太宰治」の方から持ちかけたものであるという、そういう、まさに「絶対的証拠」となるものである。

また、太宰治の「狂言自殺」説というものもあるが、確かに、これまでの「四回の自殺未遂」には、そのような「疑わしい面」もないとは言えないが、しかし、今回の「五度目の自殺」だけは、間違いなく、本気であつたということである。それでは、なぜ、そうだと見えるのか？ それは、たとえ「自殺未遂」で助かつたとしても、そもそも太宰治の「身体」そのものが、すでに「……もうだめなのです。もう生きられないのです」。それを、つきりと自覚している。「太宰治」にとつて、一体、何のために「狂言自殺」など図る必要があるのか？ 全くあり得ない話である。それゆえ、もし、あり得る「話」を何か求めるならば、それは、むしろ、ただ単に「病氣」で死ぬだけなら、何の意味もない、ただの「病死」に過ぎない。そこで、やがて「死ぬ身」であるならば、むしろ「心中」という形で死にたいと、もう何度も繰り返された「想い」に、再び、強く襲われたとしても、何の不思議もない。一方、富栄は富栄で、最初から、まさに「……太宰治とともに生き、そして、太宰治とともに死にたい」と、そう願つていたのである。だからこそ、太宰治と川崎富栄の二人の「玉川上水心中」は、六月十三日の夜に、まさに「赤い糸ひも」で二人の身体をしっかりと結びつけて、恐らく、静かに「遂行された」のである。……

それでは、太宰治は、なぜ「心中」を遂行したのだろうか？、それは、「富栄の日記」の中にもあるように、「……修治さんは肺結核で左の胸に二度めの水が溜まり、このごろでは痛い痛いと言ふの、もうだめなのです。みんなしていじめ殺すのです。いつも泣いていました。……」とある。——例えば、一般に、われわれ人間というのは、たった「一つの理由」だけでは、なかなか死ねないものであり、いろいろな理由があつて、それを一言で言えば、まさに「八方ふさがり」という感じであり、それらに加えて、もう一つは、

「……この先、希望が持てない」ということである。なぜなら、何らかの「希望」が持てるなら、何も「自殺」などする必要はどこにもないからである。さらに、医学的には、その人が「自殺を図る」頃というのは、その人の「脳」自体が、すでに「う、つ、の、脳」に代わっていて、本人にもどうにもならない、いわば「う、つ、地獄」の「精神状態」に深く陥っている場合が多いのである。そして、若しもこれらがまさに「自殺」の「三大要素」であるとするならば、「自殺」する直前の太宰治の「心的状態」とは、まさにこの「自殺」の「三大要素」をすべて兼ね備えていた「心的状態」であったということである。

\*

\*

また、太宰治は、その「最晩年」において、特に「井伏鱒二」に対しては、極めて批判的になっていることは、非常によく知られているが、その「絶対的証拠」となるものが、まさに最晩年の「執筆メモ」であり、その「内容」は、次のようなものである。

\*

\*

井伏鱒二(が)、ヤメロという。足をひっぱるといふ。「家庭の幸福」ひとのうしろで、どさくさまぎれにポイントをかせいでいる。卑怯、なぜ、やめろというのか。「愛？」私は、そいつにだまされて来たのだ。人間は人間を愛することは出来ぬ。利用するだけ。思えば、井伏さんという人は、人におんぶされてばかり生きて来た。孤独のようであり、この人ほど「仲間」がないと生きておれないひとはいない。井伏の悪口を言うひとは無い。バケモノだ。阿吊<sup>ほ</sup>みたいな顔をして、作品をごまかし(手を抜いて)誰にも憎まれず、人の陰口についても、めんと向かつてはなにもいわず、わけだをのろいながらわけだをほめ、愛校心、ケツペキもくそもありやしない。最もいやしい政治家である。ちゃんとしろ。(すぐ人に向ってグチを言う。いやしいと思つたら黙つて、つらい仕事をはじめよ)。私はお前を捨てる。お前たちは、強い。(他のくだらないものをほめたり)どだい私の文学がわからぬ。わがものみたくに見えるだけだろう。聖書は屁のようなものだという。実生活の駆引きだけで生きている。イヤシイ、わたしは、お前たちに負けるかも知れぬ。しかし、私は、ひとりだ。(仲間)を作る。太宰は気違いになつたか、などという仲間を。ヤキモチ焼き、悪人、イヤな事を言うようだが、あなたは、私に、世話をしたようにおっしゃっているようだけど、正確に話しましょう。かつて、私は、あなたに気に入られるように行動したが、少しもうれしくなかつた」とある。(安藤宏「東奥日報」平成13年10月15日)

\*

\*

さて、この「文章」と「富栄の日記」(それは「みんなして、いじめ殺すのです」と「遺言の言葉」(それは「みんな、いやらしい欲張りばかり。井伏さんは悪人です」という言葉とは、ほとんど「一つに深く重なり合う内容」であり、これは、太宰治の、まさに最晩年の「本心」そのものである。――例えば、最晩年の『如是我聞』<sup>によげがもん</sup>という作品のなかで、太宰治は、次のように書いている。「……自分は、この十年間、腹が立つても、抑えに抑えていたことを、これから毎月、この雑誌(新潮)に、どんなに人からそのために、不愉快がられても、書いて行かなければならぬ。そのような、自分の意思によらぬ『時期』がいよいよ来たようなので、(中略)、自分の抗議を書いてみるつもりなのである」と。

例えば、或る「老大家」は、私の作品をとぼけていていやだといっているとか、また、或る「文豪」は、太宰は、東京の言葉を知らぬ、と言っていると、また、志賀直哉という人は、二、三日前に太宰君の『犯人』とかいうのを読んだけれども、実につまらないと

思ったね。とか、太宰は気違いになったか、その他、実にいろいろな人たちから実にいろいろな「批判や非難」などを浴びているのであり、それが、まさに富栄の日記の「みんな、いじめ殺すのです」という「言葉の真意」であり、それらに対して、今度は、太宰治自身が、その『如是我聞』のなかで、志賀直哉やその他の人たちを批判するような文章を書いたら、自分のこれまで付き合っていた先輩友人たちと、全部気まづくなっているのであり、その一人に「井伏鱒二」もいて、その「井伏鱒二」から、まさに「志賀直哉やその他の人たちを批判するような文章を書くのはヤメロ」と言われているのであり、それに対するいわば「返答」が、まさに引用した「執筆メモ」になるのである。

また、山崎富栄の最後の「心中の日」（六月十三日）の日記のなかで、最晩年の「太宰治」は、「……いつも泣いていました」とある。これは、一体、どういうことなのか？ もしろん、それは、実にいろいろなことが積み重なって、そのような「心的状態」になっていたのだろうが、その最大のものは、一体、何かと敢えて問えば、それは、次のようなことである。——つまり、太宰治という人は、その「実生活」においては、実にメチャクチャな生活をしてきた人である。それゆえ、その「メチャクチャな生活」について、他人からあれこれ言われることは、ある程度は仕方がないとしても、しかし、太宰治が骨身を削り、まさに命がけで書き上げて来た様々な「作品」、それは、太宰治が、唯一、たった一つ、これだけは自信を持ち、誇りにも思っていた、その太宰治にとって宝玉のような様々な作品」が、こともあるうに、寄ってたかつて、ずたずたに傷つけられている。——自分の「作品」に対して、いろいろ「批判」をするのはいい。「批判」をするのはいいが、しかし、「批判」をするにも、最低限の「礼儀」というものはあるだろう。お前たちのやっていることは、一体、何なのだ！ まるで太宰治を「文学界」から葬り去ろうとしているだけではないのか！ そういう「心の底からの怒り」なのである。

## 五、ヨシ子との出逢い

さて、「本文」に戻りたいと思うが、それは、次のような内容である。つまり、「……高円寺のアパートを捨てて、京橋のすぐ近くのスタンド・バアの二階に自分は、またも男めかけの形で、寝そべる事になりました。それは、そのマダムに、『わかれて来た』、それだけ言って、それで充分、つまり一本勝負はきまって、その夜から、自分は乱暴にもその二階に泊まり込む事になったのですが、おそろしい筈の『世間』は、自分に何の危害も加えませんでしたし、自分は世の中に対して、次第に用心しなくなりました。世の中という所は、そんなに、おそろしいところでは無い、と思うようになりました」とある。そして、その頃、自分に酒を止めよ、とすすめる処女がいました。「……いけないわ、毎日、お昼から、酔っていらっしやる」。バアの向いの、小さい煙草屋の十七、八の娘でした。ヨシちゃんと言ひ、色の白い、八重歯のある子でした。自分が、煙草を買いに行くたびに、笑って忠告するのです。——としが明けて厳寒の夜、自分は酔って煙草を買いに出て、その煙草屋の前のマンホールに落ちて、ヨシちゃん、たすけてくれえ、と叫び、ヨシちゃんに引き上げられ、右腕の傷の手当を、ヨシちゃんにしてもらひ、その時ヨシちゃんは、しみじみ、「飲みすぎますわよ」と、笑わずに言いました。「……やめる。あしたから、一滴も飲まない」、「ほんとう？」、「……きつと、やめる。やめたら、ヨシちゃ

ん、僕のお嫁になってくれるかい?」、「モチよ」、「……ようし、ゲンマンしよう、きつとやめる」。そうして翌(あく)る日、自分は、やはり昼から飲みました。「……ヨシちゃん、ごめんね。飲んじやった」、「あら、いやだ。酔った振りなんかして」、「お芝居が、うまいのねえ」、「……芝居じゃあないよ、馬鹿野郎。キスしてやるぞ」、「してよ」、「……いや、僕には資格が無い。お嫁にもらうのもあきらめなくちゃならん。顔を見なさい。赤いだらう? 飲んだのだよ」。「……それあ、夕日が当たっているからよ。かつごうたって、だめよ。きのう約束したんですもの。飲む筈が無いじゃないの。ゲンマンしたんですもの。飲んだなんて、ウソ、ウソ、ウソ」。薄暗い店の中に座って微笑しているヨシちゃんの白い顔、ああ、よこれを知らぬヴァジニティは尊いものだ。自分は今まで、自分よりも若い処女と寝た事がない。結婚しよう。どんな大きな悲哀(かなしみ)がそのために後からやって来てもよい。荒っぽいほどの大きな歓楽(よろこび)を、生涯にいちどでいい。処女性の美しさとは、それは馬鹿な詩人の甘い感傷の幻に過ぎぬと思っていたけれども、やはりこの世の中に生きて在るものだ。結婚して春になったら二人で自転車で青葉の滝を見に行こう、と、その場で決意し、所謂「一本勝負」で、その花を盗むの(ため)にたためらう事をしませんでした。

そうして自分たちは、やがて結婚して、それに依って得た歓楽(よろこび)は、必ずしも大きくはありませんでしたが、その後に来た悲哀(かなしみ)は、凄惨(せいさん)と言っても足りないくらい、実に想像を絶して、大きくやって来ました。自分にとって、「世の中」は、やはり底知れず、おそろしいところでした。決して、そんな一本勝負などで、何から何まできまつてしまおうような、なまやさしいところでも無かったのです。

さて、この「ヨシ子」という女性(おんな)は、一体、誰かと問えば、それはもちろん、「初代」であるが、しかし、実際の「初代」とは、その「人物設定」を変えているのである。それは、なぜか? その理由はあとにして、まず、「初代」と「ヨシ子」との基本的な「共通点」は、一体、何かと問えば、一つは、年齢設定が、ほぼ同じである。ヨシ子は、十七、八歳、初代は、十八、九歳。次に、男性経験、ヨシ子は、なし。初代も、処女だと思っていたが、実際は、そうではなかったことを後で知る。そして、もう一つは、二人とも「結婚」することになる。しかも、二人とも「姦通を犯す」ことになる。そして、太宰治は、この「妻の姦通」に深く悩み苦しむのである。それが、まさに本文の「……自分たちは、やがて結婚して、それに依って得た歓楽(よろこび)は、必ずしも大きくはありませんでしたが、その後に来た悲哀(かなしみ)は、凄惨(せいさん)と言っても足りないくらい、実に想像を絶して、大きくやって来ました」となるのである。——それでは、なぜ、その「人物設定」を変えたの(だ)ろうか? それは、この「ヨシ子の場面」というのは、われわれ人間の「罪の問題」を取り上げている内容であり、その中でも、特に「妻の姦通」こそは、最大の「テーマ」になっているのである。そこで、まだ何の罪も知らない「無垢な女性」(処女)というものを仮に設定して、われわれ人間の、いわゆる「罪の問題」をあらためて考え直してみようとする内容なのである。その「本文」は、次のようなものである。

\*

\*

その前に、「初代」の場合から見てみたいと思う。それは、『東京八景』に事細かに描かれている。「……(大学で)、或る日の事、同じ高校学校を出た経済学部の一学生から、いやな話を聞かされた。煮え湯を飲むような気がした。まさか、と思った。知らせてくれた学生を、かえって憎んだ。Hに聞いてみたら、わかる事だと思った。(中略)、すると、

Hは、半可臭い、と田舎の言葉で言って、怒ったように、ちらと眉をひそめただけ」であったが、その夜、とうとうはき出させた。学生から聞かされた事は、すべて本当であった。もつと、ひどかった。掘り下げて行くと、際限が無いような気配さえ感ぜられ、私は途中で止めてしまった。私だとて、その方面では、人を責める資格が無い。鎌倉の事件は、どうしたことだ。けれどもわたしは、その夜は煮えくりかえった。私は女を、無垢のままに救ったとばかり思っていたのである。Hの言うまを、勇者の如く単純に合点していたのである。友人たちにも、私は、それを誇って語っていた。Hは、このように気象が強いから、僕の所へ来る迄は、守りとおす事が出来たのだと。目出度いとも、何とも、形容の言葉が無かった。馬鹿息子である。女とは、どんなものか知らなかった。私はHの欺瞞を憎む気は、少しも起らなかった。告白するHを可愛いとさえ思った。背中を、さすってやりたく思った。私は、ただ、残念であったのである。私は、いやになつた。自分の生活の姿を、棍棒で粉碎したく思った。要するに、やりきれなくなつてしまつたのである。私は、(青森検事局へ)自首して出た」とある。そして、遺書を綴つた。「思ひ出」百枚である。今では、この「思ひ出」が私の処女作という事になつてゐる。自分の幼時からの悪を、飾らずに書いて置きたいと思つたのである。二十四歳の秋の事である。……

\*

\*

そして、もう一つは、二十七歳の時、太宰治が「武蔵野病院」(脳病院)に一ヶ月間、入院している時に、「初代」は、或る画家と「姦通を犯して」いた。それも、やはり『東京八景』に詳しく描かれてゐる。その年の早春、「……或る洋画家から思いも設けなかつた意外の相談を受けたのである。ごく親しい友人であつた。私は話を聞いて、窒息しそふになつた。Hが既に、哀しい間違いを、していたのである。あの、不吉な病院から出た時、自動車の中で、私の何でも無い『抽象的な放言』(それは『お前の事も信じないんだよ』に、ひどくどきまぎしたHの様子がふつと思ひ出された。私はHに苦勞をかけて来たが、けれども生きて在る限りはHと共に暮らして行くつもりでいたのだ。相談を受けても、私には、どうする事も出来なかつた。私は、誰にも傷をつけたく無いと思つた。三人の中では、私が一番の年長者であつた。私だけでも落ちついて、立派な指示をしたいと思つたのだが、やはり私は、あまりの事に顛倒し、狼狽し、おろおろしてしまつて、そのうちに洋画家は、だんだん逃げ腰になつた。私は、苦しい中でも、Hを不憫に思つた。Hは、もう、死ぬるつもりでゐるらしかつた。どうにも、やり切れなくなつた時に、私も死ぬ事を考える。二人で一緒に死のう。神さまだつて、ゆるしてくれる。私たちは、仲の良い兄妹のように、旅に出た。水上温泉。その夜、二人は山で自殺を行った」とある。

## 六、罪と姦通

さて、堀木と自分。互いに軽蔑しながら付き合ひ、そうして互いに自らをくだらなくして行く、それがこの世の所謂「交友」というものの姿だとするなら、自分と堀木との間柄も、まさしく「交友」に違ひありませんでした。自分があの京橋のスタンド・バアのマダム(マダム)の義侠心(ぎけつしん)にすがり、あの煙草屋のヨシ子を内縁の妻にする事が出来て、そうして築地、隅田川の近く、木造の二階建ての小さいアパートの階下の一室を借り、ふたりで住み、酒は止めて、そろそろ自分の定つた職業になりかけて来た漫画の仕事に精を出し、夕食後は

二人で映画を見に出かけ、帰りには、喫茶店などにはいり、また、花の鉢を買ったりして、いや、それよりも自分をしんから信頼してくれているこの小さい花嫁の言葉を聞き、動作を見ているのが楽しく、これは自分もひよつとしたら、いまにだんだん人間らしいものになる事が出来て、悲惨な死に方などせずにはなかるうかという甘い思いを幽かに胸にあたためはじめていた矢先に、堀木がまた眼前に現われました。

\*

\*

それは、「……忘れも、しません。むしろ暑い夏の夜でした。堀木は日暮れ頃、よれよれの浴衣を着て築地の自分のアパートにやって来て、きょう或る必要があつて夏服を質入したが、その質入が老母に知れるとまことに具合が悪い、すぐ受け出したいから、とにかく金を貸してくれ、という事でした。あいにく自分のところにも、お金が無かったので、例に依つて、ヨシ子に言いつけ、ヨシ子の衣類を質屋に持って行かせてお金を作り、堀木に貸しても、まだ少し余るのでその残金でヨシ子に焼酎しやうちゆうを買わせ、アパートの屋上に行き、隅田川から時たま幽かに吹いて来るとど臭い風を受けて、まことに薄汚い納涼の宴を張りました。

やがて、二人は、「言葉遊び」を始めるが、大事なものは、次のような「言葉遊び」であり、つまり、「……それは、対義語アトニムの当てっこでした。黒のアントアントニム（対義語の略）は、白。けれども、白のアントは、赤。赤のアントは、黒」と始めて、やがて、主人公よゆうせう（大庭葉藏）は、「……罪。罪のアントニムは、何だろう。これは、むずかしいぞ」、「法律さ」、「……罪つてのは、君、そんなものじゃないだろう」。罪の対義語が、法律とは！しかし、世間の人たちは、みんなそれくらいに簡単に考えて、澄まして暮らしているのかも知れませんが、「……それじゃあ、なんだろう、神か？ お前には、どこかヤソ坊主くさいところがあるからな」。「……まあそんなに、軽く片付けるなよ。もう少し、二人で考えて見よう。これはでも、面白いテーマじゃないか。このテーマに対する答一つで、そのひとの全部がわかるような気がするのだ」。「……まさか。……罪のアントは、善さ。善良なる市民。……」、「……しかし、善は悪のアントだ。罪のアントではない」。「……悪と罪とは違うのかい？」、「……違う、と思う。善悪の概念は人間が作ったものだ。人間が勝手に作った道徳の言葉だ」、「……それじゃ、やつぱり、神だろう。神、神。なんでも、神にして置けば間違いない」。「……しかし、牢屋くわやにいれられる事だけが罪じゃないんだ。罪のアントがわかれば、罪の実体もつかめるような気がするんだけれど、神、救い、愛、光、しかし、神にはサタンというアントがあるし、救いのアントは苦悩だろうし、愛には憎しみ、光には闇というアントがあり、善には悪、罪と祈り、罪と悔い、罪と告白、罪と、……嗚呼、みんなシノニム（同義語）だ、罪の対語は何だ」とある。

\*

\*

これは、非常に面白い「内容」であり、それゆえ、じっくり考えてみたいと思うが、まず、「罪とは何か？」という、最も「根源的な問いかけ」から始めてみたいと思う。

例えば、われわれ人間以外の「動物たち」に、果たして、人間のようなはつきりとした「罪の意識」というものは、あるのかどうかと問えば、それは、誰でも「ない」と答えるだろう。だとすれば、「罪の意識」というのは、言うまでもなく、われわれ人間の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）から生じて来るものである。それをもっと簡単に言えば、われわれ人間の「良心」（つまり「良い心」）から生じて来ると

言ってもよいのだろう。なぜなら、「悪い心」では、いわゆる「罪を罪とも思わない」からである。そして、一般的に言って、その社会、或いは、人間として、一般的に、「よい、正しい」とされていることを、他人であれ、自分であれ、そういうことを「言ったり、やったりした」時には、基本的には、いわゆる「罪の意識」というものは生じにくい。一方、その社会、或いは、人間として、一般的に、「よくない、正しくない」とされていることを、他人であれ、自分であれ、そういうことを「言ったり、やったりした」時にこそ、基本的には、何らかの「罪の意識」というものは、自ずと生じやすくなるということである。

つまり、太宰治がなかなか「答え」を出せずにいた、いわゆる「罪の対語」は何だ、という「問い」に対しては、次のように「答える」ことができ得るかと思う。つまり、「罪の対語」とは、すなわち、「無垢」であるが、われわれ人間の「理知的部分」(それは「知性+理性+母体のようなもの」)からこそ、いわゆる「罪の意識」というものは、自ずと生じて来るものである。——それでは、なぜ、それを「罪」と感じるのだろうか？ それは、その社会、或いは、人間として、一般的に、「よくない、正しくない」とされていることを、他人であれ、自分であれ、そういうことを「言ったり、やったりした」ことに対して、基本的には、何らかの「罪の意識」というものは、自ずと生じやすくなるのである。

つまり、われわれ人間の「理知的部分」というのは、いわゆる「知性+理性+母体のようなもの」から成り立っていることになる。そして、実に様々なことを「思考(思索)」する「知的活動」を行なっている主体である「知性」(或いは「知性的部分」というのは、いわゆる「善悪」どちらにも手を貸すことができ得るものである。また、それとほとんど同時進行的に、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等をより厳密に行なっている「理性」(或いは「理性的部分」というのも、時には悪いとは知りつつも、様々な「欲望や感情」などに負けてしまう部分でもあるわけだ。ところが、いわゆる「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)というのは、決して「悪」を欲しないし、また、「悪」とは断じて妥協できない。なぜなら、「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)を内に宿している「母体のようなもの」というのは、いわゆる「善」という意識が生まれ出づるまさに「源泉」そのものだからである。それゆえ、「悪」とはどこまでいっても妥協できないとともに、「善」だけを望んで、決して「悪」を欲しないものである。——そして、その「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)こそは、まさにわれわれ人間の「良心」そのものの「源泉」そのものでもあるということである。そして、われわれ人間の「良心」というものが、なぜ、自分の思い通りに少しもならず、その「良心の呵責」などに深く悩まされることになるのか？ と敢えて問えば、それこそは、まさにわれわれ人間の「良心」とは、すなわち、先天的な「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)の働きに他ならないという、そういう「理由」によるのである。

\*

\*

つまり、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)に、いわゆる「罪」という意識が自ずと生じて来る「源泉」そのものは、一般的には、もちろん、「知性や理性」ということになるのだろうが、しかし、実際は、さらに最も奥深くにあるであろう自分の「良心」(つまりは「善の遺伝子」)からであり、そして、太宰治の「罪の対語は何だ？」という「問い」に対しても、それは、まさに「無垢」であり、その「源泉」そのものは、まさに「善の遺伝子」(或いは「善のDNA」)ということになるのである。

## 七、衝撃の事実

さて、「話」(ストーリー)を前に進めたいと思うが、その「本文」は、次のようなものである。つまり、「……腹がへったなあ。何か食うものを持って来いよ」、「……君が持って来たらしいじゃないか!」、「……ようし、それじゃ、したへ行つて、ヨシちゃん二人で罪を犯して来よう。議論より実地検分。罪のアントは、蜜豆、いや、そら豆か」と言つて、屋上から下へと降りていくと、そこで、堀木は、まさに衝撃的な「事実」を目撃することになる。それは、「……おい! とんだ、そら豆だ。来い!」と叫び、異様に殺気立ち、ふたり、屋根から二階へ降り、二階から、さらに階下の自分の部屋へ降りる階段の途中で堀木は立ち止り、「見ろ!」と小声で言つて指差します。自分の部屋の上の小窓があいていて、そこから部屋の中が見えます。電気がついたままで、二匹の動物がいました。自分は、ぐらぐら目まいしながら、これもまた人間の姿だ、これもまた人間の姿だ、おどろく事は無い、など劇しい呼吸と共に胸の中で**眩き**、ヨシ子を助ける事も忘れ、階段に立ちつくしていました。

堀木は、大きい**咳**ばらいをしました。自分は、ひとり逃げるようにまた屋上に駆け上り、寝ころび、雨を含んだ夏の夜空を仰ぎ、そのとき自分を襲った感情は、怒りでも無く、嫌悪でも無く、また、悲しみでも無く、もの凄まじい恐怖でした。それも、墓地の幽霊などに対する恐怖ではなく、神社の杉木立で白衣の御神体に逢つた時に感ずるかも知れないような、四の五の言わさぬ古代の荒々しい恐怖感でした。自分の若白髪は、その夜からはじまり、いよいよ、すべてに自信を失い、いよいよ、ひとを底知れず疑い、この世の営みに対する一さいの期待、よろこび、共鳴などから永遠にはなれるようになりました。実にそれは自分の生涯に於いて、決定的な事件でした。自分は、まっこうから眉間を割られ、そうしてそれ以来その傷は、どんな人間にでも接近する毎に痛むのでした」とある。

これは、実に見事かつ的確な「表現」であり、恐らく、その通りであつたに違いない。そして、太宰治は、ほかのことはともかく、これだけは何が何でも絶対に書き残しておきたかつた。そうでなければ、自分は死ぬに死にきれないというほどの想があつたに違いない。それは、つまり、「……自分の若白髪は、その夜からはじまり、いよいよ、すべてに自信を失い、いよいよ、ひとを底知れず疑い、この世の営みに対する一さいの期待、よろこび、共鳴などから永遠にはなれるようになりました。実にそれは自分の生涯に於いて、決定的な事件でした。自分は、まっこうから眉間を割られ、そうしてそれ以来その傷は、どんな人間にでも接近する毎に痛むのでした」ということになるのである。

## 八、目撃後

さて、自分は起き上つて、ひとりで焼酎を飲み、それから、おいおい声を放つて泣きました。いくらでも、いくらでも泣けるのでした。いつのまにか、背後に、ヨシ子が、そら豆を山盛りしたお皿を持ってばんやり立っていました。「……なんにも、しないからつて言つて、……」、「……いい。何も言うな。お前は、ひとを疑う事を知らなかつたんだ。お坐り。豆を食べよう」。……並んで坐つて豆を食べました。嗚呼、信頼は罪なりや?

相手の男は、自分に漫画をかかせては、わずかなお金をもったい振って置いて行く三十歳前後の無学な小男の商人なのでした。さすがにその商人は、その後やっつては来ませんでしたが、自分には、どうしてだか、その商人に対する憎悪よりも、さいしょに見つけたすぐその時に大きい咳ばらいも何もせず、そのまま自分に知らせにまた屋上に引き返して来た堀木に対する憎しみと怒りが、眠られぬ夜などにむらむら起って、呻きましたとある。

これは、一体、どういうことかと問えば、それは、「……堀木が、最初、二人がセックスをしている現場を目撃した時」に、なぜ、大きい咳ばらいか何かをしなかったのか？もし大きい咳ばらいか何かをしていたら、当然のことながら、二人は、セックスを止めていたはずであり、そうであれば、自分が駆けつけた時には、もう二人の生々しい「セックス現場」など見ずにすんだはずなのに、それを何もせずに自分のところに知らせに来たということは、すなわち、堀木は、自分にわざわざ二人の生々しい「セックス現場」を見せつけるためにこそ、咳ばらいも何もせずに自分のところに知らせに来たに違いないと思うと、「……堀木に対する憎しみと怒りが、眠られぬ夜などにむらむら起って、呻きました」となるのである。——これは、例えば、「初代」の場合でも、「……知らせてくれた学生を、かえって憎んだ」とある。そして、「……その夜は煮えくりかえった。私は女を、無垢のままに救ったとばかり思っていたのである。Hの言うままを、勇者の如く単純に合点していたのである。友人たちにも、私は、それを誇って語っていた。Hは、このように気象が強いから、僕の所へ来る迄は、守りとおす事が出来たのだと。目出度いとも、何とも、形容の言葉が無かった。馬鹿息子である。女とは、どんなものだか知らなかった。私はHの欺瞞を憎む気は、少しも起らなかった。告白するHを可愛いとさえ思った。背中を、さすってやりたく思った、私は、ただ、残念であったのである。私は、いやになった。自分の生活の姿を、棍棒で粉碎したく思った。要するに、やりきれなくなってしまったのである。そして、遺書を綴った。『思ひ出』百枚である。今では、この『思ひ出』が私の処女作という事になっている。自分の幼時からの悪を、飾らずに書いて置きたいと思ったのである。二十四歳の秋の事である。……」

\* \* \*  
それでは、なぜ、われわれ人類は、いわゆる女性の「処女性」というものに、これほどまでにこだわり続けたのだろうか？ その「最大の理由」は、次のようなことである。例えば、何としても「……男性には永遠にでき得ず、女性だけにでき得ること」とは問えば、それは、まさに「子供を産む」ということであるが、その「子供」というものに対して、男たちがひたすら女性たちに乞い願ったことは、唯一、まさに100%不純物の入り交じっていない「純粋な子供」（つまり「100%自分の子」）を産んでほしいということである。もちろん、それは、産まれて来る「子供」に対してであるが、それをもっと一般的に言えば、あらゆる意味において、いわゆる「……他人の手垢が付いた女性よりは、まだ何の手垢も付いていない『無垢な女性』（処女）の方がよいということ」であり、特に「産まれて来る子供」に対しては、何の手垢も付いていない、何ら汚されていない「女性」（処女）から生まれて来ることを、何よりも乞い願ったということである。もちろん、今日では、このような「考え方」は、ほとんど「死滅」（つまり消え失せている）のである。

さて、「本文」は、「……ゆるすも、ゆるさぬもありません。ヨシ子は信頼の天才なの

です。ひとを疑う事を知らなかったのです。しかし、それゆえの悲惨。神に問う。信頼は罪なりや。ヨシ子が汚されたという事よりも、ヨシ子の信頼が汚されたという事が、自分にとってそののち永く、生きておられないほどの苦悩の種になりました。自分のような、いやらしくおどおどして、ひとの顔いろばかり伺い、人を信じる能力が、ひび割れてしまっているものにとって、ヨシ子の無垢の信頼心は、それこそ青葉の滝のようにすがしく思われていたのです。それが一夜で、黄色い汚水に変わってしまいました。見よ、ヨシ子は、その夜から自分の一顰一笑にさえ気を遣うようになりました。

自分は、人妻の犯された物語の本を、いろいろ捜して読んでみました。けれども、ヨシ子ほど悲惨な犯され方をしている女は、ひとりも無いと思いました。どだい、これは、てんで物語に何もありません。あの小男の商人と、ヨシ子とのあいだに、少しでも恋に似た感情でもあったなら、自分の気持もかえつてたすかるかも知れませんが、ただ、夏の一夜、ヨシ子が信頼して、そうして、それっきり、しかもそのために自分の眉間は、まっごうから割られ声が嘎れて若白髪がはじまり、ヨシ子は一生おろしななければならなくなつたのです。たいていの物語は、その妻の『行為』を夫が許すかどうか、そこに重点を置いていたようでしたが、それは自分にとっては、そんなに苦しい大問題ではなく、許す、許さぬ、そのような権利を留保している夫こそ幸いなる哉」とある。そして、もし、とても許す事が出来ぬと思つたなら、さつさと妻を離縁して、新しい妻を迎えたらよいし、また、それが出来ないならば、所謂「許して」、あとは我慢する外はない。いずれにしても、夫の気持一つで四方八方がまるく収まるだろうに、という気さえするのであった。

ところが、自分たちの場合、夫に何の権利も無く、考えると何もかも自分がわるいような気にして来て、怒るところか、おごごと一つも言えず、また、その妻は、その所有している希な美質に依つて犯されたのです。しかも、その美質は、夫のかねてあこがれの、無垢の信頼心というたまらなく可憐なものなのです。——無垢の信頼心は、罪なりや。唯一のたのみの美質にさえ、疑惑を抱き、自分は、もはや何もかも、わけがわからなくなり、おもむくところは、ただアルコールだけになりました。自分の顔の表情は極度にいやしくなり、朝から焼酎を飲み、齒がぼろぼろに欠けて、漫画もほとんど猥画に近いものを画くようになりました。焼酎をかうお金がほしかったのです。いつも自分から視線をはずしておろしているヨシ子を見ると、こいつは全く警戒を知らぬ女だったから、あの商人といちどだけでは無かつたのではなかるうか、また、堀木は？ いや、或いは自分の知らない人も？ と疑惑は疑惑を生み、さりとて思い切つてそれを問い直す勇氣も無く、れいの不安と恐怖にのたうち廻る思いで、ただ焼酎を飲んで酔つては、わずかに卑屈な誘導尋問みたいなものをおつかなびつくり試み、内心おろかしく一喜一憂し、うわべは、やたらにお道化で、そうして、それから、ヨシ子にいまわしい地獄の愛撫を加え、泥のように眠りこけるのでしたとある。

## 九、浮気（不倫）

さて、一般に、夫の「浮気」（不倫）、或いは、妻の「浮気」（不倫）に対しては、今なお大きな「衝撃」を以つて受け止められることが多いのが、ふつう「一般的な認識」ではないだろうか？ それは、一体、なぜなのか？ それは、次のようなことである。——ま

ず、男性の場合であれば、一つは、自分が誰よりも心から愛し、まるで宝玉のように大事と思っていた「女性」(妻)が、こともあろうに、他人の「薄汚れた手」によって、まさに「無残にも汚され、無残にもぶち壊されてしまった」という、そういう「意識」(衝撃)であり、また、一つは、それと同時に、自分が心の底から信頼(信じ)て、何の疑いも抱かずにいた「女性」(妻)に、まるで「青天の霹靂(かみなり)」「雷」のごとく、何とも「無残にも裏切られてしまった」という、まさにその「衝撃」(意識)であり、そして、もう一つは、自分の最も愛する、最も大事な「女性」(妻)を、こともあろうに、ろくでもない「他人」(男)に汚され、奪われてしまったという「意識」(衝撃)であり、それらのために、自分は、まさに「……まっこうから眉間(まげん)を割られ、いよいよ、すべてに自信を失い、いよいよ、ひとを底知れず疑い、この世の営みに対する一さいの期待、よろこび、共鳴などから永遠にはなれるようになってしまった」ということである。

それでは、夫に「浮気」(不倫)される女性の場合は、一体、どうだろうか？ まず、考えなければならぬことは、男性の場合と、女性の場合とは、その「……受ける衝撃の内容が、明らかに違う」ということである。確かに、男女ともに、心から信じていた相手に「裏切られた」ということでは、まさに「同じ」(共通した「衝撃」)を受けることになるが、しかし、男性の場合は、特に愛する「妻」が「汚された」という「意識」が非常に強く、一方、女性の場合には、そのような「意識」はあまりなく、むしろ、夫の「浮気」(不倫)を知って、女性が何よりも最初に受ける「衝撃」は、まさか「……自分の夫が浮気(不倫)をするなんて！」という想いとともに、「……どうしてなの？ なにがいけなかったのか？ なにが問題なの？ 私に女としての魅力がなくなつたということなの？ 一体、どういうことなの？」という「想い」であり、その「想い」は、女性の「頭の中」(或いは「心の中」)に絶えず、浮かんでは消えて、その女性(妻)を絶えず「悩まし苦しめ続けること」になるのである。また、一つは、「相手の女性」に対する「想い」であるが、それは、夫には妻がいることを当然知っていながらも、のうのうと夫と「浮気」(不倫)をしている「相手の女性」に対しては、絶対に「許せない」という想いになりやすいということであり、そして、もう一つは、自分(つまり「妻」)だけに「家事や育児或いは介護その他」すべてを押しつけておいて、自分(つまり「夫」)だけ「いい思い」をしているなどということは、絶対に「許さない」ということにもなるのである。

\*

\*

さて、太宰治は、その「本文」で、「……神に問う。信頼は罪なりや。ヨシ子が汚されたという事よりも、ヨシ子の信頼が汚されたという事が、自分にとってそののち永く、生きておられないほどの苦悩の種になりました」とある。この「問い」にもはっきりと答えておきたいと思う。――まず、「信頼」とは、「信じること」であるが、「……信じて、何らの問題も生じなかつた場合は、信じたこと自体に問題はなかつた」ということである。一方、「……信じて、だまされた場合、或いは、……信じて、何らかの被害を受けた場合には、信じたこと自体に何か問題があつた」ということである。つまり、「……だます方は、もちろん、よくないが、一方、安易に信じて、だまされる方にも何か問題があつた」ということである。これは、一体、どういうことを意味するのかと問えば、それは、「どういうことであれ、安易に信じることは、危険なことである」ということである。

太宰治は、ヨシ子の「疑うことを知らない無垢の心」を極めて高く評価しているが、そ

これは、それで理解できるが、しかし、「現実社会」において、「疑う精神」は、むしろ「健全な精神」であり、逆に、「安易に信じる精神」の方が、遙かに「危険な精神」となるのである。つまり、「……信じる」と自体は、罪でも悪いことでもないが、しかし、安易に信じることは、どういうことであれ、危険を孕むことになる」ということである。——もちろん、ヨシ子の「疑うことを知らない無垢の心」を、こともあろうに、無残に踏みにじった「人間」(男)は、絶対に許せないというのは、まさに「その通り」であるが、ただ、ここで大事なことは、次のようなことである。つまり、「……大事なことは、相手の言葉を安易に信じることではなく、むしろ、相手の人間性をしっかりと見極めることこそ、何よりも重要かつ大事であり、自分の身は、結局、自分でしっかりと守るしかない」のである。

\*

\*

その年の暮、自分は夜おそく泥酔して帰宅し、砂糖水を飲みたく、ヨシ子は眠っているようでしたから、自分でお勝手に行き砂糖壺を探し出し、ふたを開けてみたら砂糖は何もはいつてなくて、黒く細長い紙の小箱がはいってました。何気なく手に取り、その箱にはられてあるレットルを見て愕然としました。そのレットルは、DIAL。ジアル。自分はその頃もっぱら焼酎で、睡眠剤を用いてはいませんでしたが、しかし、不眠は自分の持病のようものでしたから、たいていの睡眠剤にはお馴染みでした。ジアルのこの箱一つは、たしかに致死量以上の筈でした。まだ箱の封を切ってはいませんが、しかし、いつかは、やる気でこんなところに、しかも、爪で半分掻きかはがして、これで大丈夫と思っていたのでしょうか。自分は、音を立てないようにそつとコップに水を満たし、それから、ゆっくり箱の封を切って、全部、一気に口の中にほうり、コップの水を落ちついて飲みほし、電燈を消してそのまま寝ました。——三昼夜、自分は死んだようになっていたそうです。医者は過失と見なして、警察にとどけるのを猶予してくれたそうです。(中略)。そして、「マダム」と、自分は呼び、「……うん、何？ 気がついた？」、自分は、ぼろぼろ涙を流し、「……ヨシ子とわかれさせて」と、自分でも思いがけなかった言葉が出ました。マダムは身を起し、幽かなため息をもらしました。それから、また、「……僕は、おんなのいないところに行くんだ」と言うのと、うわっはっは、とまず、ヒラメが大声を挙げて笑い、マダムもクスクス笑い出し、「うん、そのほうがいい」と、ヒラメは、いつまでもだらし無く笑いながら、「……女のいないところに行つたほうがよい。女がいると、どうもいけない。女のいないところとは、いい思いつきです」。——女のいないところ。しかし、この自分の阿呆くさいうわごとは、のちに到って、非常に陰惨に実現せられました。

## 十、薬物と入院

さて、東京に大雪の降った夜でした。自分は酔って銀座裏を、ここはお国を何百里、ここはお国を何百里、と小声で繰り返し繰り返し歌いながら、なおも降りつもる雪を靴先で蹴散らして歩いて、突然、吐きました。それは自分の最初の喀血でした。雪の上に、大きい日の丸の旗が出来ました。自分は、しばらくしゃがんで、それから、よごれていない箇所を雪を両手で掬い取って、顔を洗いながら泣きました。(中略)不幸。自分の不幸は、すべて自分の罪悪からなので、誰にも抗議の仕様が無いし、また口ごもりながら一言でも抗議めいた事を言いかけると、ヒラメならずとも世間の人たち全部、よくもま

あそんな口がきけたものだと思え、呆れかえるに違いないし、自分はいったい俗にいう「わがままもの」なのか、またはその反対に、気が弱すぎるのか、自分でもわけがわからないけれども、ともかく罪悪のかたまりらしいので、どこまでも自らどんどん不幸になるばかりで、防ぎ止める具体策など無いのです。

自分は立って、取り敢えず何か適当な薬をと思い、近くの薬屋には行って、その奥さんと顔を見合せると、その見張った眼には、驚愕の色も嫌悪の色も無く、ほとんど救いを求めるような、慕うような色があらわれていたのです。そして、ふと、その奥さんは松葉杖をついて危かしく立っているのに気がつき、お互いの不幸を敏感に感じ合いながら、お互いの眼には涙があふれていました。それっきり、一言も口をきかずに、自分はその薬屋を出て、翌日、再び、あの薬屋に行き、こんどは笑いながら、奥さんに、実に素直に今迄のからだ具合を告白し、相談しました。奥さんは、未亡人で、男の子がひとり、医大にはいったが、まもなく父と同じ病にかかり、休学入院中で、家には中風の舅が寝ていて、奥さん自身は五歳の折、小児麻痺で片方の足が全然だめなのでしたとある。

そして、松葉杖をコトコトと突きながら、自分のためにあっちの棚、こっちの引出し、いろいろと薬品を取そろえてくれましたが、最終的には、モルヒネの注射液でした。酒よりは、害にならぬと奥さんも言い、自分もそれを信じて、何の躊躇も無く、自分は自分の腕に、そのモルヒネを注射しました。不安も、焦燥も、はにかみも、綺麗に除去せられ、自分は甚だ陽気な能弁家になるのです。そうして、その注射をすると自分は、からの衰弱も忘れて、漫画の仕事に精が出て、自分で画きながら嘖き出してしまふほど珍妙な趣向が生れるのでした。一日一本のつもりが、二本になり、四本になった頃には、自分ももうそれが無ければ、仕事が出来ないようになっていました。そして、どこまでもエスカレートして、その薬を手に入れるために、奥さんとも関係を持ち、薬代の借りもおそろしいほどの額にのぼり、既に自分は完全な中毒患者になっていました。

そして、「……死にたい、いつそ、死にたい、もう取り返しがつかないんだ。どんな事をして、何もしても、だめになるだけなんだ、恥の上塗りをするだけなんだ。自転車で青葉の滝など、自分には望むべくも無いんだ、ただけがらわしい罪にあさましい罪が重なり、苦悩が増大し強烈になるだけなんだ、死にたい、死ななければならぬ、生きているのが罪の種なのだ、などと思いつめても、やっぱり、アパートと薬屋の間を半狂乱の姿で往復しているばかりなのでした。——地獄、この地獄からのがれるための最後の手段、それは、故郷の父あてに長い手紙を書いて、自分の実情一さいを告白する事にしましたが、待てど暮せど何の返事も無く、今夜、十本、一気に注射し、そうして大川に飛び込もうと、ひそかに覚悟を決めたその日の午後、ヒラメが、悪魔の勘で嗅ぎつけたみたいに、堀木を連れてあらわれました。「……お前は、喀血したんだってな」と、いままで見たことも無いくらいに優しく微笑みました。彼のその優しい微笑が、ありがたくて、うれしくて、その優しい微笑一つで、自分は完全に打ち破られ、葬り去られてしまったのです。自分は自動車に乗せられ、ヨシ子もいれて四人、自分たちは、ずいぶん永いこと自動車にゆられ、あたりが薄暗くなった頃、森の中の大きい病院の、玄関に到着しました。

女のいないところへ行くという、あのジールを飲んだ時の自分の愚かなうわごとが、誠に奇妙に実現せられたわけでした。その病棟には、男の狂人ばかりで、看護人も男でしたし、女はひとりもいませんでした。いまはもう自分は、罪人どころではなく、狂人です。

た。いいえ、断じて自分は狂ってなどいかなかったのです。一瞬間といえども、狂った事は無いんです、けれども、ああ、狂人は、たいてい自分の事をそう言うものだそうです。つまり、この病院にいれられた者は気違い、いれられなかった者は、ノーマルという事になるようです。神に問う。無抵抗は罪なりや？ここに連れて来られて、狂人という事になりました。いまに、ここから出ても、自分はやっぱり狂人、いや、廃人という刻印を額に打たれる事でしょう。人間、失格。もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。

さて、太宰治は、実際に車に乗せられる時は、少しは抵抗はしたようですが、結局は、車に乗せられ、そして、いわば「武蔵野病院」の、まさに「鍵のかかる病棟」に一ヶ月間入院させられてしまうのである。それはもちろん、太宰治の「身体」にとつては、極めてよかつたことであり、結果として、まさに「根治」することができたわけだが、しかし、一方、太宰治の「精神」にとつては、極めて大きな「衝撃」であり、それは、他人の目からみれば、「……自分は、ただの狂人、あるいは、ただの廃人にしか見えていないのか！」という「驚愕」とともに、病院を出た後も、いわゆる「かつてそういう病院にいたこと」があるという、そういう「刻印」(つまり「レットテル」を張られてしまい、そして、なにかにつけて、いろいろな人たちから、直接的であれ、あるいは、間接的であれ、例えば、「……それは、仕方がないよ、彼は、もともとそういうところにいたことのある人間なのだから」などというような、そういう「言われ方」をされるようになるのである。

#### 十一、田舎での療養

さて、ここ(病院)へ来たのは初夏の頃で、それから三つき経ち、庭にコスモスが咲きはじめ、思いがけなく故郷の長兄が、ヒラメを連れて自分を引き取りにやつて来て、自分たちはもうお前の過去は問わぬ、生活の心配もかけないつもり、何もしなくていい、その代わり、東京から離れて、田舎で療養生活をはじめてくれ、と言うのであった。そして、自分の生まれ育った町から汽車で四、五時間、南下したところに、東北には珍しいほど暖かい海辺の温泉地があつて、その村はずれの、かなり古い家らしく壁は剥げ落ち、柱は虫に食われ、ほとんど修理の仕様も無いほど茅屋を買いつつて自分に与え、六十に近いひどい赤毛の醜い女中をひとり付けてくれました。

それから三年と少し経ち、胸の病気のほうは一進一退、痩せたりふとったり、血痰が出たり、きのう、テツにカルモチンを買つておいで、と言って、村の薬屋にお使いにやつたら、いつもの箱と違う形の箱のカルモチンを買つて来て、べつに自分も気にとめず、寝る前に十錠のんでも一向に眠くならないので、おかしいなと思つているうちに、おなかの具合がへんになり急いで便所へ行つたら猛烈な下痢で、しかも、それから引続き三度も便所にかよつたのでした。不審に堪えず、薬の箱をよく見ると、それはへノモチンという下剤でした。自分は仰向けに寝て、おなかに湯たんぽを載せながら、テツにこごとを言つてやろうと思ひました。「……これは、お前、カルモチンじゃない。へノモチン、という」と言いかけて、うふふふと笑つてしまいました。(中略)、眠ろうとして下剤を飲み、しかも、その下剤の名前は、へノモチン。……いまは自分には、幸福も不幸もありません。ただ、一さいは過ぎて行きます。自分がいままで阿鼻叫喚で生きて来た所謂「人間」の世界に於いて、たった一つ、真理らしく思われたのは、それだけでした。ただ、一さいは過

ぎて行きます。自分はことし、二十七になります。白髪がめつきりふえたので、たいいていの人から、四十以上に見られます。……

\*

\*

さて、ここで面白いと思うことは、主人公（大庭葉蔵）は、「……これは、お前、カルモチンじゃない。へノモチン……」と言いかけて、うふふと笑ってしまいましたとあるが、この「場面」は、次のようなことである。

まず、一つは、「カルモチン」と「へノモチン」、これは非常によく似た感じの「言葉」であり、それゆえ、間違えるのも仕方なく、むしろ当然であり、また、一つは、「睡眠薬」（カルモチン）ではなく、「下剤」（へノモチン）を飲んだのだから、眠れないのは当然であり、また、猛烈な下痢で、三度も便所トイレに行くのも、むしろ当然である。そして、もう一つは、「カルモチン」と「へノモチン」、この「二つの言葉」の偶然的「遭遇」（組み合わせ）の面白さとともに、特に「下剤」に「へノモチン」という薬品名が付いていることの面白さが加味されて、この話を聞けば、誰でも思わず笑わずにはいられないものがあるのである。しかも、ここで最も大事なことは、——この「原稿」を書きながら、太宰治自身、実際にうふふと笑っているのである。うふふと笑いながらこの部分を書いているのである。しかも、それは、太宰治だけではなく、実は、そばにいる「川崎富栄」までも、恐らく、この「原稿」を読みながら、ばからしいと思いがながらも、一緒にクスクスと笑っているのである。——それはともかく、「……いまは自分には、幸福も不幸もありません。ただ、一さいは過ぎて行きます。自分がいままで阿鼻叫喚あびきょうわんで生きて来た所謂『人間』の世界に於いて、たった一つ、真理らしく思われたのは、それだけでした」とあるが、太宰治にとって、「……たった一つ、真理らしく思われたのは……」、それは、「……ただ、一さいは過ぎて行きます」ということだけだったということである。

## 十二、あとがき

ところで、「あとがき」で、「……あのひとのお父さんが悪いのですよ」、「……私たちの知っている葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さえ飲まなければ、いいえ、飲んでも、……神様みたいないい子でした」とある。これは、一体、どのような「意味合い」を含む言葉になるのだろうか？ まず、「……あのひとのお父さんが悪いのですよ」と言っている。これは、一体、何を言おうとしているのだろうか？ それは、恐らく、次のようなことではないかと思う。——まず、われわれ人間の、いわゆる「人間形成」というものは、誰でもそうであるように、一つは、「遺伝的要素」と、もう一つは、その「環境的要素」（つまり「生い立ち」）から極めて大きな影響を受けて形成されるものである。それゆえ、太宰治も決して例外であるはずもなく、太宰治がいかに太宰治らしい「人間形成」をするためには、一つは、「遺伝的要素」と、もう一つは、その「環境的要素」（つまり「生い立ち」）から極めて大きな影響を受けているということである。それでは、その「幼少期」は、一体、どういふものであったかと問えば、それは、まさに県下（青森県）有数の大地主の十番目の子として生まれ、そして、「……叔母おばについての追憶はいろいろあるが、その頃の父母の思い出は生憎と一つも持ち合せない」とある。つまり、太宰治という人は、いわゆる両親の「愛情」は、直接はほとんど受けておらず、生

まれてから、すぐに「乳母」に一年足らず育てられ、その後の「子育て」は、ほとんど「叔母」と「子守（たけ）」（満二歳頃から）が行なっていたことになる。しかも、その「遊び相手」は、ほとんど「女の子」であり、それゆえ、「男性的環境」というよりは、むしろ「女性的環境」のなかで育ったということになるのである。

また、三度三度の食事の時には、必ず、「末席」にすわらされたということ。それは、例えば、家族のなかで自分などいてもいなくてもいいような存在として思えてくる、そういう、いわば「日陰者意識」というものを自然と生み育てたことになるのかも知れない。また、太宰治は、「……僕には父の退廃的な放蕩の血がぬらぬらと流れている」とも言っている。もちろん、どこまでがどうかは分からないが、「放蕩」とは、すなわち、「……酒や女遊びにふけること」であり、そのような「放蕩の血」は、まさに「父親から受け継いでいる」（つまり「遺伝的要素」である）とも言っている。そして、もう一つは、これが「最大の理由」だと思うが、やはり太宰治の「生い立ち」であり、それは、県下（青森県）有数の大地主の十番目の子として生まれ附いていながらも、結局は、両親の「愛情」を直接受けることもなく、生まれると、すぐに「乳母」に一年足らず育てられ、その後の「子育て」は、ほとんど「叔母」と「子守（たけ）」（満二歳頃から）が行なっていたことになる。しかも、その「叔母」は、小学校に入る頃、五所川原へと「分家」してしまい、一方、「たけ」も、いつの間にか、遠くの町へと「嫁」に行ってしまった、まさにその「心の拠り所」（或いは「心の支え」というものが、突然、二人ともいなくなってしまった）ということである。この「喪失感」、つまり、まさに「心の拠り所」（或いは「心の支え」）であったものが、突然、二つとも消えてしまったという意識は、太宰治の「心の中」に「決定的な影響」（つまり「暗い影」を落としてしまった。しかも、そうしたのは、恐らく、「両親」（つまり「懐くのを恐れて」）であるに違いなく、しかも、その「両親」は、自分を直接「育てよう」ともしなかった。つまり、「……私は子供の頃、妙にひがんで、自分を父母のほんとうの子ではないと思いついていた事があった」とか、また、「……兄弟中で自分ひとりだけが、のけもんになされているような気がしていた」ともある。その他、そのような様々な「想い」が積み重なれば、やがて「両親」への「不信」（つまり「親が信じられない」という意識）というものが自然と芽生えはじめ、そして、その「意識」は、やがては「人間が信じられない」という「意識」へと大変心していくのである。

### 十三、実際の推移（経歴）

さて、太宰治は、子供の頃から、実に数多くの「本」（書物）などを好んで読むという「積み重ね」によって、太宰治の「脳の発達」に極めて「大きな影響」を与えることになる。その一つは、小学校の「成績」は、開校以来だと騒がれるような、いわば「神童」になっていくとともに、もう一つは、様々な「空想」などを好むような早熟多感な少年となり、やがて、「中学三年」（十六歳頃）から「作家志願」へとなっていく。そして、青森中学（四年）、弘前高等学校（三年）は、級友たちと同人雑誌などをつくり、いろいろな小説を書くようになるが、一方、高校三年の秋頃から左翼思想にも興味を持ち、そのような中で、自分の「家」は、祖父の「金貸し」（や「油売り」という形で地元の土地を搾取して、財産を成した、いわば成り上りの「大地主」に過ぎないという「意識」にも、遅かれ

早かれ、襲われることになるのである。そのような理由かどうかは判別し難いが、二十歳の時に、最初の「カルモチン自殺」を図っている。それは、「津島家への嫌悪感」とともに、太宰治の「自虐的な言動」を生む「一つの要因」にもなっているのかも知れない。そして、大学時代には、朝から晩まで「非合法活動」を活発に行なうようになる。そして、二十一歳の時に、知り合った銀座のカフェの女性と鎌倉で自殺は図るが、相手の女性は死に、自分だけ助かる。——太宰治は、何度も「自殺」を図っている。その「最大の要因」は、やはり「精神が不安定」だからであり、それでは、その「精神の不安定」を生み出しているものは、一体、何かと敢えて問えば、それは、これという確かな「心の拠り所」（或いは「心の支え」というものが、どこか「弱い」からである。本来であれば、それは、まさに「親」（父母）や「兄弟」（姉妹）或いは「祖父母」などが、その役割を果たすはずのものであるが、太宰治の場合には、それらの「絆」が、どこか「弱かった」ということになるのかも知れない。

さて、『人間失格』という作品は、最後は、薬物に深く依存するようになった太宰治を救うために、二十七歳の時に、だまされて、「精神病院」に入院させられることになるが、そのことが、つまり、太宰治自身は、「……自分の精神状態は、全くの健全状態であると固く信じていた」にも関わらず、他人の目から見れば、「……自分は、まさに狂人、或いは、廃人と見られていたこと」に大きなショックを受けて、やがて、「human lost」を書き、それから八年後、昭和二十三年（一九四八年）の、三月から五月にかけて、それは、死ぬ一ヶ月前までに、まさに『人間失格』という作品を書き上げたということである。——それは、つまり、外から見た「太宰治」（つまり「外的事実」としての「太宰治」という人間、それは、まさに他人から見た「太宰治」という人間であるが、それは、こんなふうに見えていたかも知れないが、しかし、内から観た「太宰治」（つまり「内的事実」としての「太宰治」という人間、それは、まさに自分自身が観た「太宰治」という人間であるが、それは、むしろ「こういう人間であった」という、まさに誕生から二十七歳（さらに晩年までをも含めた）「内的世界」の遍歴の極めて素直な「告白文」（厳密には「虚実入り交じった告白文」）になっているということである。

## 七、思ひ出

ところで、『思ひ出』という作品は、次のような「内容」で終わっている。それは、「……正月がすぎで、冬やすみも終りに近づいた頃、私は弟とふたりで、文庫蔵へはいってさまざまな蔵書や軸物を見てあそんでいた。（中略）、しばらくして、みよが最近私の母のお供をして、叔母の家へでも行ったらしく、そのとき、叔母と三人してうつした写真のようであった。母がひとり低いソファに控って、そのうしろに叔母とみよが同じ背たけぐらいで並んで立っていた。背景は薔薇の咲き乱れた花園であった。（中略）、みよは、動いたらしく顔から胸にかけての輪郭がぼうとしていた。叔母は両手を帯の上に組んでまぶしそうにしていた。私は、似ていると思った」という文章で終わっている。——まず、ここに登場する「みよ」（モデルは「トキ」という女性は、家の「女中」であったが、実際、「太宰治」（当時十七歳）は、その「女中」に心惹かれて「恋心」を抱き、そして、思い切って、一緒に東京に行こうと誘うのだったが、「女中」は、実家に帰ってしまい、その

ままになってしまったという事件（出来事）があったのである。そして、ここで最も大事なところは、「……みよは、（叔母に）似ている（な）」と「思った」という部分であり、それは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。

つまり、それは、太宰治が、心の底から恋い慕っていたのは、実は「叔母」であったということである。つまり、「叔母」は、いわば「育ての親」（実質的には「母親」そのもの）であり、それは、幼い太宰治にとって、まさに「叔母」の愛情を十分に受けて育ち、それゆえ、その「叔母との関係」から、初めて、最も根源的な「信賴関係」（つまり「人間が信じられるという意識」というもの）から、最も根源的な「信賴関係」（つまり「人間が信じられるという意識」というもの）は、自ずと形成されたということである。それゆえ、太宰治にとって、この世で心の底から「信じられる人間」というのは、一人は、まさに「叔母」であり、そして、もう一人は、「たけ」という子守」だけであったと言ってもよいほどである。それゆえ、太宰治にとつて、二人の存在は、何者にも代え難いものであり、その一人である「叔母」という女性は、夜の「添い寝」をしてくれた、まさに実質的な「母親」そのものであり、それゆえ、太宰治が、心の底から恋い慕っていたのは、一人は、「たけ」という子守」であり、そして、もう一人は、まさに「叔母」であったという結論になるのである。

それは、みよの顔はぼうとしてとあるが、それは、彼女への関心がうすれて来ていることを暗に示しているとともに、一方、叔母の顔は、逆に、まぶしそうにしていたとある。それは、未だにまぶしい存在だからであり、そして、母の顔については、何も書いてはいない。それは、これという関心がないからである。このような「表現の仕方」にも、太宰治の「心」は、はっきりと表れているのである。

## 八、斜陽

ちなみに、太宰治には『斜陽』という有名な作品もあるが、それは、敗戦直後の、昭和二十二年に書かれたものであり、その作品の「最後の部分」は、次のような「内容」になっている。つまり、「……私には、初めからあなた（太宰）の人格とか責任とかをあてにする気持はありませんでした。私のひとすじの恋の冒険の成就だけが問題でした。そうして、私のその思いが完成せられて、もういまでは私の胸のうちは、森の中の沼のように静かでございます。——犠牲者、道德の過渡期の犠牲者、あなたも、私も、きっとそれなのでございましょう。私は、これまでの第一回戦では、古い道德をわずかながら押しのけ得たと思っています。そうして、こんどは、生れる子と共に、第二回戦、第三回戦をたたかうつもりでいるのです。——こいしいひとの子を生み、育てる事が、私の道德革命の完成なのでございます。あなたが私をお忘れになっても、また、あなたが、お酒でいのちをお無くしになっても、私は私の革命の完成のために、丈夫で生きて行けそうです。あなたの人格のくだらなさを、私はこないだも或るひとから、さまざま承りましたが、でも、私にこんな強さを与えて下さったのは、あなたです。私の胸に、革命の虹をかけて下さったのはあなたです。生きる目標を与えて下さったのは、あなたです。私はあなたを誇りにしていますし、また、生れる子供にも、あなたを誇りにさせようと思っています。私生児と、その母。けれども私たちは、古い道德とどこまでも争い、太陽のように生きるつもりです。

どうか、あなたも、あなたの闘いをたたかい続けて下さいまし。革命は、まだ、ちっとも、何も、行われていないのです。もっと、もっと、いくつもの惜しい貴い犠牲が必要のよう  
でございます。

私はもうあなたに、何もおたのみする気はございませんが、一つだけ、おゆるしをお願い  
したい事があるのです。それは、私の生れた子を、たったいちどでよろしゅうございます  
から、あなたの奥さまに抱かせていただきたいのです。そうして、その時、私にこう言わ  
せていただきます。『……これは、直治（弟）が、或る女のひとに内緒に生ませた子です  
の』。なぜ、そうするのか、それだけではどなたにも申し上げられません。いいえ、私自身  
にも、なぜそうさせていたできたのか、よくわかっていないのです。でも、私は、どう  
しても、そうさせていただかなければならないのです。ご不快でしょうか、ご不快でも、  
しのもんでいただきます。これが捨てられ、忘れかけられた女の唯一の幽かないやがらせと  
思召し、ぜひお聞きいれのほど願います」とある。

さて、これらの「内容」は、一体、何を意味するのかと言えば、それは、「男性」（或  
いは「人間」）に安易に頼って生きるのではなく、むしろ、自分で考え、自分で判断し、  
自分の「意志」で生きようとする、そういう女性の「自立」宣言になっているのかも知れ  
ない。——つまり、『斜陽』という作品のなかの「母親」という存在は、「男性」（或いは  
「人間」）に依存し、それに素直に従って生きる「生き方」の「象徴」であり、一方、「姉」  
という存在は、「男性」（或いは「人間」）に安易に依存するのではなく、むしろ、自分の  
「意志」で生きようとする、いわば「自立する女性」というものの「象徴」になっている  
のかも知れない。その後、「時代」（つまり「戦後の社会」）というものは、まさに「……  
学生運動、ウーマンリブ、男女平等、女性の社会進出、そして、女性のめざましい活躍」  
へと、結果として、そのように推移していくのである。

ただ、ここで最も「解り難い」のは、「……私の生れた子を、たったいちどでよろしゅ  
うございますから、あなたの奥さまに抱かせていただきたいのです」とある。これは、一  
体、どういうことなのか？ これは、もう誰にも「絶対に解けない難問中の難問のよう  
に、解ける」が、しかし、それを敢えて解いてみれば、それは、次のようなことではないかと  
思う。——つまり、女主人公のモデル（太田静子）という人は、「……こいしいひとの子  
を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます」と言っている。当時、「正  
妻の子供」と「愛人の子供」とでは、社会的にも、個人的にも、非常にはつきりとした「区  
別（差別）」があったかと思う。それは、今日でも、なおも「そんなのかも知れない」。  
それは、「心情的にはよくわかる」ことではあるが、一方、法の下では「すべての人間は  
平等」であるという、そういう「憲法上の精神」から考えると、いわゆる「正妻の子供」  
と「愛人の子供」との間に、最初から絶対的な「区別（差別）」があるというのは、ほん  
とくに正しいことなのかどうかという極めて「難しい問題」が生じることになるかと思う。  
女主人公のモデル（太田静子）という人は、一体、どこまで「深く考えていた」かは判別  
しがたいが、いわゆる「正妻の子供」も「愛人の子供」も、法律上、どちらも「同じ人間」  
であることを確立させること。そして、それを、社会的にも、個人的にも、広く世間に認  
知させるようにすること。それが、まさに彼女の「道徳革命」の究極の完成になるのかど  
うか？ もちろん、そこまでは、考えてはいなかった。その「絶対的証拠」となるものが、  
まさに「……私の生れた子を、たったいちどでよろしゅうございますから、あなたの奥さ

まに抱かせていただきたいのです」という表現になるのである。つまり、女主人公のモデル（太田静子）という人が、ここで考えていることは、「正妻の子供」と「愛人の子供」、確かに、「母親」は違つてはいるが、しかし、同じ「太宰治」の子供であることに変わりはない。それゆえ、「……たつた一度だけいい、この子を太宰治の子として抱いて欲しい」ということであり、それは、いわゆる「父親」（太宰治）の認知は、実際受けることになるが、一方、「正妻」（津島美知子）の認知は、永遠に得られるはずがない。それは、誰よりもよく分かっている。だからこそ、「……これは、直治（弟）が、或る女のひとに内緒に生ませた子ですの」という形（嘘）にして、しかし、結果としては、「……奥さんに、たつた一度だけでも、この子を（太宰治の子として）抱いてもらったことになる」ので、自分（それは「太田静子」としては、それでもう十分であるということになる）だろう。

## 九、津軽

最後に、『津軽』という作品についても、ほんの少しばかり考えてみたいと思うが、その『津軽』という作品の冒頭は、次のような書き出しで始まっている。つまり、「……或る年の春（昭和十九年の春）、私は、生れてはじめて本州北端、津軽半島を凡そ三週間ほどかかつて一周したのであるが、それは、私の三十幾年の生涯において、かなり重要な事件の一つであった。私は津軽に生まれ、そうして二十年間、津軽に於いて育ちながら、金木、五所川原、青森、弘前、浅虫、大鰐、それだけの町を見ただけで、その他の町村に就いては少しも知るところが無かったのである。……」

金木は、私の生れた町である。津軽平野のほぼ中央に位し、人口五、六千の、これという特徴もないが、どこやら都会ふうになちよつと気取つた町である。（中略）、それから三里ほど南下し、岩木川に沿うて五所川原という町が在る。この地方の産物の集散地で人口も一万以上あるようだ。青森、弘前の両市を除いて、人口一万以上の町は、この辺には他に無い。善く言えば、活気のある町であり、悪く言えば、さわがしい町である。農村の匂いは無く、都会特有の、あの孤独の戦慄がこれくらいの小さい町にも既に幽かに忍びいつている模様である。（中略）、ここには、私の叔母がいる。幼少の頃、私は生みの母よりも、この叔母を慕っていたので、実にしばしばこの五所川原の叔母の家へ遊びに来た。それは、すなわち、「作者」（つまり「太宰治」という人が、いかにどれほど「叔母」のことを心の底から恋慕っていたかがはつきりと分かる文章である。

また、『思ひ出』という作品の「冒頭」に出てくる話も、すべて「叔母の話」ばかりである。例えば、「……ある夜、叔母が私を捨てて家を出て行く夢を見た。叔母の胸は玄閑のくぐり戸いっばいにふさがっていた。その赤くふくれた大きな胸から、つぶつぶの汗がしたたっていた。叔母は、お前がいやになった、とあらあらしく眩くのである。私は叔母のその乳房に頬をよせて、そうしないでけんせ、と願いつつしきりに涙を流した、叔母が

私を揺り起した時は、私は床の中で叔母の胸に顔を押しつけて泣いていた。眼が覚めてからも、私はまだまだ悲しくて永いことすすり泣いた。叔母についての追憶はいろいろとあるが、その頃の父母の思い出は生憎と一つも持ち合せない。……とある。これこそが、まさに太宰治という「人間」（或いは「人間形成」）の「原点」そのものなのである。

そして、もう一人は、いわゆる「子守のたけ」であるが、それは、作中の最後のところに出て来るものであり、その本文は、次のようなものである。つまり、「……このたび私が津軽へ来て、ぜひとも、逢ってみたいひとがいた。私はその人を、自分の母だと思っているのだ。三十年ちかくも逢わないでいるのだが、私は、そのひとの顔を忘れない。私の一生は、その人に依って確定されたといつてもいいかも知れない。……」とある。つまり、「作者」（つまり「太宰治」）にとって、「叔母」という女性は、幼少の頃、夜の床で「一緒に添い寝してくれた女性」であり、その叔母の柔肌や乳房などにさわって、その温もりを肌で感じて育った女性であり、それゆえ、「叔母」という女性は、「作者」（つまり「太宰治」）にとって、実質上の「母親」そのものである。一方、「たけ」という女性は、「作者」（つまり「太宰治」）が、満二歳の頃から、いわゆる「子守」として雇われた女中であり、それゆえ、「たけ」という女性は、毎日、一緒に遊んだ「育ての親」なのである。つまり、本来であれば、一人の実の「母親」が、子供に添い寝をし、そして、その子供と一緒に遊ぶものであるが、「作者」（つまり「太宰治」）の場合には、夜の「添い寝」は、まさに「叔母」が担当し、そして、昼間の子供の「教育や遊び」は、まさに「子守のたけ」が担当していたということである。それゆえ、「作者」（つまり「太宰治」）には、実質上、まさに「二人の母親」がいたということになる。一人は、夜の添い寝の「叔母」であり、一人は、「子守のたけ」である。そして、「作者」（つまり「太宰治」）という人間にとって、一生涯、忘れることのできない、心の底から恋い慕っていたのは、まさにこの「二人」（つまり「叔母」と「たけ」）であったという結論になるのである。

\*

\*

富嶽百景

さて、有名な『富嶽百景』であるが、ここでは山梨県の都留高等女学校の教諭であった女性との「見合いの場面」と「月見草の場面」の所を中心に少し考えてみたいと思う。

まず、最初のところは省略して、途中からであるが、「……東京の、アパートの窓から見る富士は、くるしい。冬には、はつきり、よく見える。小さい、真白い三角が、地平線にちよこんと出ていて、それが富士だ。なんのことはない、クリスマス飾り菓子である。しかも、左の方に肩が傾いて心細く、船尾の方からだんだん沈没しかけてゆく軍艦の姿に似ている。三年まえの冬、私は或る人から、意外の事実を打ち明けられ、途方に暮れた。その夜、アパートの一室で、ひとり、がぶがぶ酒を飲んだ。一睡もせず、酒を飲んだ。あかつき、小用に立って、アパートの便所の金網張られた四角い窓から、富士が見えた。小さく、真白で、左の方にちよつと傾いて、あの富士を忘れない。窓の下のアスファルト路を、魚屋の自転車が疾駆し、おう、けさは、やけに富士がはつきり見えるじゃねえか、めっぽう寒いや、など呟き残して、私は、暗い便所の中に立ち尽くし、窓の金網撫でながら、じめじめ泣いて、あんな思いは、二度と繰り返したくない。

\*

\*

さて、昭和十一年（一九三六年）の十月、二十七歳の時、太宰治が「武蔵野病院」（脳病院）に一ヶ月間、入院している時に、「初代」は、或る画家と「姦通を犯して」いた。それもやはり『東京八景』に詳しく描かれている。翌年（昭和十二年）の三月、「……或る洋画家から思いも設けなかった意外の相談を受けたのである。ごく親しい友人であった。私は話を聞いて、窒息しそうになった。Hが既に、哀しい間違いを、していたのである。あの、不吉な病院から出た時、自動車の中で、私の何でも無い『抽象的な放言』（それは『お前の事も信じないんだよ』に、ひどくどきまぎしたHの様子がふつと思ひ出された。私はHに苦勞をかけて来たが、けれども生きて在る限りはHと共に暮らして行くつもりでいたのだ。相談を受けても、私には、どうする事も出来なかった。私は、誰にも傷をつけたく無いと思った。三人の中では、私が一番の年長者であった。私だけでも落ちついて、立派な指示をしたいと思ったのだが、やはり私は、あまりの事に顛倒し、狼狽し、おろおろしてしまつて、そのうちに洋画家は、だんだん逃げ腰になった。私は、苦しい中でも、Hを不憫に思った。Hは、もう、死ぬるつもりでいるらしかつた。どうにも、やり切れなくなつた時に、私も死ぬ事を考える。二人で一緒に死のう。神さまだつて、ゆるしてくれ。私たちは、仲の良い兄妹のように、（三月二十日の夜）、東京で薬を買い求め、上野発の夜行列車で「水上駅」に午前四時頃に到着し、その夜、谷川温泉近くで、二人は山で自殺を行った。Hを死なせては、ならぬと思つた。私は、その事に努力した（それは「薬の量を少なくした」）。Hは、生きた。私も失敗した。薬品（カルモチン）を用いたのである。私たちは、とうとう別れた。Hをこの上ひきとめる勇気が私に無かつた。捨てたと云われてもよい。人道主義とやらの虚勢で、我慢を装つてみても、その後の日々の醜悪な地獄が明確に見えているような気がした」とある。

その後、「初代」という女性は、しばらく、井伏鱒二夫婦の家に滞在していて、頃合いを見ては、井伏鱒二は、太宰治に初代と「縊りを戻したら」と何度か話を持ちかけるが、太宰治は、どうしても「別れる」ということになり、やがて、（その年の六月）、正式に

「離縁」して、初代は、青森の方へ帰郷することになる。一方、太宰治は、井伏鱒二を通じて、縁談が持ち込まれることになるが、それは、太宰治の生活ぶりややはりすさんでいたからである。(つまり「昭和十二年の三月、初代の姦通を知る。その三月二十一日、谷川温泉近くで初代との心中未遂、そして、その六月、二人は正式に「離縁」している。太宰治「二十八歳」の時である。ただ、この「谷川温泉」近くの心中未遂は、あれこれ疑問視されることも多い。……そして、離縁後の一年も太宰治の生活ぶりは、やはりすさんでいたのである。

#### 一、初代との「離縁」後の推移

さて、「……昭和十三年の初秋、思いをあらたにする覚悟で、私は、かばんひとつさげて旅に出た」とある。この時期を「要約」すると、——昭和十三年（一九三八年）、太宰（二十九歳）の時であるが、ここから太宰治の『残り十年』の「新しい生活」が始まる。まず、七月に、井伏鱒二を通じて、縁談が持ち込まれ、九月から十一月まで、太宰治は、山梨県富士河口湖の御坂峠の天下茶屋に滞在しながら、九月十八日には、山梨県の高等女学校の（地理と歴史の）教諭であった石原美知子という女性とお見合いをしている。そして、十一月六日には、婚約披露を行ない、翌、昭和十四年（一九三九年）の一月八日、太宰（三十歳）の初春、井伏鱒二の自宅で、二人は簡素な「結婚式」を挙げている。

つまり、「……私は、三十歳（満二十九歳）の初夏（縁談話後）、はじめて本気に、文筆生活を志願した。思えば、晚い志願であった。私は下宿の、何一つ道具らしい物の無い四畳半の部屋で、懸命に書いた。下宿の夕飯がお櫃に残れば、それでこっそり握りめしを作って置いて深夜の仕事の空腹に備えた。こんどは、遺書として書くのではなかった。生きて行く為に、書いたのだ。一先輩は、私を励ましてくれた。世人がこぞって私を憎み嘲笑していても、その先輩作家だけは、始終かわらず私の人間をひそかに支持して下さった。私は、その貴い信頼にも報いなければならぬ。やがて、『姥捨』という作品が出来た。Hと水上温泉へ死に行つた時の事を、正直に書いた。これは、すぐに売れた。忘れずに、私の作品を待っていてくれた編集者が一人あったのである。私はその原稿料を、むだに使用せず、まず質屋から、よそ行きの着物を一枚受け出し、着飾って旅に出た。甲州の山である。さらに思いを新たに、長い小説にとりかかるつもりであった。甲州には、満一箇年いた。長い小説は完成しなかったが、短篇は十以上、発表した。諸方から支持の声を聞いた。文壇を有りたい所だと思つた。一生そこで暮し得る者は、さいわいなる哉と思つた。翌年、昭和十四年の正月に、私は、あの先輩のお世話で平凡な見合い結婚をした。いや、平凡では無かった。私は無一文で婚礼の式を挙げたのである。甲府市のまちはずれに、二部屋だけの小さい家を借りて、私たちは住んだ。その家の家賃は、一箇月六円五十銭であった。そして、その年の秋、東京市外、三鷹市に移住した（そこに最後まで住む）。『東京八景』とある。そして、生活も精神も安定して来て、その年の二月には、「文体」に『富嶽百景』を発表、四月には、「文学界」に『女生徒』を発表している。そして、翌、三十一歳の時、五月には、「新潮」に『走れメロス』を発表している。そして、三十二歳は、一月に、「文学界」に『東京八景』を発表し、六月に、長女（園子）の誕生。そして、九月には、太田静子らの訪問を受ける。十一月に、胸部疾患の理由で徴用免除となり、そ

して、昭和十六年（一九四一年）十二月八日には、いよいよ「太平洋戦争」（つまり「真珠湾攻撃」）が勃発するのである。太宰治、三十二歳の時であった。

## 二、甲州、御坂峠、天下茶屋、三ツ峠

さて、本文に戻ると、甲州、この山々の特徴は、山々の起伏の線の、へんに虚しい、なだらかさにある。甲州の山々は、あるいは山の、げてものなのかも知れない。私は、甲府市からバスにゆられて一時間。御坂峠へたどりつく。……

御坂峠、海拔千三百メートル。この峠の頂上に、天下茶屋という、小さい茶店があつて、井伏鱒二氏が初夏のころから、この二階に、こもって仕事をして居られる。私は、それを知ってここへ来た。井伏氏のお仕事の邪魔にならないようなら、隣室でも借りて、私も、しばらくそこで仙遊しようと思っていた。（ここで気になるのは、「井伏鱒二氏」その他と「敬語」を使っている。この頃の太宰治の気持ちは、いろいろお世話になっていて、感謝の気持ちもあつたのだろう。最晩年の「執筆メモ」とは「雲泥の差」である。）——井伏氏は、仕事をして居られた。私は、井伏氏のゆるしを得て、自分その茶屋に落ちつくことになって、それから、毎日、いやでも富士と真正面から、向き合っていなければならなくなつた。この峠は、甲府から東海道に出る鎌倉往還の衝（要所）に当っていて、北面富士の代表眺望台であると言われ、ここから見た富士は、昔から「富士三景」の一つに数えられるのだそうであるが、私は、あまり好かなかつた。好かないばかりか、軽蔑さえした。あまりに、おあつらいむきの富士である。まん中に富士があつて、その下に河口湖が白く寒々とひろがり、近景の山々がその両袖にひっそり蹲（うすくま）って湖を抱きかかえるようにしている。私は、ひとめ見て、狼狽し、顔を赤らめた。これは、まるで、風呂屋のペンキ画だ。芝居の書割（かきわり）（歌舞伎などの背景画として使われる大道具の一つ）だ。どうにも註文どおりの景色で、私は、恥ずかしくてならなかつた。（……この時は、まだ雪の無い「夏富士」だからでもあつたのだろう。）

私が、その峠の茶屋へ来て二、三日経つて、井伏氏の仕事も一段落ついて、或る晴れた午後、私たちは三ツ峠へのぼつた。三ツ峠、海拔千七百米。御坂峠より、少し高い。急坂を這うようにしてよじ登り、一時間ほどにして三ツ峠頂上に達する。鳶かづら掻きわけて、細い山路、這うようにしてよじ登る私の姿は、決して見よいものではなかつたが、（中略）、やがて、頂上についていたのであるが、急に濃い霧が吹き流れて来て、頂上のパノラマ台という、断崖の縁に立つてみても、いっこうに眺望がきかない。何も見えない。パノラマ台には、茶店が三軒ならんで立っている。そのうちの二軒、老翁と老婆と二人きりで経営しているじみな一軒を選んで、そこで熱い茶を呑んだ。茶店の老婆は気の毒がり、ほんとうに生憎の霧で、もう少し経つたら霧もはれると思いますが、富士は、ほんのすぐそこに、くつきり見えませう、と言ひ、茶店の奥から富士の大きい写真を持ち出し、崖の端に立つてその写真を両手で高く掲示して、ちようどこの辺に、このとおりに、こんなに大きく、こんなにはつきり、このとおりに見えます、と懸命に註釈するのである。私たちは、番茶をすすりながら、その富士を眺めて、笑つた。いい富士を見た。霧の深いのを、残念にも思わなかつた。

三、甲府の女性との見合い（九月十八日）

その翌々日であつたらうか、井伏氏は、御坂峠を引きあげることになつて、私も甲府までおともした。甲府で私は、或る娘さんと見合いすることになつていた。井伏氏に連れられて甲府のまちはずれの、その娘さんのお家へお伺いした。井伏氏は、無難な登山服姿である。私は、角帯に、夏羽織を着ていた。娘さんの家のお庭には、薔薇がたくさん植えられていた。母堂（これは「他人の母に対する敬称」母君）に迎えられて客間に通され、挨拶して、そのうちに娘さんも出て来て、私は、娘さんの顔を見なかつた。井伏氏と母堂とは、大人同士の「よもやまの話」をして、ふと、井伏氏が、「おや、富士」と呟いて、私の背後の長押（壁に取り付けられている横木）を見あげた。私も、からだを捻じ曲げて、うしろの長押を見上げた。……富士山頂大噴火口の鳥瞰写真が、額縁に入れられて掛けられていた。まつしろい睡蓮の花に似ていた。私は、それを見とどけ、また、ゆっくりからだを捻じ戻すとき、娘さんを、ちらと見た。きめた。多少の困難があつても、このひとと結婚したいものだと思つた。あの富士は、ありがたかつた。……

井伏氏は、その日に帰京なされ、私は、ふたたび御坂に引き返した。それから、九月、十月、十一月の十五日まで、御坂の茶屋の二階で、少しずつ、少しずつ、仕事をすすめ、あまり好かないこの「富士三景の一つ」と、へたばるほど対談した。（中略）

\*

\*

その頃（十月末頃）、私の結婚の話も、一頓挫（停滞）のかたちであつた。私のふるさとは、全然、助力が来ないということがはっきり判つてきたので、私は困つてしまつた。せめて百円くらいは、助力してもらえらうと、虫のいい、ひとりぎめをして、それでもつて、ささやかでも、厳肅な結婚式を挙げ、あとの、世帯を持つに當つての費用は、私の仕事でかせいで、しようと思つていた。けれども、二、三の手紙の往復に依り、うちから助力は、全く無いということが明らかになつて、私は、途方にくれていたのである。このうちは、縁談ことわられても仕方が無い、と覚悟をきめ、とにかく先方へ、事の次第を洗いざらい言つて見よう、と私は単身、峠を下り、甲府の娘さんのお家へお伺いした。さいわい娘さんも、家にいた。私は客間に通され、娘さんと母堂と二人を前にして、悉皆（すべて）の事情を告白した。ときどき演説口調になつて、閉口した。けれども、割に素直に語りつくしたように思われた。娘さんは、落ちついて、「……それで、おうちでは、反対なのでございましょうか」と、首をかしげて私にたずねた。「……いいえ、反対というのではなく」と、私は右の手のひらをそつと卓の上に押し当て、「……おまえひとりで、やれ、という工合らしく思われた」と言つと、「……結構でございます」と、母堂は、品よく笑いながら、「……私たちも、ごらんとおりお金持ではございませんし、ことごとしい式などは、かえつて当惑するようなもので、ただ、あなたおひとり、愛情と、職業に対する熱意さえ、お持ちならば、それで私たち、結構でございます」と言うのであつた。この母に、孝行しようと思つた。かえりに、娘さんは、バスの発着所まで送つて来てくれた。歩きながら、「……どうです。もう少し交際してみますか？」と、きざなことを言つたものである。「……いいえ。もう、たくさん」と、娘さんは、笑つていた。「……なにか、質問ありませんか？」と、いよいよ、ばかである。相手は、「……でございます」と答

え、私は何を聞かれても、ありのまま答えようと思っていた。「……富士山には、もう雪が降ったでしょうか」と聞かれて、私は、その質問に拍子抜けがした。「……降りました。いただきのほうに——」と言いかけて、ふと前方を見ると、富士が見える。へんな気がした。「……なあんだ。甲府からでも、富士が見えるじゃないか。ばかにしていやがる」と、やくざな口調になってしまい、「……いまのは、愚問です。ばかにしていやがる」と言うのと、娘さんは、うつむいて、くすくす笑って、「……だって、御坂峠にいらっしやるので、富士のことでもお聞きしなければ、わるいと思って」と言うので、おかしな娘さんだと思った。

#### 四、甲府の女性との結婚話後

甲府から帰って来ると、やはり、呼吸ができないくらいにひどく肩が凝っているのを覚えた。「……いいねえ、おばさん。やつぱし御坂は、いいよ。自分のうちに帰って来たような気さえするのだ」とあるが、（これは、むろん、緊張からの開放感であるが、もう一つは、「縁談話」もうまく行った「喜びの気持ち」の表れでもあるのだろう）。夕食後、おかみさんと、娘さんと、交る交る、私の肩をたたくてくれる。おかみさんの拳は固く、鋭い。娘さんのこぶしは柔かく、あまり効きめがない。もっと強く、もっと強くと私に言われて、娘さんは薪を持ち出し、それでもつて私の肩をとんと叩いた。それ程にしてもらわなければ、肩の凝りがとれないほど、私は甲府で緊張し、一心に努めたのである。

甲府へ行って来て、二、三日、流石に私はぼんやりして、仕事する気も起らず、机のまえに坐って、とりとめのない楽書をしながら、バットを七箱も八箱も吸い、また寝ころんで、金剛石も磨かずば、という唱歌を、繰り返し繰り返して歌ってみたりしているばかりで、小説は、一枚も書きすまわることができなかった。すると、「……お客さん。甲府へ行ったら、わるくなったわね」と、朝、私が机に頬杖つき、目をつぶって、さまざまのことを考えていたら、私の背後で床の間拭きながら、十五の娘さんは、しんからいまいましそうに、多少とげとげしい口調でそう言った。私は、振り向きもせず、「……そうかね。わるくなったかね」と言うと、娘さんは、拭き掃除の手を休めず、「……ああ、わるくなった。この二、三日、ちっとも勉強進まないじゃないの。あたしは、毎朝、お客さんの書き散らした原稿用紙、番号順にそろえるのが、とつても、たのしい。たくさんお書きになって居れば、うれしい。ゆうべもあたし、二階へそつと様子を見に来たの、知ってる？ お客さん、ふとん頭からかぶって、寝てたじゃないか」と言うのであった。私は、ありがたい事だと思った。大袈裟な言いかたをすれば、これは人間の生き抜く努力に対しての、純粋な声援である。なんの報酬も考えていない。私は、娘さんを、美しいと思った。

十月末になると、山の紅葉も黒ずんで、汚くなり、とたんに一夜あらしがあつて、みるみる山は、真黒い冬木立に化してしまった。遊覧の客も、いまはほとんど数えるほどしかない。茶店もさびれて、ときたま、おかみさんが、六つになる男の子を連れて、峠のふもとの船津、吉田に買物をしに出かけて行って、あとには娘さんひとり、遊覧の客もなし、一日中、私と娘さんと、ふたり切り、峠の上で、ひっそり暮すことがある。私が二階で退屈して、外をぶらぶら歩きまわり、茶店の背戸で、お洗濯している娘さんの傍へ近寄り、「退屈だね」と大声で言つて、ふと笑いかけたら、娘さんはうつむき、私はその顔を覗い

てみて、はっと思った。泣きべそかいているのだ。あきらかに恐怖の情である。そうか、と苦が苦がしく私は、くるりと廻れ右して、落葉しきつめた細い山路を、まったくいやな気持ちで、どんどん荒く歩きまわった。——それからは、気をつけた。娘さんひとりきりのときには、なるべく二階の室から出ないようにつとめた。茶店にお客でも来たときには、私がお客さんを守る意味もあり、のしのし二階から降りていって、茶店の一隅に腰をおろしゆっくりお茶を飲むのであった。……（以下省略）

##### 五、初冠雪と月見草（十月上旬〜中旬頃）

「……お客さん！ 起きて見よ！」と、かん高い声で或る朝、茶店の外で、娘さんが絶叫したので、私は、しぶしぶ起きて、廊下へ出て見た。

娘さんは、興奮して頬をまっかかしていた。だまって空を指さした。見ると、雪。はっと思つた。富士に雪が降つたのだ。山頂が、まっしろに、光りかがやいていた。御坂の富士も、ばかにできないぞと思つた。「……いいね」と、ほめてやると、娘さんは得意そうに、「……すばらしいでしょう？」という言葉使つて、「……御坂の富士は、これでも、だめ？」としゃがんで言つた。私が、かねがね、こんな富士は俗でだめだ、と教えていたので、娘さんは、内心しよげていたのかも知れない。「……やはり、富士は、雪が降らなければ、だめなものだ」と、もつともらしい顔をして、私は、そう教えなおした。

私は、どてら着て山を歩きまわつて、月見草の種を両の手のひらに一ぱいとつて来て、それを茶店の背戸に播いてやつて、「……いいかい、これは僕の月見草だからね、来年また来て見るのだからね、ここへお洗濯の水なんか捨てちゃいけないよ」と言うと、娘さんは、うなづいた。——ことさらに、月見草を選んだわけは、富士には月見草がよく似合うと、思い込んだ事情があつたからである。御坂峠のその茶店は、謂わば山中の一軒家であるから、郵便物は、配達されない。峠の頂上から、バスで三十分程ゆられて峠の麓、河口湖畔の、河口村といふ文字通りの寒村にたどり着くのであるが、その河口村の郵便局に、私宛の郵便物が留め置かれて、私は三日に一度くらい割で、その郵便物を受け取りに出かけなければならぬ。天気の良い日を選んで行く。このバスの女車掌は、遊覧客のために、格別風景の説明をしてくれない。それでもときどき、思い出したように、甚だ散文的な口調で、あれが三ツ峠、向うが河口湖、わかさぎという魚がいます、など、物憂さうな、眩きに似た説明をして聞かせることもある。

河口局から郵便物を受け取り、またバスにゆられて峠の茶屋に引返す途中、私のすぐとなり、濃い茶色の被布を着た青白い端正の顔の、六十歳くらい、私の母とよく似た老婆がしやんと坐つていて、女車掌が、思い出したように、みなさん、きょうは富士がよく見えますね、と説明ともつかず、また自分ひとりの咏嘆ともつかぬ言葉を、突然言い出して、リュックサックしよつた若いサラリーマンや、大きい日本髪ゆつて、口もとを大事にハンケチでおおいかくし、絹物まとつた芸者風の女など、からだをねじ曲げ、一せいに車窓から首を出して、いまさらのごとく、その変哲もない三角の山を眺めては、やあ、とか、まあ、とか間抜けた嘆声を発して、車内はひとしきり、ざわめいた。けれども、私のとなりの御隠居は、胸に深い憂悶でもあるのか、他の遊覧客とちがって、富士には一瞥も与えず、かえつて富士と反対側の、山路に沿つた断崖をじつと見つめて、私にはその様が、か

らだがしびれるほど快く感ぜられ、私もまた、富士なんか、あんな俗な山、見たくもないという、高尚な虚無の心を、その老婆に見せてやりたく思つて、あなたのお苦しみ、わびしき、みなよくわかる、と頼まれせぬのに、共鳴の素振りを見せてあげたく、老婆に甘えかかるように、そつとすり寄つて、老婆とおなじ姿勢で、ぼんやり崖の方を、眺めてやつた。——老婆も何かしら、私に安心していたところがあつたのだろう、ぼんやりひとこと、「……おや、月見草」、そう言つて、細い指でもつて、路傍の一箇所をゆびさした。さつと、バスは過ぎてゆき、私の目には、いま、ちらとひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ、花卉もあざやかに消えず残つた。——三七七六峰の富士の山と、立派に相對峙し、みじんもゆるがず、なんと言うのか、金剛力草とても言いたいくらい、けなげにすつくと立つていたあの月見草は、よかつた。富士には、月見草がよく似合ふ。立ちつたあの月見草は、よかつた。富士には、月見草がよく似合ふ。

十月のなかば過ぎても、私の仕事は遅々として進まぬ。人が恋しい。夕焼け赤き雁の腹雲、二階の廊下で、ひとり煙草を吸いながら、わざと富士には目もくれず、それこそ血の滴たるような真赤な山の紅葉を、凝視していた。……（以下省略）

\*

\*

さて、太宰治は、「……三七七六峰の富士の山と、立派に相對峙し、みじんもゆるがず、なんと言うのか、金剛力草とても言いたいくらい、けなげにすつくと立つていたあの月見草は、よかつた。富士には、月見草がよく似合ふ」とあるが、これは、いかにも太宰治らしい言葉であり、それは、「……みなさん、きょうは富士がよく見えますね、と説明もつかず、また自分ひとりの咏嘆ともつかぬ言葉を、突然言い出して、リュックサックしよつた若いサラリーマンや、大きい日本髪ゆつて、口もとを大事にハンケチでおおいかくし、絹物まとつた芸者風の女など、からだをねじ曲げ、一せいに車窓から首を出して、いまさらのごとく、その変哲もない三角の山を眺めては、やあ、とか、まあ、とか間抜けた嘆声を発して、車内はひとしきり、ざわめいた。けれども、私のとなりの御隠居は、胸に深い憂悶でもあるのか、他の遊覧客とちがつて、富士には一瞥も与えず、かえつて富士と反対側の、山路に沿つた断崖をじつと見つめて、私にはその様が、からだがいびれるほど快く感ぜられ、私もまた、富士なんか、あんな俗な山、見たくもないという、高尚な虚無の心を、その老婆に見せてやりたく思つて、あなたのお苦しみ、わびしき、みなよくわかる、と頼まれせぬのに、共鳴の素振りを見せてあげたく、老婆に甘えかかるように、そつとすり寄つて、老婆とおなじ姿勢で、ぼんやり崖の方を、眺めてやつた」とある。

つまり、太宰治という人は、主役の「富士」よりは、むしろ、脇に咲く「月見草」に心を寄せたり、また、自らを「日陰者」と呼んだり、合法よりは、非合法、真面目よりは、無頼派、正義よりは、犯人意識、その他、どちらかと言えば、そういう傾向があつたのかも知れない。そして、一般に、われわれは、この世にある実に様々な事物を「あるがままに素直に受け入れて見る」というよりは、むしろ、この世にある実に様々な事物を「あれこれ理屈や知識などをふりかざして見ている傾向がある」かと思うが、それを本居宣長風に言えば、いわば「漢心」（つまり「さかしら心」ということになり、そして、いわゆる「ものあわれを知る」ということについては、本居宣長自身、次のように語っている。

つまり、「……世の中にありとしある事のさまざまを、目に見るにつけ耳に聞くにつけ、身にふるゝにつけて、其のよろづの事を心にあぢはへて、そのよろづの事の心をわが心にわきまへ知る、是れ事の心を知る也。物の心を知る也。物のあはれを知るなり。わきまへ

知る所は物の心・事の心を知るといふもの也。わきまへ知りて、其の品にしたがひて感じ  
る所が物のあはれ也。……」（『紫文要領』）とある。そして、この「文章」を何度も丁寧  
に読んでもらえれば、その「意味するところ」は、自ずと見えて来るかと思う。

例えば、「物の心」というのは、その「物」自身が本来（もともと）持っている、その  
「物」そのものがあるがままの「姿、形、雰囲気、様子、内容、特徴、その他」のことで  
あり、そのあるがままの「物」をまさにあるがままにそのまま自分の「心の中」に受け入  
れ味わった時に、自分の「心」は、一体、どのように動くのか、素晴らしいと動くのか、  
それとも、取るに足らないと動くのか、それがその、「物」に対する、その人があるがまま  
の実際の「情」の発露になるのである。それは、「事の心」というのも、全く同じことであ  
り、「事の心」というのは、その「事」（事柄）自身が本来（もともと）持っている、そ  
の「事」（事柄）そのものがあるがままの「姿、形、雰囲気、様子、内容、特徴、その他」  
のことであり、そのあるがままの「事」（事柄）をまさにあるがままにそのまま自分の「心  
の中」に受け入れ味わった時に、自分の「心」は、一体、どのように動くのか、素晴らし  
いと動くのか、それとも、取るに足らないと動くのか、それがその、「事」（事柄）に対す  
る、その人があるがままの実際の「情」の発露になるのである。……

例えば、「お祭り」という「事物」をあるがままに見聞き触れれば、まさにあるがまま  
の「お祭り」というものを、まさにあるがままに見聞き触れ味わったことになるが、その  
あるがままに見聞き触れ味わったものこそは、まさにあるがままのその「祭り」というも  
のの「事物の心」（「事の心」や「物の心」）であるということである。そして、そのある  
がままの「祭り」という「事物」を、まさにあるがままに自分の「心の中」にそのまま受  
け入れ味わった時に、自分の「心」は、一体、どのように動くのか？ 楽しと動くのか、  
それとも、哀しと動くのか、或いは、つまらないと動くのか、それがその、「祭り」という  
「事物」に対する、その人があるがままの実際の「情」の発露ということである。そして、  
一般に、「お祭り」という「事物」をあるがままに見聞き触れ味わえば、ふつう「楽しと  
心が動く」かと思うが、それがわれわれ人間のあるがままの実際の「情」の発露であり、ま  
た、「お葬式」という「事物」をそのままあるがままに見聞き触れ味わえば、ふつう「哀  
しと心が動く」かと思うが、それがわれわれ人間のあるがままの実際の「情」の発露であり、  
そのように、この世の実に様々な「事物」をあるがままに見聞き触れ味わった時に、まさ  
にあるがままに動くわれわれ人間の実際の「情」こそは、まさにわれわれ人間の「人情」で  
あり、そのわれわれ人間の「人情の機微」や物事の様々な「情趣」（しみじみとした味わ  
い）などを深く解するのが、まさに「ものあわれを知る」ということである。——その  
ように、「ものあわれを知る」とは、言葉を換えれば、物事（物や事）の「本質や生命」  
（その「心」）に触れるということになるのである。

\*

\*

富士には

月見草が

よく似合ふ

冬化粧や

白雪に勝る

富士はなし

見るだけで

有り難きかな

富士の山

田子の浦ゆ

うち出でて見れば、

真白にそ富士の高嶺に

雪は降りけり

## 六、太宰治の「文体」

さて、寝る前に、部屋のカーテンをそっと開けて硝子窓越しに富士を見る。月の在る夜は、富士が青白く、水の精みたいな姿で立っている。私は溜息をつく。ああ、富士が見える。星が大きい。あしたは、お天気だな、と、それだけが幽かに生きている喜びで、そうしてまた、そっとカーテンを閉めて、そのまま寝るのであるが、あした、天気だからとて、別段この身には、なんということもないのに、と思えば、おかしく、ひとりで蒲団の中で苦笑するのだ。くるしいのである。仕事が、——純粹に運筆することの、その苦しさよりも、いや、運筆はかえって私の楽しみでさえあるのだが、そのことではなく、私の世界観、芸術というもの、あすの文学というもの、謂わば、新しさというもの、私はそれらに就いて、未だ愚図愚図、思い悩み、誇張ではなしに、身悶えしていた。

素朴な、自然のもの、従って簡潔な鮮明なもの、そいつをさっと一挙動で掴まえて、そのままに紙にうつしとること、それより他には無いと思ひ、そう思うときには、眼前の富士の姿も、別な意味をもって目にうつる。この姿は、この表現は、結局、私の考えている「単一表現」の美しさなのかも知れない、と少し富士に妥協しかけて、けれどもやはりどこかこの富士の、あまりにも棒状の素朴には閉口して居るところもあり、これがいいなら、ほていさまの置物だっていい筈だ、ほていさまの置物は、どうにも我慢できない、あんなもの、とても、いい表現とは思えない、この富士の姿も、やはりどこか間違っている、これは違う、と再び思いまどうのであった。……（以下省略）

\*

\*

これは、極めて「大事な文章」であり、まず、「……私は、三十歳（満二十九歳）の初夏（縁談話後）、はじめて本気に、文筆生活を志願した。思えば、晚い志願であった」とある。が、その時に、太宰治という人は、自分の「文体」（文章）は、一体、どのようにしたらよいのかを、まさに「本気で悩み苦しんだ」ということであり、それが、つまり、「……純粹に運筆することの、その苦しさよりも、いや、運筆はかえって私の楽しみでさえあるのだが、そのことではなく、私の世界観、芸術というもの、あすの文学というもの、謂わば、新しさというもの、私はそれらに就いて、未だ愚図愚図、思い悩み、誇張ではなしに、身悶えしていた」が、やがて、「……素朴な、自然のもの、従って簡潔な鮮明なもの、そいつをさっと一挙動で掴まえて、そのままに紙にうつしとること、それより他には無い

と思ひ、そう思うときには、眼前の富士の姿も、別な意味をもって目にうつる。この姿は、この表現は、結局、私の考えている『単一表現』の美しさなのかも知れない」と思い直すようになるのである。そして、そのような「思いや考え」などを基にして、まさに『富嶽百景』という作品は、この世に生み出されて来るのである。……

\*

\*

さて、昭和十四年（三十歳）の正月に、私は、あの先輩のお世話で平凡な見合い結婚をした。いや、平凡では無かった。私は無一文で婚礼の式を挙げたのである。甲府市のまちはずれに、二部屋へやだけの小さい家を借りて、私たちは住んだ。その家の家賃は、一箇月六円五十銭であった。そして、生活も精神も安定して来て、その年（三十歳）の二月には、「文体」に『富嶽百景』を発表、四月には、「文学界」に『女生徒』を発表している。そして、翌、三十一歳の時、五月には、「新潮」に『走れメロス』を発表している。そして、三十二歳は、一月に、「文学界」に『東京八景』を発表し、六月に、長女（園子）の誕生。そして、九月には、太田静子らの訪問を受ける。十一月に、胸部疾患の理由で徴用免除となり、そして、昭和十六年（一九四一年）十二月八日には、いよいよ「太平洋戦争」（つまり「真珠湾攻撃」）が勃発するのである。太宰治、三十二歳の時であった。

#### 七、「走れメロス」のもう一つの問題

最後に、もう一つ、ここで非常に「大事な文章」として、次のようなものがある。つまり、「……私は、三十歳（満二十九歳）の初夏（縁談話後）、はじめて本気に、文筆生活を志願した。思えば、晩い志願であった。私は下宿の、何一つ道具らしい物の無い四畳半の部屋で、懸命に書いた。下宿の夕飯がお櫃ひつに残れば、それでこっそり握りめしを作って置いて深夜の仕事の空腹に備えた。こんどは、遺書として書くのではなく、生きて行く為に、書いたのだ。一先輩は、私を励ましてくれた。世人がこぞって私を憎み嘲笑にくしていても、その先輩作家だけは、始終かわらず私の人間をひそかに支持して下さった。私は、その貴い信頼にも報いなければならぬ。やがて、『姥捨』という作品が出来た。これは、すぐに売れた。私はその原稿料を、むだに使わず、まず質屋から、よそ行きの着物を一枚受け出し、着飾って旅に出た。甲州の山である。そして、翌年、昭和十四年の正月に、私は、あの先輩のお世話で平凡な見合い結婚をした。いや、平凡では無かった。私は無一文で婚礼の式を挙げて、甲府市のまちはずれに、二部屋へやだけの小さい家を借りて、私たちは住んだ」。そして、生活も精神も安定して来て、その年の二月には、「文体」に『富嶽百景』を発表、四月には、「文学界」に『女生徒』を発表している。そして、翌、三十一歳の時、五月には、「新潮」に『走れメロス』を発表している。そして、三十二歳は、一月に、「文学界」に『東京八景』を発表し、六月に、長女（園子）の誕生。そして、九月には、太田静子らの訪問を受ける。十一月に、胸部疾患の理由で徴用免除となり、そして、昭和十六年（一九四一年）十二月八日には、いよいよ「太平洋戦争」（つまり「真珠湾攻撃」）が勃発するのである。太宰治、三十二歳の時であった。

\*

\*

さて、最後、ここで取り上げるのは、『走れメロス』の問題であり、なぜ、太宰治は、『走れメロス』を書いたのか？ 或いは、なぜ、『走れメロス』が書けたのか？ という

問題である。——というのも、太宰治という人は、その『人間失格』という作品の中なかでも、自分は、一度も「友情」というものを実感したこともなく、それゆえ、「親友」なども一人もいないと、はつきりと明言しているからである。それでは、なぜ、友情をテーマにした『走れメロス』が書けたのか？ それは、次のような理由からである。——つまり、確かに、『走れメロス』の原典（たね本）では、まさに「友情がテーマ」になっているが、しかし、太宰治の『走れメロス』という作品は、むしろ、「友情」もテーマになっているが、それに加えて、「信頼に応える」ということこそが最大の「テーマ」になっているのである。つまり、私は、「……信じられているから、走るのだ」、私は、「……信頼されているから、走るのだ」。——それでは、太宰治は、一体、誰に信頼されているというのだろうか？ それは、もちろん、奥さんもそうであるだろうが、本文では、「……私は、三十歳（満二十九歳）の初夏（縁談話後）、はじめて本気に、文筆生活を志願した。思えば、晚おそい志願であった。私は下宿の、何一つ道具らしい物の無い四畳半の部屋で、懸命に書いた。下宿の夕飯がお櫃ひつに残れば、それでこっそり握りめしを作って置いて深夜の仕事の空腹に備えた。こんどは、遺書として書くのではなく、生きて行く為に、書いたのだ。……先輩は、私を励ましてくれた。世人がこぞって私を憎み嘲笑にくしていても、その先輩作家だけは、始終かわらず私の人間をひそかに支持して下さった。私は、その貴い信頼にも報いなければならぬ」ということである。これこそは、まさに『走れメロス』の中の主人公（メロス）と全く「同じ心境」であり、私は、「……信じられているから、走るのだ」、私は、「……信頼されているから、走るのだ」。その貴い信頼に報いなければならぬ」ということである。もちろん、太宰治にとって「走る」（或いは「走り続ける」とは、すなわち、本気で、「文筆生活」に専念して、本気で様々な「作品」を書き上げるということであり、その一つに、まさに『走れメロス』という作品があったということである。

\*

\*

「参考文献」

- ※ 底本「走れメロス」 太宰治著（「青空文庫」）
- ※ 底本「人間失格」 太宰治（「青空文庫」）
- ※ 底本「姨捨」 「東京八景」 「津軽」 「斜陽」（「青空文庫」）
- ※ 底本「富嶽百景」 太宰治著（「青空文庫」）
- ※ 底本「太宰ミュージアム」（ウェブサイト・年表を一部引用・参照）